
マスターアーカイブ 機動戦士ガンダム MSV エースパイロットの軌跡
MASTER ARCHIVE
MOBILESUIT GUNDAM
MSV
ACE PILOT LOG
CAUTION
HIGH PRESSURE
AND HIGH VOLTAGE
INSTRUMENTS INSTALLED
ACCESS ALLOWED SENIOR
MASTER CLASS TEC.
QUALIFICATIONAL PERSON ONLY
DANGER
HOT EXHAUST BLASTS
KEEP AWAY FROM HAZARD AREAS
NOTICE
BACK ARMOR DISENGAGING CONTROL
MANIPULATOR HARMONIZER
ARE LOCATED BEHINDE ARMOR

マスターアーカイブ 機動戦士ガンダム MSVエースパイロットの軌跡

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT GUNDAM MSV ACE PILOT LOG

MASTER ARCHIVE
MOBILESUIT GUNDAM
MSV
ACE PILOT LOG

俗に「一年戦争」と呼ばれるジオン独立戦争は、それ以前の戦争とは明らかに異なる性質を有していたが、とりわけ大きな特徴としてミノフスキー粒子散布戦術の登場が挙げられる。そして、この新戦術とMS（モビルスーツ）に代表される機動兵器群の存在が、戦場に有視界戦闘の復古という現象をもたらした。旧世紀の世界大戦において航空機同士が演じたような格闘戦が、MSという新たな役者によって再演されたのだ。かくして戦場からは幾人ものエースパイロットが誕生、新時代の英雄としてもてはやされたのである。本書では、彼らエースの中から、ごく一部のトップエースを取り上げ、その功績や戦果、搭乗した機体について解説を試みるものである。

MASTER ARCHIVE
MOBILESUIT GUNOAM

MSV

ACE PILOT LOG

CONTENTS

006 JOHNNY RIDDEN
ジョニー・ライデン

018 GABBY HAZARD
ギャビー・ハザート

054 IAN GRADEN
イアン・グレーデン

076 TENNETH A. JUNG
テネス・A・ユング

102 LYDO WOLF
リド・ウォルフ







■エースパイロットとは

エースパイロットという概念は、航空機が戦闘行為に用いられ始めた第一次世界大戦にまで遡るものだが、その定義はというと時代や国家、組織によっても異なり、決して歴史的に一定であったわけではない。当初、フランスは10機以上の敵機を撃墜した者に対し、エースの称号を与えており、同盟関係にあったイギリスや敵国であるドイツもこれに追随したが、遅れて参戦したアメリカは5機という数字に境界を置いた。また撃墜の対象についても、航空機のみとするのか、あるいは戦闘車両など陸上兵器を含むのか、艦船類をどのようにカウントするのかなど様々な定義や解釈が存在してきた。

時代が変わり、宇宙世紀となった現在においてはどうであろうか。開戦当初、ジオン公国軍は、航宙機と宇宙艦艇を区別しつつ、それぞれに5という数字を区切りとした。航宙機5機以上の撃墜者をエースとし、宇宙艦艇5隻以上の撃沈者をシップス・エースとしたのである。ところが、当初の予想に反して戦争が長期化し、戦域が地上へと広がったことで混乱が生じる。突撃機動軍から分割編成された地球攻撃軍が独自のガイドラインを策定し、航空機と陸上兵器、海洋艦艇を個別にカウントして褒章を与え始めたのだ。さらに、大戦末期に地球連邦軍がMSの実戦投入を開始したことで、公国軍内に対MSエースという概念が出現。軍の公式記録においては、MSを航宙機や戦闘ポッドと同列に扱い、広義の戦闘機という意味ですべての撃墜数を合計してエースパイロットの称号を与える一方で、国民向けのプロパガンダ放送ではMSのみに絞った形での撃墜数を喧伝し、MSエースとして紹介する行為も行われた。



一方で、地球連邦軍においては、南極条約締結以降に全軍を通じて、MSエースという称号を明確に定義。MS5機以上の撃墜者を認定し、称号を与える制度を施行している。これはMSという新兵器に苦戦を強いられていた状況を鑑みて、自軍でも十分に対抗できることを証明する存在として、ことさら対MSエースを強調したかったという事情があるのだろう。

また、撃墜数の認定方法にも、それぞれの陣営で大きな差異があったと言われている。総じて公国軍は厳格であり、連邦軍は緩やかであったという。たとえば公国軍では撃墜スコアの認定には、僚機による証言やガンカメラの記録映像の提出が不可欠であったのに対し、連邦軍では往々にして自己申告が検証も経ずに認められる傾向にあった。これは、開戦初期において連邦軍側が劣勢であったことも影響していたのだろう。戦局が不利であればこそ、英雄の存在が欠かせないというわけだ。

ただし、大戦末期に入ると公国軍側でも撃墜スコアの認定基準が曖昧になっていたという証言もある。ジオン公国では国民向けのプロパガンダ放送において、エースパイロットたちを大きく取り上げており、ミリタリー・バランスが連邦軍側に傾き始めた頃



から、特にその傾向が顕著になっていったと言われている。そんな中で、トップエースとして紹介された者たちの撃墜スコアは、にわかには信じがたい数字にまで上昇していったのだ。たとえば公国軍のトップエース、ブレニス・オグス中佐は193機のMSを撃墜したと記録されているが、この数字も疑わしいと言わざるを得ない。連邦軍によるMSの生産が本格化したのがU.C.0079年10月以降であったことを考えると、終戦までの3ヶ月弱で200機近いMSを撃墜したことになるためだ。いかに公国軍が戦力不足に悩み、パイロットたちにオーバーワークを強いていたと言っても、毎日MSとの交戦の機会があったわけではあるまい。また仮に連日出撃したとしても、1日2機以上の撃墜が必要となるこのペースは、端的に言って異常である。僚機との共同撃墜を含んでいるのではないか、あるいは航宙機の撃墜数を合算しているのではないか、といった異論が多いのも無理からぬことであろう。

とはいえ、どれだけ疑わしい点があったとしても、両軍を通じて多くのエースパイロットが誕生したことは紛れもない事実である。綺羅星の如き英雄たちは、確かに実在したのだ。■



PRINCIPALITY OF ZEON

JOHNNY RIDDEN

ジョニー・ライデン

地球連邦軍に先駆けてMSを投入したジオン公国軍からは、多くのエースパイロットが誕生したが、その中でもとりわけ高い知名度を誇るのが、ジョニー・ライデン公国突撃機動軍終身中佐である。稲妻型のシンボルやユニコーンの意匠を用いたエンブレム、そして鮮やかな紅色で塗装された乗機から「真紅の稲妻」と呼ばれた彼は、戦場での華々しい活躍がプロパガンダ放送で繰り返し報じられたことで、公国市民から絶大な人気を集めることとなった。ただし、彼を伝説的と形容するにふさわしい存在へと昇華させたのは、その戦果でも、経歴でも、ましてや脚色含みの報道でもない。最終戦となったア・バオア・クーでの攻防戦において、MIA（戦闘中行方不明）となり姿を消してしまったという神秘性こそか、都市伝説まがいの噂話を含めて多くの逸話を生み出す要因となり、彼の存在を神格化していったのだ



JOHNN EN FILE 01







ジョニー・ライデン
公国突撃機動軍終身中佐
【軍籍番号 PM056330279A】

では、彼はいかなる人物であったのだろうか、その点を知るためにも本稿では、公国軍の公式発表を軸にしつつも、複数の関係者からの証言と連邦側の公的資料で情報を補う形式で論を進めることとする。そのため、その記述におけるいくつかの事実関係については、情報源から求められている可能性があることも、予め明記しておく　では、あらためて出生からライデンの足跡を追ってみよう。

ＵＣ0056年、ジョニー・ライデンは宇宙移民三世として、サイド3（ムンゾ）に生を受けた公国軍広報による発表を信じるのであれば、彼はスコットランド貴族の末裔にあたる由緒正しき血筋らしい　A.D 1999年にイギリスで貴族院法が可決した影響で、伯爵家としての権利を失ったライデン家の祖先たちは、その後、自由の国と謳われていたアメリカ合衆国へと移住。紆余曲折を経て、曾祖父の代でオーストラリア大陸へと渡り、その地で生まれた祖父が、やがて第一次移民者としてサイド3へと移り住んだようだ。

ともかく、サイド3では珍しいアメリカ系の血を引



MS-06C ZAKU II

MS-06Cザクll

ノオノ独立戦争開戦時点における、ノオノ公国軍の主力MS MS 06系の量産モテルとしては、A型のロールアウトを以て一応の完成を見ていたか、キノリア・ザビ大佐　当時)より、地球連邦軍かMSと同等の兵器を投入してきた場合に備え、さらなる装備の拡充を求めたため、90機程度の生産か完了した時点て量産がキャンセルされた　右肩のシールト、左肩のスパイクアーマーといった、よく知られたスタイルの装備を追加する形へと急遽、仕様変更か行われたのてある　また、これと並行して対艦攻撃を目的とした核弾頭バス一カの使用を念頭に、コクピット周りに対放射線装備か実装され、それらを盛り込んた上で仕様を確定させ、生産ラインを再稼働させている　これかMS 06Cとして知られる機体たノ・フス・エ　スとしての称号を得ることになるルウム戦役において　ノョ　一・ライデンが搭乗していたのもこのC型てあったが、塗装ハターンは標準のものてあり、外見上に目立った点はないたたし、彼の乗機については、A型として生産されたものの後にC型仕様へとレトロフィットされた機体てあったとの証言か残されている　同様の経緯を辿ったA型は、多く見積もっても60機程度であるため、この証言か事実ならは、かなり希少な機体てあったことになるたろう

ではいたか、それ以上に彼は「ムンゾ人」てあった　父親は、公国制移行以前のジオン共和国において議員を務めていた人物てあり、ジョニー少年も良家の嫡男として15歳になる頃には、すでに社交界に顔を出していたようた　一説では、当時からザビ家とも、それなりに近しい関係にあったらしい　そのためであろうか、軍部による土地強制収容に反発した近隣住民からは、軍にいいなりの議員の息子として、厳しい態度を向けられることもしばしばであったという　だが、こうした経験が軍や国家に対する不信感につながることはなかったらしい。地球連邦からの独立の気運が高まる中で少年期を過ごした彼の愛国心はゆるぎのないものであり、それは、高等教育過程の修了後、直ちに国防軍に志願したことからも伺える。U.C 0078年、ジョニー・ライデン、22歳の時である

その後、兵学校を卒業した彼は、厳しい選抜をくぐり抜け晴れてMSパイロットに抜擢。同年10月に分割編成されて間もない、突撃機動軍に配属されたのであった。

【開戦】

U.C.0079年1月3日、ジオン公国は、地球連邦政府に対して宣戦を布告した　予てより準備を進めてきた公国軍部隊は、大きく ふたつの集団に分かれ、サイド6を除くすべてのサイドに対して攻撃を開始した　当時、曹長であったジョニー・ライデンもまた、MS-06Cザクiiのパイロットとして、開戦初期の一週間戦争に従軍している。彼にとって、初めての本格的な実戦参加となったが、この時点ではまだ目ぼった戦果は挙げていない。しかし、1月14日未明より開始された一連のサイド5（ルウム）での戦闘では、一転して大戦果を記録することになる

1月14日、ライデンが所属していた突撃機動軍艦隊は、ドズル・ザビ中将麾下の宇宙攻撃軍艦隊と合流、連合艦隊を形成してサイド5宙域へと侵入した。ほどなく開始された戦闘により、サイド5を制圧した公国軍艦隊は、翌15日より11バンチ・コロニー「ワ



MS-06F ZAKU II

MS-06Fザクii

MS-06Fは、C型の性能向上案として開発が進められていたモデルである　いくつかあった改良点の内に　重量増の要因となっていた対放射線装備の除去が含まれていたため、開戦初期においては対艦戦を想定していない艦隊直衛機向けに配備されていた　つまり、F型のロールアウト当初は、C型との併用を前提に　双方が並行して製造されていたのだ　これが、南極条約の締結に伴いNBC兵器の使用が禁じられたことを受けて、核弾頭バズーカの使用による打撃力が売りであったC型の需要が急激に低下し、生産ラインは完全にF型へとシフト　結果的に、F型は数あるMS-06ファミリー機の中でも、最大の生産数を誇るベストセラー機となった　それだけに局地戦用MSなど、以後のバリエーション開発の母体となることが多く、多くの子や孫を生み出していくことになる

なお、ルウム戦役の後にジョニー・ライデンが受領した機体については諸説ある　もっとも代表的なのはF型であったとする説で、長らく真紅の稲妻　の由来となった特徴的な塗装パターンが採用されたのは、この機体からであったと言われてきた　ところが最近になって、大尉時代は5型を用いていたとする記録が相次いで発見されており、F型の運用期間は、ごく短いものであった可能性が出てきている　また、S型やFS型といった上位機種に関しては、開戦初期においては機密保持の観点からF型として運用するという情報操作が行われていたとの証言もあり　さらに真相の究明が難しくなっている状況だ



トホート〜への核パルス・エンジンの取付作業を開始した　連邦宇宙軍艦隊の果敢な抵抗により、失敗に終わっていた「ブリティッシュ作戦」――すなわちコロニーを質量弾とした、連邦本部ジャブロー基地への直接攻撃――を、再度敢行するためである。

しかし、標準時15日22時過ぎのこと、ルナツーより発したレビル中将率いる連邦軍艦隊がルウムに到着。公国軍の戦艦4隻、巡洋艦78隻、各種武装艦艇34隻という戦力に対し、連邦軍は戦艦48隻、巡洋艦163隻、揚陸艇などの小型武装艦艇118隻、輸送隊及び補助艦艇84隻という規模であったというから、コロニー落とし を阻止せんとする連邦陣営の本気度が伺えるというものだ　そして予想どおり、戦闘は熾烈を極めた　ドズル中将は、敵艦隊の襲来と同時にMS部隊を展開させ、取付作業を行う工作部隊を護衛させつつ応戦したが、戦力差は圧倒的であった

同日22時40分、このままでは前回のブリティッシュ作戦の　の舞になり兼ねないと判断したドズル中将は、やむなく「ワトホート」の弾頭化作業の中断を決意　核パルス・エンジンの取り付け作業、およびその護衛に当たっていたMSに対し敵艦隊攻撃の号令を発した。総数3000機余とも言われる全MSを、レビル中将率いる連邦軍艦隊に差し向けたのである。この判断が決定打となり、形勢は逆転　連邦軍は戦艦36隻、巡洋艦139隻を失う大損害を被ることとなる　これは連邦軍がかき集めた戦力の実に8割に相当する　歴史上類を見ないこの大勝利を公国軍にもたらしたのは、言うまでもなく核兵器で武装した対艦仕様のMS部隊であった　シャア・アズナブル中尉の戦艦2隻、巡洋艦3隻の計5隻を筆頭に、シン・マツナガ曹長の巡洋艦3隻など単独で複数の艦艇を撃沈する者たちが幾人も現れたが、ジョニー・ライデンもまたそのひとりとなった　彼は2日間におよぶ戦闘で3度の迎撃任務に就いたが、この内、　度目の出撃において、立て続けに3隻の戦艦を撃沈して見せたのである　なお、この時、ライデンは最大戦速で敵艦隊に突入しつつ、艦列を斜めに突っ切る形で一撃離脱を行う戦術を実行　たとえ攻撃を外しても、ひとつの敵艦に固執せず、すぐさま次の敵艦へ狙いを移すことで速度を維持するという戦法を編み出し、多大な戦果を挙げたようだ　ただし、公国軍の勝利が確定的となった段階で、不必要な戦力の損耗を嫌ったキシリア少将が、麾下の突撃機動軍艦隊に撤退命令を発したことにより、ライデンはシャア中尉やマツナガ曹長といった宇宙攻撃軍系のパイロットたちよりも一足先に、戦場を離れることとなった　こうした事情を知る友軍兵士の中には、後方からの命令がなければ、もう2、3隻は沈めていたとの声も聞かれたという。



MS-06R-2高機動型ザクII

【真紅の稲妻】

ルウムでの華々しい活躍により、大尉へと昇進したショニー・ライデンは、乗機をMS-06Fへと改めた。新たに受領した機体は、事前の申請に従い真紅に黒を配した特徴的なカラーリングで塗装されていた。「真紅の稲妻」という異名の由来となった紅色塗装の乗機は、このF型が初代ということになる。一方で、大尉時代にはMS-06Sを乗機としていたとの証言もある。この説によれば、受領したS型は当初、グリーンを基調とした二色迷彩に胴体部、シールド、スパイクアーマーのみを紅色に塗装した状態であり、全身を真紅に塗装する見慣れたカラーリングパターンとなったのは機種転換からしばらくしてからのことであったと、より具体的な証言が残されている。これらの矛盾するふたつの説を両立させるのであれば、ルウム戦役直後にMS-06Fを受領したものの、ごく短期間のうちにMS-06Sへと機種転換、真紅塗装は後者からであったが、前述の経緯からF型と誤認された――といったところだろうか。

さて、乗機の機種についてはともかくとして、ルウム戦役からほどなく、U.C.0079年2月中旬頃――ライデンは、地球攻撃軍の降下作戦を支援するために編成された第二方面軍特務中隊の指揮官に着任した。二度に渡る大規模な地球降下作戦が終了した後には、主に工業コロニーや補給艦隊に対するゲリラ戦に従事。この時期のライデンの動向については、機密性の高い特務部隊に属していたことや、報道の焦点が重力戦線ごと地球上に移行していたこともあって、詳しいことはわかっていない。ある関係者の証言によれば、小規模なゲリラ戦がほとんどであり、勇を鼓する戦いは



MS-14Bゲルググ高機動型

皆無であったとのことである。

ライデンの動向に関して次に明確な記録が浮上するのは、数カ月後、U.C.0079年8月初旬となる。遡ること数日前の7月31日、月面都市グラナダで行われていたMS-06Fに代わる暫定次期主力機選定の結果、ノイマット社のMS-R09/MS-09Rリック・ドムの採用が決定された。ジョニー・ライデンが転属のため、ア・バオア・クーに召喚されたのは、この決定の数日後であったという。新たな配属先は、第8パトロール艦隊、ムサイ級軽巡洋艦「プリムス」を旗艦とすることから、プリムス艦隊とも呼ばれた同艦隊にMS戦闘隊長として着任したのである。これに伴い、階級も少佐へと昇進しているのだが、ア・バオア・クーへの召喚には、もうひとつ大きな目的があった。新型MSの受領である。

辞令を受けた後、ライデンが急ぎ向かったE・3番デッキには、真紅に塗装されたMS-06R-2高機動型ザクIIが、新たな主を待っていた。MS-06R-2とは、先の選定試験にてMS-09Rに敗れたジオニック社製の試作機である。ライデンは、以前にテストフィルムを見て、R2型の前身にあたるMS-06R-1Aへの機種転換を上申したことがあったが、惜しくも支給対象から漏れていた。しかし、結果的にはこれが幸いし、彼は幸運にも総生産数わずか4機のR2型を手にすることができたのである。

ライデンを迎えたプリムス艦隊は、直ちにア・バオア・クーを後にした。彼らに与えられたのは、本国からもっとも離れた宙域、つまり地球・ルナツー間航路上での敵補給艦隊殲滅任務であった。10月時点で隊長機



MS-14Cゲルググキャノン

であるライデンのR2型に加え、MS-09Rを6機、MS-06Fを2機加えた合計9機のMSを擁したプリムス艦隊は、この戦域で目覚ましい戦果を挙げることになる。ライデンは、R2型の推力を活かした最大戦速による一撃離脱戦術により、ア・ハオア・クー出港から2週間のうちに、サラミス級巡洋艦を含む連邦軍艦艇4隻を撃沈。その戦果の多くが、対艦装備であるH&L社製360mmバズーカ、通称「ジャイアント・バズ」によってもたらされたものであった。時には、通常装備のザク・バズーカを用いることもあったようだが、ライデンは好んでジャイアント・バズを使用したと伝えられており、こうした新兵装の助けもあって、日に数度の出撃も当たり前となっていた状況下で、スコアを量産していった。この時期のライデンに関しては、戦意高揚策の一環として軍広報やマスメディアにより盛んに報道されたこともあって、具体的な戦闘記録がいくつも残されている。

たとえば、10月中旬のある日に行われた戦闘は、以下のようなものであった。標準時15日未明、少なくとも4隻のサラミス級巡洋艦に護衛された輸送艦が、一路、ルナツーを目指してジャブローから飛び立った。この輸送艦隊は、ロールアウトして間もない一次生産分のRGM-79Aジム6機を腹の中に抱えていた。これらの機体を用いて宇宙空間での性能試験を行う計画であったのだ。しかし、重要機密であるはずの輸送計画は、諜報員の介在によって前線のプリムス艦隊に知らされており、ライデン指揮下のMS部隊は、完全な待ち

MS-06S ZAKU II



MS-06Sザクll

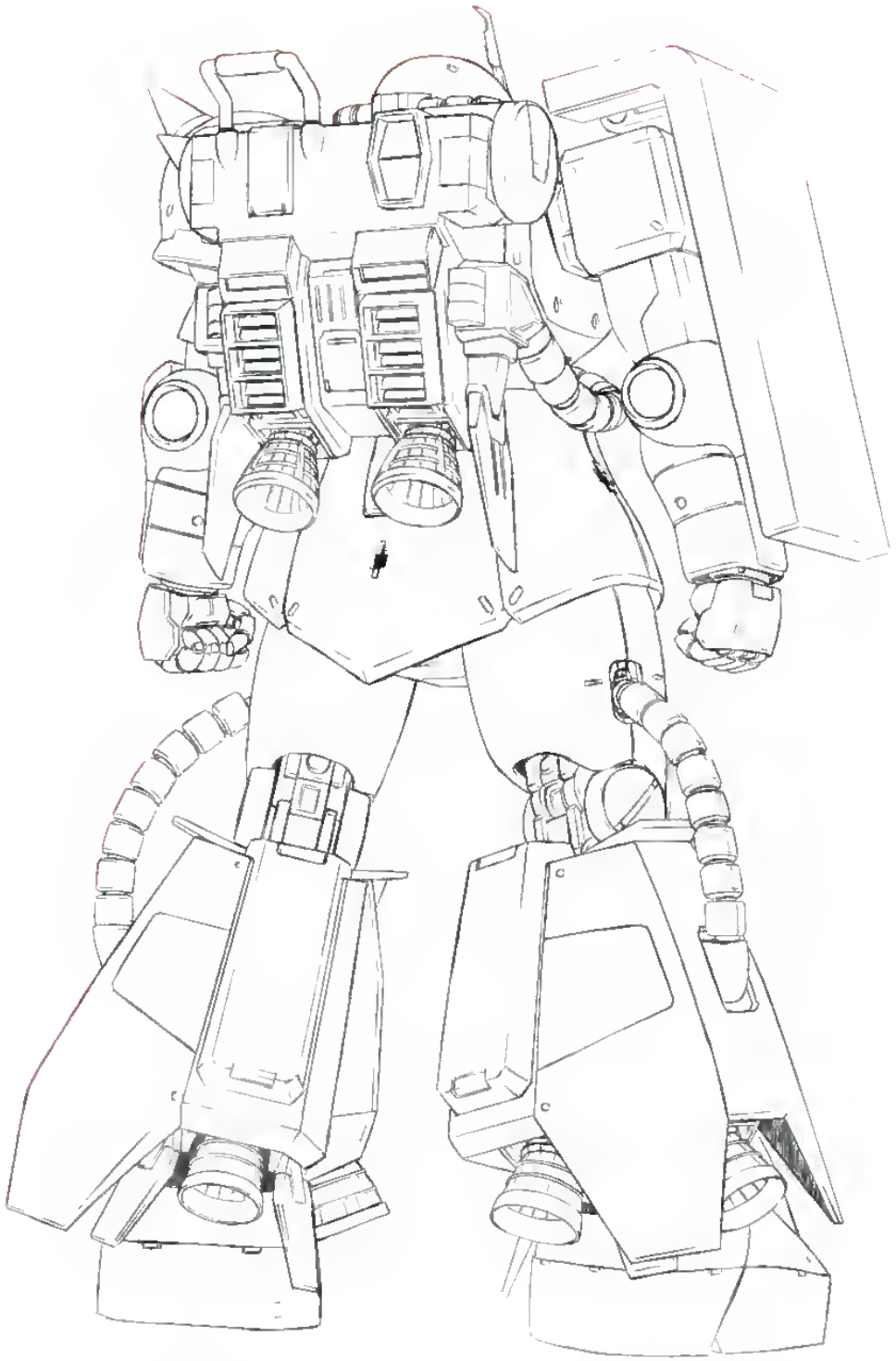
主に部隊長クラスのハイロ トに支給されたこ ナ 指揮官用」とも呼ばれる機体 本機の設計の基となったのは SUITプロジェクトの一員としてMS 06の開発に携わってきた高名な技師、エリオ ト レム技術少佐が軍部に提出したA型の全面性能向上案であった A型を連用したハイロ トから得た フ ートバ クをベースにまとめ上げられたその試案は、当時としては画期的なものであったが、 方で軍上層部は、早期投入を実現すべく生産ラインの転用が可能な範囲での改修に留めるよっにとの制約を課した かくして生まれたのが MS 06Sである

既存フレ ムを流用しつつ、新型ジェネレ ターMYFG M5ESXを採用 これに加え MIP社の技術協力を得て約3割の推力増を実現した改良型スラスタ を搭載しつつ プロペラント容量も8%ほど増している また、モノアイ・センサーやアクチュエーターの改善、頭部通信アンテナの標準装備、姿勢制御用サブ・スラスターの増設といった改良も加えられた 余談であるが、通信アンテナに関しては 性能は同等なから甲状の異なるいくつかのタイプが存在していたが、ジョニー・ライデンの乗機には俗にスタ ライサータイプと呼ばれる、F 128Z型が装着されていたようだ

伏せを実現させることができた 連邦軍の将兵たちか、名高き 真紅の稲妻 に奇襲されたのだと気づいた時には、すべてが手遅れであった 護衛艦はまたたく間に無力化されてゆく 後手に回った連邦軍側も、輸送中のRGM 79Aを緊急展開させて必死の応戦を試みたが、歴戦のエースパイロットと、実戦経験の無いテストパイロットでは、勝負は見えていた この日、ライデンは初めてMSの撃墜を記録したばかりか、うち1機をほぼ無傷の状態で鹵獲することに成功している。大きな土産を手にグラナダに帰投した彼らを待ち受けていたのは、称賛の嵐であったという

このようにブリムス艦隊は、地球周辺に多数展開していた公国軍パトロール艦隊のなかでも、極めて初期に連邦軍側のMSと会敵した艦隊であった 以降、ライデンの戦果には、艦艇や航宙機に加えて、MSの数が急激に増えてゆく。明確な記録があるものを合計すると、MS-06R-2搭乗時のライデンのスコアは、戦艦2隻、巡洋艦4隻、MS5機となる。なお、ブリムス艦隊は、敵軍の補給線分断に従事する一方で、地球視察に赴く途上であったキシリア・ザビ少将座乗のザンジバル級機動巡洋艦「キマイラ」の護衛任務にも就いている。こうした重要任務を与えられるほど、ライデンに対する上層部からの信任は厚かったということであろう。

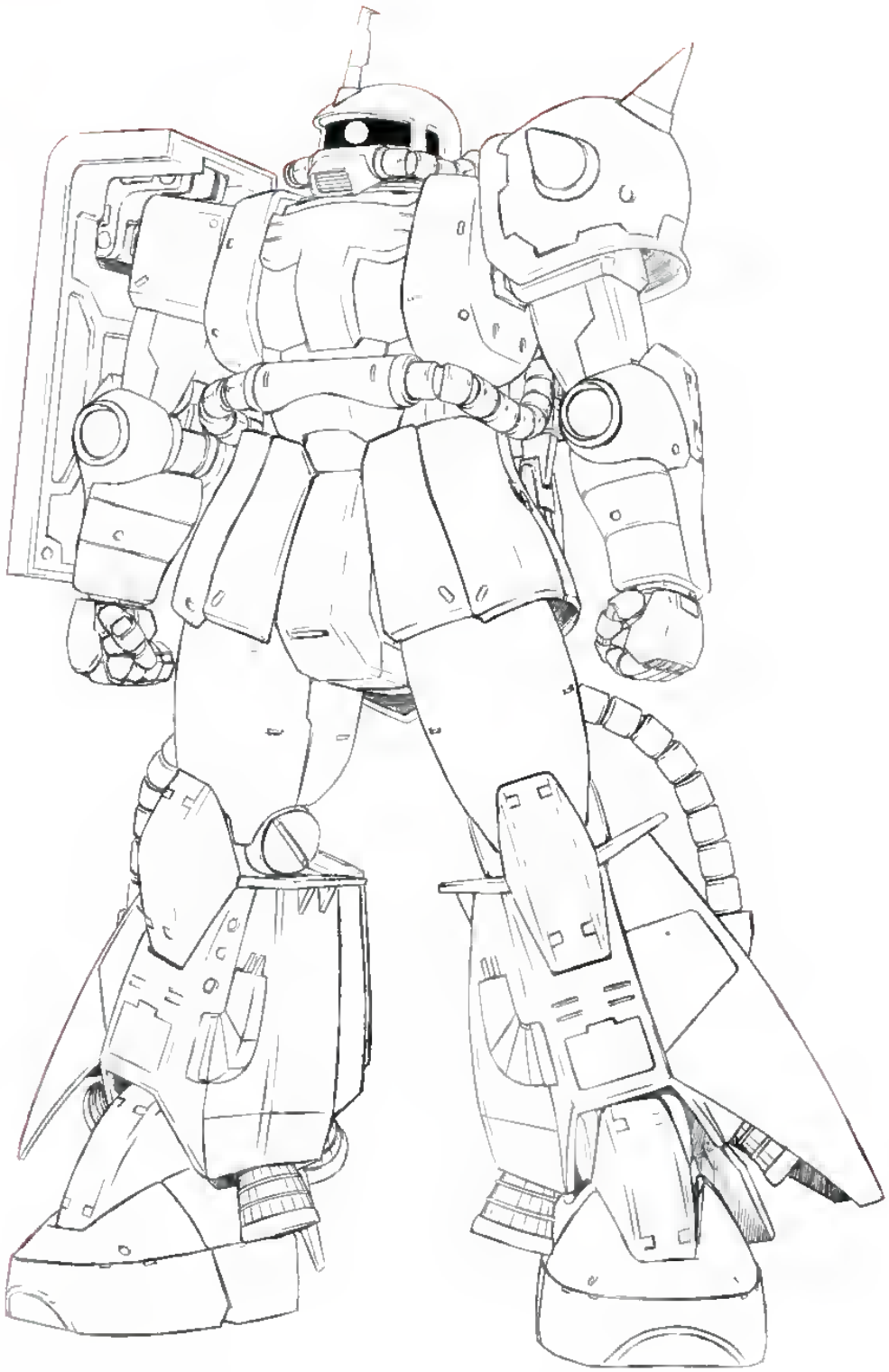
MS-06R-2 ZAKU II



MS-06R-2高機動型ザクII

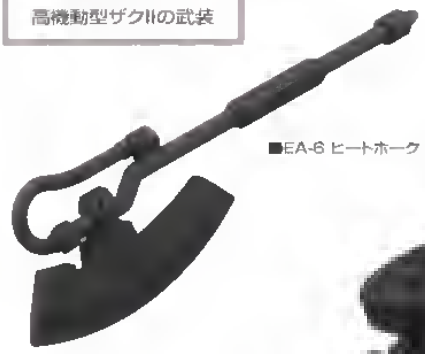
[illegible]高機動型ザクII

型式番号　MS-06R-2
全高　18.0m
頭頂高　17.5m
本体重量　58.2t
全備重量　不明
装甲材質　超硬スチール合金
ジェネレーター出力　不明
スラスター推力　不明



WEAPON

高機動型ザクIIの武装



■EA-6 ヒートホーク Type5

■M-120A1 ザク・マシンガン

■H&L-SB25K ザク・バズーカ



■H&L GB05R ジャイアント・バズーカ





MS-06R-2 ZAKU II

MS-06R-2高機動型ザクII

MS-06R-2は、MS-06Fに代わる次期主力機の実用化を目的とした「第2期主力MS開発計画」から派生した機体である

この計画で注目すべきは、なんと言ってもMSへのビーム兵器の搭載を要求仕様に盛り込まれていた点であろう この難題に対してジオニック社の技術陣は、在来機をベースとした技術実証機の建造を決定 MS-06R-1Aをベースに、新型の高出力ジェネレーター――MS-11（後のMS-14）計画のために開発されていたジェネレーターをデチューンしたもの の搭載を始めとする大規模な改修を加えた機体を完成させた ところが、MS-06R-2Pの型式番号が与えられたこの機体は、試作型ビーム・ライフルの試射自体には成功したものの、ビーム弾の収束率、威力ともに規定の値を満たすことはできず、やがて開発が泥沼にはまり込むこととなる たが、幸か不幸かライバルメーカーであるツィマット社もまた、同様にMSへのビーム兵器の搭載に苦戦していた このような状況を受けて 軍上層部は調達計画そのものの見直しに着手 やがて、ビーム兵器搭載機の実用化までの繋ぎとなる「暫定主力機」を提案するよう 各社に求めたのだった

軍上層部からの通達を受けたジオニック社は、改めてMS-06R-2Pからビーム兵器絡みの装備をオミットした上で、安定性に欠いていた主機を換装 出力は低いが、よりシンプルな構造を持つ新型ジェネレーターを開発し搭載した これに伴い、肥大化していた上半身ユニットを先祖返りさせる形でスリム化しつつ、重量の削減にも成功したことで、MS-06R-2の型式番号が与えられたこの機体は、機動性に優れた機体として完成した ところが、暫定主力機のコンペティションにおいて、ツィマット社によるMS-09Rリック・ドムに敗北。機動性や最大戦速時の攻撃性においては上回りながらも、生産性と火器搭載量を含めた総合力において下回ると判断されての結果であった そうした面においては、原型機であるMS-06R-1Aが抱えていた「構造の複雑さに起因する生産性の悪さ」という問題を解決できなかったのだと見ることもできよう

なお、MS-06R-2Pから改修された機体を含めて、R2型の総生産数は4機のみであったと言われている。この内、研究用としてジオニック社に残された機体を除く3機については、ほとんど申請のあったハイロトへと供給されている。その中のひとりか、ジョニー・ライデンであったのだ ちなみに彼が愛用した真紅のR2型は、その静止画像や記録映像が軍広報部の手で盛んにプロパガンダに利用されたこともあって 極めて高い知名度を誇っている 今なお「真紅の稲妻」の名を聞けば 真っ先に本機の姿を思い浮かべる者が多いことだろう


RB
402
02
RESCUE
DANGER
CAUTION
WARNING
NOTICE
DANGER
HOT EXHAUST BLASTS
CAUTION



MS-06R-2 ZAKU II CAUTION SIGN AND MODEX

JOHNNY RIDDEN

MS-14B GELGOOG

WEAPON

ゲルググ高機動型
ゲルググキャノンの武装



■ヒーム ライフル

ノオノ公国軍が量産化に初めて成功 携行用小型ヒ ム兵器。ヒーム ライフル 型化はMS本体の熱核反応炉を高出力化することと並行して進められたか エネルギーCAP技術の確立が遅れたために 本兵装の実用化はMS-14本体より約2ヶ月も遅れることとなった。なお、一説によると 地球連邦軍のMSが戦闘中に投棄したヒーム ライフルを回収したことて 難航を極めていた開発に終止符を打つことかできたとも言われている。

■シールド

MS-14が標準装備するシー ルトは、耐ヒ 』 ・ か施されており この種の兵装を主武装として使用する連邦軍MSの攻撃に対する防御性を高めている。腕部に装着して能動的に使用するほか 背中にマウントして背部からの不意の攻撃に備えることもできた。たたし、重量が非常に高んだため取り回しは容易ではなく 後に半分にカットしたタイプや、一回り小さい軽量タイプなとも開発されている。また、キマイラ隊の機体は装備せずに出撃するケースも多かった。

MS-14Bゲルググ

ノオノ公国軍か大戦末期に採用したヒ ム兵器搭載型MS 第2期主力MS開発計画」か先送りされたことを受け ノオ ク社は改めて開発体制から見直した上て、ヒ ム兵器搭載機の実現に向けた開発を再開その際、MS 06R 2Pて一度は試みられていた ネルギ CAP式ヒ ム・ライフル」を搭載するプランに加えて、水陸両用MSて採用実績のあ た ノェネレ タ 遠結式メカ粒子砲 の搭載を軸とするプランも並行して進め 両極から実用化を模索することと た この内 前者のプランについては、社内に残されたR2型を再改装する形て試作機の建造を開始MS 11計画用に設計か進められてい た最新の部品を惜しけもなく投しることて ほとなくMS 06R 3として完成させた ところか中堅兵器メ カ アルハ ト社か担当していたヒーム・カ の設計か難航 試射実験すら行えない状況か長く続いたようた

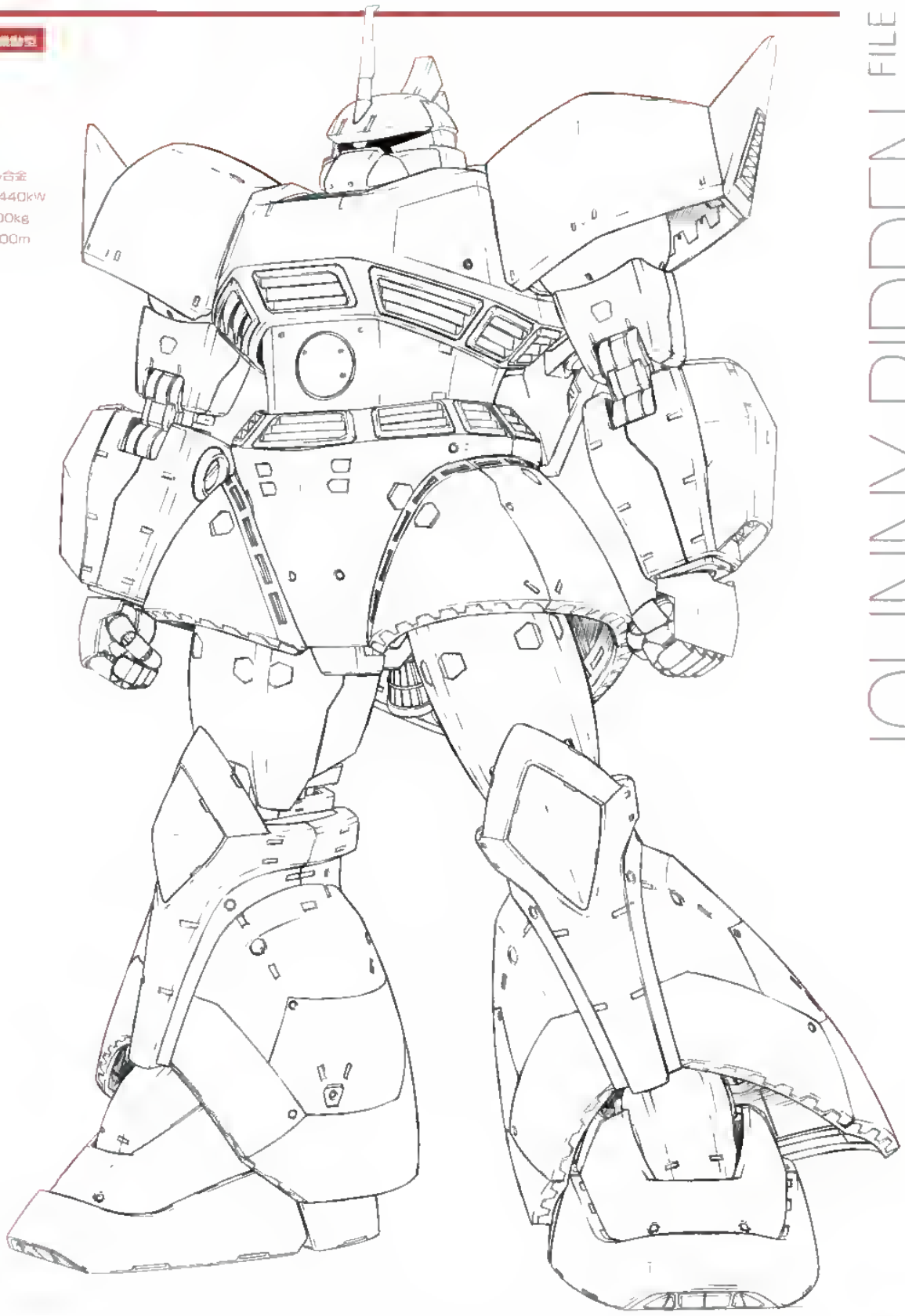
そんな壁を打ち砕いたのは ノオン国防省からの横槍てあ た MAや水陸両用MSに おいてヒーム兵器の搭載実績かあ たMIP社から技師を出向させ、MS開発局に編入させた上て アルハ ト社との共同開発を実現させたのた かくして 試作型ヒーム・カノの開発か急ヒ チて進む中 本体側も改修を続行 型式番号もMS 06R 3Sへと改めることとなる そしてこの機体を以て 試作型ヒ ム・カ のトライアルに成功するのたった

た 改造に改造を重ねた実験機ゆえに MS 06R 3Sをそのままの形て量産することはてきな 生産性やメ テナンス性を考慮した上て改めて量産仕様の策定を進めていった 結果的に その姿はMS 06系から大きく逸脱したものとなり、この時点を以てヘノトネームも変更 かくして、YMS 14ケルククとしてロールアウト、ほとなく行われた選定競争においてもライバルたるYMS 15ギャンに勝利し、見事に次期主力機の座を射止めたのたった なお、YMS 14は先行生産として総計25機か建造されているか、そのすべてかキシリア・ザビ少将麾下の突撃機動軍に納入されている しかし、その分配はシャア・アスナブル大佐率いるニュータイプ部隊に1機 ヒ ・マルキン・ケルヒノ大佐率いる特別編成大隊 通称キマイラ に24機という偏ったものてあ たという

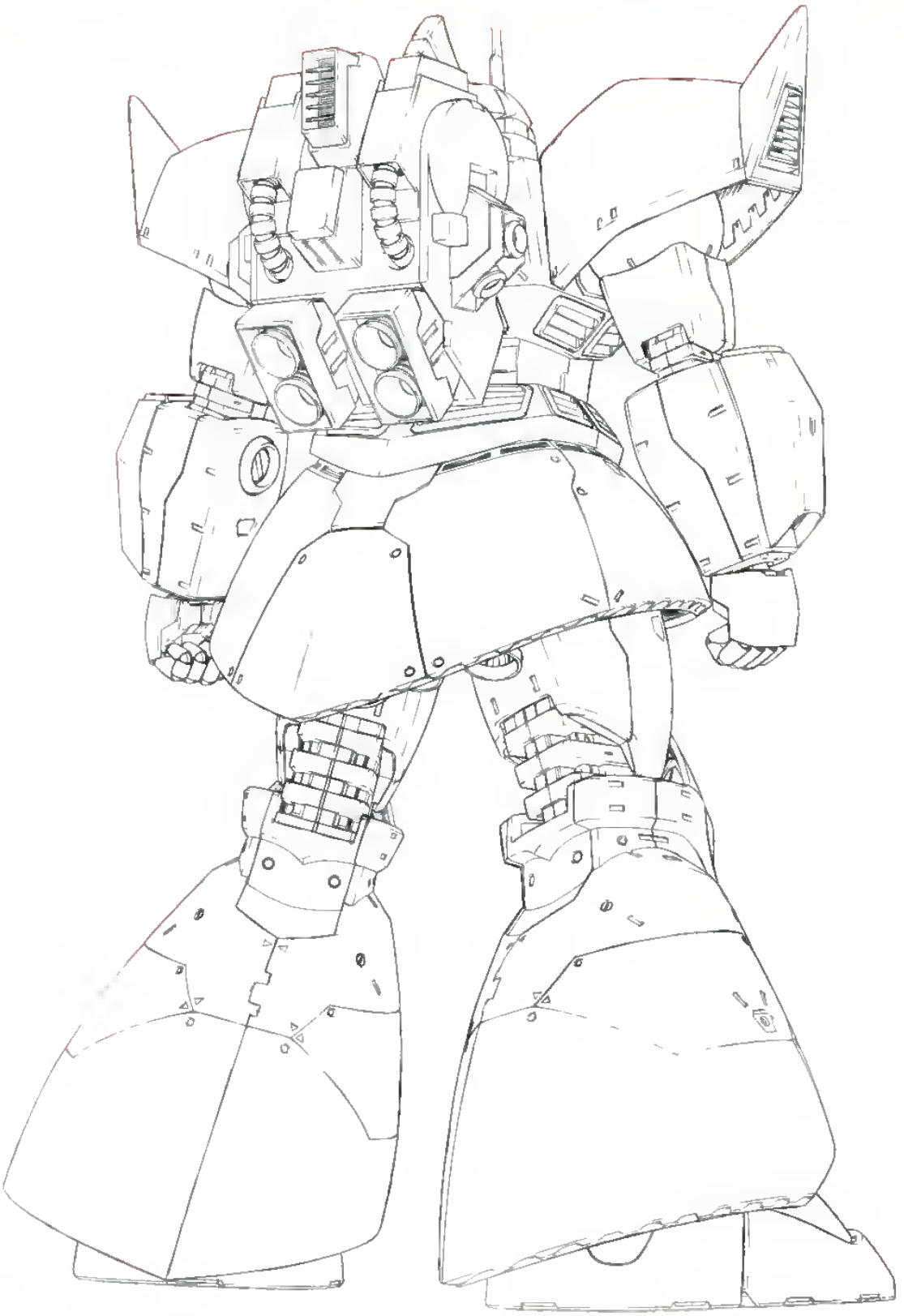
後にキマイラに配属され 第1中隊長となるノョニ ・ライテンもまた この24機の1機を受領しており、前代のMS 06R 2同様に機体を真紅に染め上けている たたし YMS 14仕様のままではなく、増速用フ スタ ハノ ラを装備したB型仕様に改装の上て運用していたようた また 機体の細かな仕様はパ・ハオアクー攻防戦までの間、幾度となく調整か続けられたらしく 現存確認できる静止画像の中には、頭部ブレートアンテナの有無や塗装ハタ など外見上の差異かあるものか散見される 携行武装についても同様て 標準装備のヒ ム・ライフル以外に、シャイアント・バス 大型ヒーム・マシンカノ ロケット・ランチャーなとの使用か認められる MS 14系の戦技開拓をも使命としていた部隊ならではの運用実態と言えるのではないたろうか

MS-14Bグルグ高機動型

型式番号　MS-14B
全高　19.6m
頭頂高　19.2m
本体重量　53.5t
全備重量　76.8t
装甲材質　超硬スチール合金
シェネレーター出力　1,440kW
スラスター推力　79,900kg
センサー有効半径　6,300m



MS-14B GELGOOG





MS-14Cゲルググキャノン(011番機)

MS-14C GELGOOG CANNON

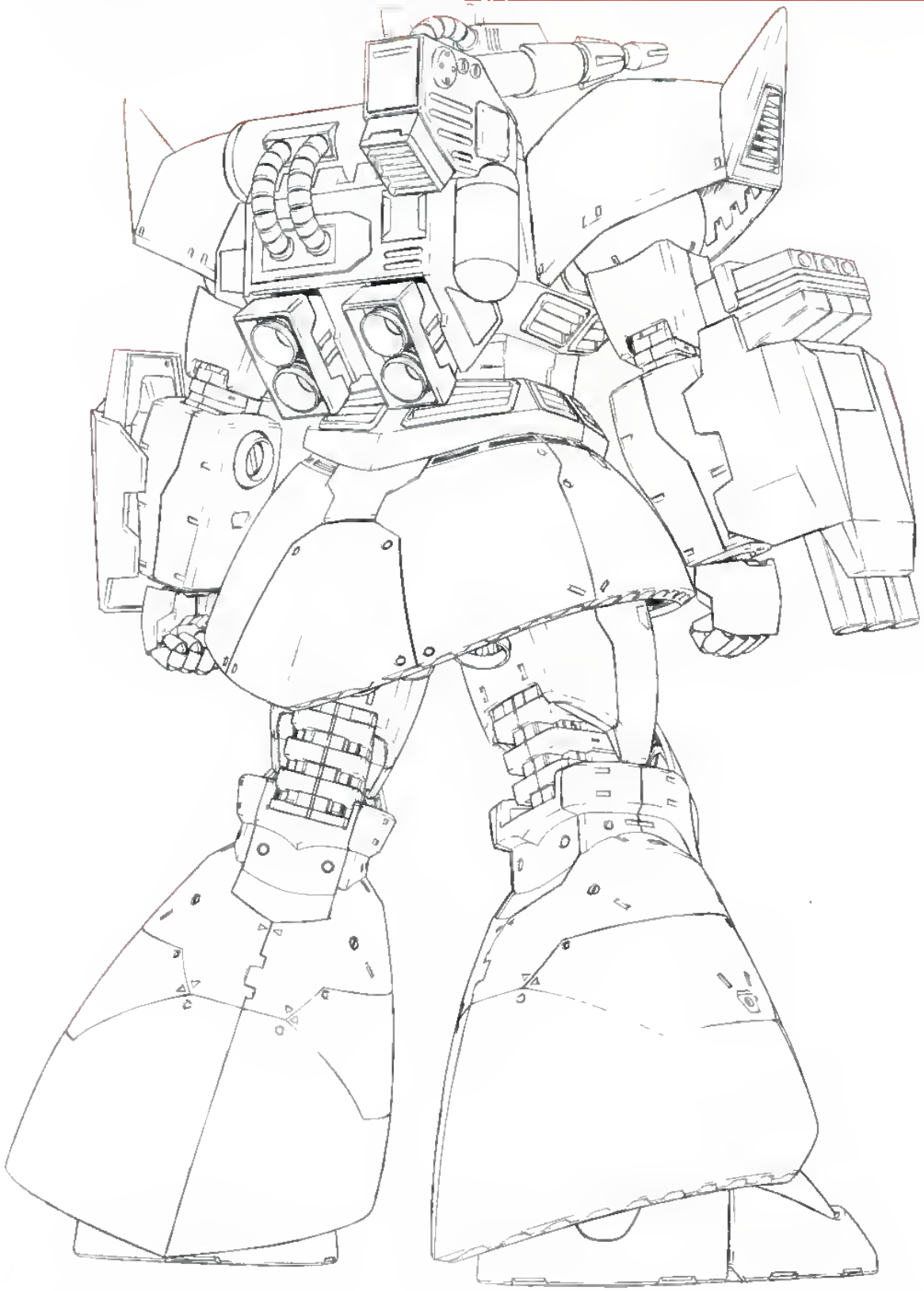
MS-14Cゲルググキャノン

MS-14系は、MIP社が開発した[illegible]を装備した機体

YMS-14の開発過程において、ビーム・カノンの開発が難航していたことは既に述べた。国防省が大金を振るい、半ば強引にMIP社を開発に参加させたことで、やかて試作型ビーム・カノンが完成することになるのだが、量産仕様のビーム・ライフルの完成までには長い時間を要した。そこでビーム・ライフルの完成よりもYMS-14本体のロールアウトが先行する形となっている。そんな中で、MIP社が提案したのがビーム・キャノンを内包したキャノン・ハウス案であった。そもそも、ビーム・[illegible]の開発に手間取[illegible]レイレギ(CAP[illegible])の粒[illegible]倒をMSのマニピュレーターで保持できるサイズにまで小型化するのが難しかったためである。ならばMSM-07等で既に実用化されている比較的出力の低いメガ粒子砲を応用しつつ、ランドセルというより大きな箱に収めてやろうというのが、この案の肝であった。当然、可動域の広いAMBAC肢に保持させる場合と異なり、取り回しという面では難があるが、それでも小型化という制約が緩むことで、動作の安定、ビーム弾の収束率、連射可能上限などの面でメリットは多かった。かくして、極めて短期間で設計が進められ、終戦までに未組立のものを含み、122機分ものビーム・キャノン・ハウスが製造されたとのことである。そして、これらのビーム・キャノン・ハウスはキマイラにも持ち込まれ、24機の配備機の半数ほどに装備された。

なお、ノーマン・ライテンの搭乗機としては、機番「010」のB型が有名であるが、機番「011」のC型を運用したこともあったという。両機ともに赤へスの塗装であったとはいえ、そのカラーリングパターンが大きく異なる上、そもそも機番も異なっているため、これらは個別の機体であったと思われる。明確な記録や証言がないため詳細は定かでないが、本来の乗機である「010」番機がメンテナンスなど、なんらかの状況で使用できない時に、予備機の「011」番機に乗ったことがあったといったところなのであろう。

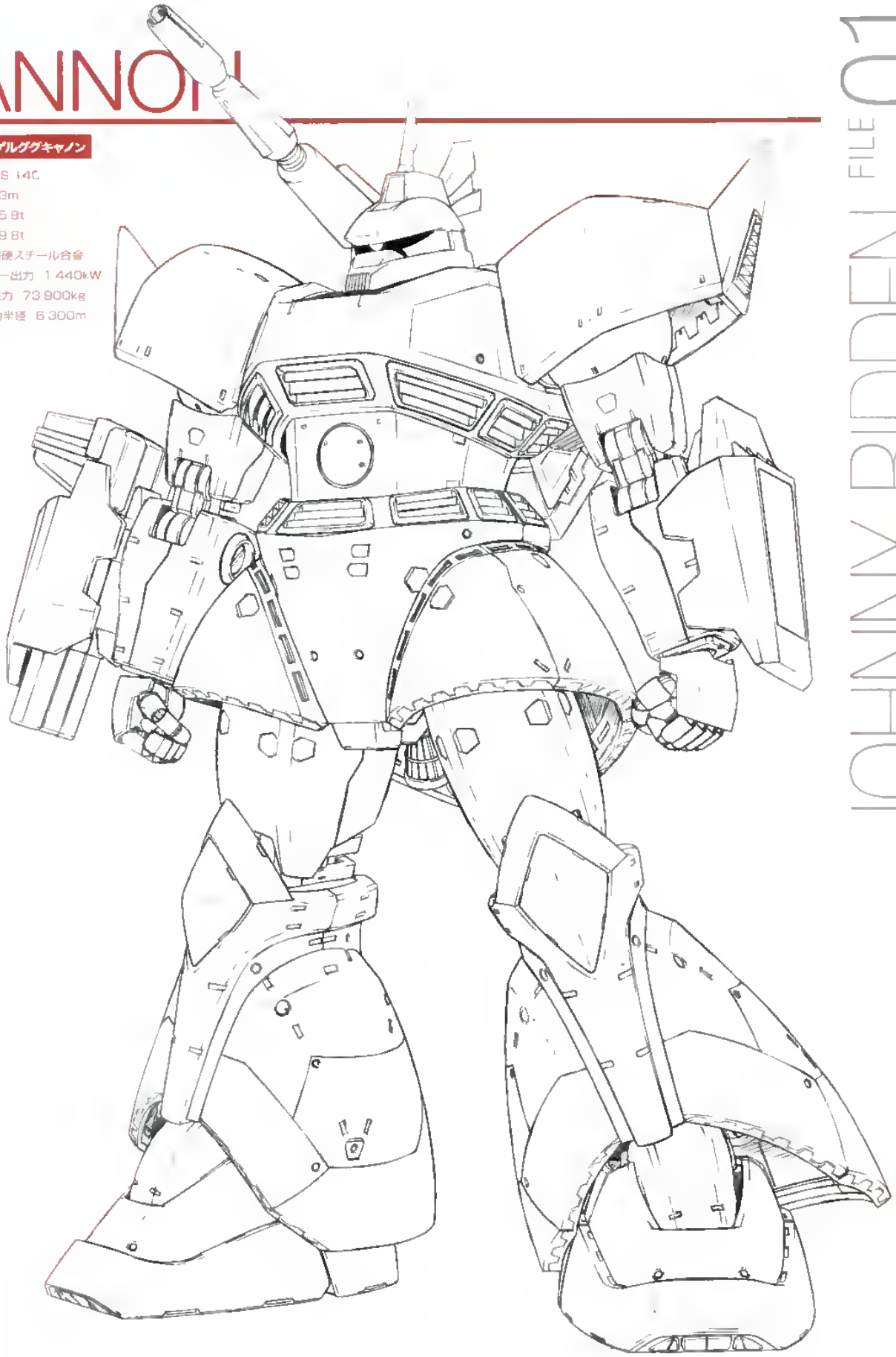
MS-14C GELGOOG



CANNON

MS-14Cゲルググキャノン

型式番号　MS-14C
頭頂高　19.3m
本体重量　55.8t
全備重量　79.8t
装甲材質　超硬スチール合金
ジェネレーター出力　1,440kW
スラスター推力　73,900kg
センサー有効半径　6,300m



JOHNNY RIDDEN FILE 01


RESCUE
010
DANGER
CAUTION
CAUTION
CAUTION
CAUTION
NOTICE
CAUTION
WARNING
010



MS-14B GELGOOG CAUTION SIGN AND MODEX

WEAPON

ケルググ高機動型
ケルググキャノンの武装



■ロケットランチャー

MSの改修設備を備えた巨大フラント船「ミナレ ト」にて試作されたMS用携行 器。MS-14向けのビーム ライフルの完成が遅れていたため 代替装備として急遽 試作されたものらしい。高威力の火器としては既にジャイアント・バズーカが存在していたが、砲身が長く重量もかなりのものであったため、よりコンパクトで取り回しが容易な携行兵装が求められていたようだ。

【キマイラ時代】

10月も下旬に差し掛かると、地球上における連邦軍の動きは以前にも増して活発なものとなっていた ヨーロッパでは、公国軍占領下にあったオデッサ 帯を奪還すべく、連邦軍部隊が各地から集結しつつあったのだ その中には先行生産型と思しきMSの姿も見られ、連邦軍によるMSの量産がいよいよ現実のものとなりつつあることを、公国軍将兵は実感した

連邦軍がMSの量産体制を整えれば、工業力に劣る公国軍は圧倒的に不利になる。この悪夢に対して公国軍が採った、いや採らざるを得なかった対応策は、個の質の向上である 強力な火力と機動力を有する大型MAの建造や、サイコミュ搭載機の実用化などは、その一端と言えよう。そして、これらと並行して進められたのが、エースハイロットを集中的に投入する エース部隊」の創設である ザンジバル級機動巡洋艦 キマイラ を旗艦とすることから、単に キマイラ とも呼ばれたこの部隊には、創設の提言者でもあるヒュー・マルキン・ケルビン大佐以下、トーマス・クルツ、ジェラルド・サカイ、ジャコビアス・ノード、マイヤー・メイ、ガーニム・ムフタール、シーメンス・ウィルヘッド、エメ・ティプロム、クリストバル・ラザフォード、ユーマ・ライトニング など、各戦線より指折りのエースたち総勢31名が集められた。ここに、 真紅の稲妻 ことジョニー・ライデンも名を連ねている

しかし、エース部隊 キマイラ」の設立に前後して、プリムス艦隊から離れたライデンは、ひとりサイド5(ルウム)のテキサスコロニーへと向かっている。新たな戦友となるエースたちより先んじて、同隊に配備予定の新型機、YMS-14ゲルググの運用試験に参加していたのだ 公国軍初のビーム・ライフル携行機として期待を集めていたケルクグの先行量産機、総計25機のうち、実に24機が「キマイラ」に配備さ

エース部隊「キマイラ」創設の背景には、同時期に編成されたシャア アズナブル大佐を指揮官とするニュータイプ部隊の存在があったとも言われている。強力なサイコミュ兵器で武装したニュータイプ部隊が造反した場合、その対処を行うカウンター・ニュータイプ部隊であったというのだ。当時は公表されていなかったが、シャア大佐はシオン・ズム・ダイクンの遺児であり その父の死に関わったザビ家の長女という立場のキシリア少将とは、微妙な関係性であった。事実、シャア大佐はア バオア クー攻防戦の混乱の最中に、キシリア少将を暗殺したとも言われており、彼女か抱いていた疑いも間違いではなかったものと思われる。





01 JOHNNY RIDDEN

[redacted]の使用したアクシズ高機動型は装備のテスト
て外装や機器の換装が頻繁に行われた。当初、頭部ア
テナのない状態で引き渡しされた本機であるが、時期
よってタイプの異なるアンテナが装着されたらしい。

れる計画であったというのだから，この新設のエース部隊の期待度が伺える。

10月26日，正式に発足の辞令を受けたエース部隊「キマイラ」の所属艦がサイド3本国より出港した　その後、クラナダから派遣された部隊と合流し、旗艦以下6隻の艦隊を形成すると、コレヒドール暗礁宙域に進路を向けた　連邦軍の目の届かない宙域で、YMS-14の完熟訓練，および機体の最適化作業を行うためである　なんと　キマイラ　には、技術支援部隊「ヒュドラ　が乗艦するプラント艦「ミナレット」が随伴しており、各パイロットから寄せられる要望を、即時、機体のカスタマイズに適応する体制が整えられていたのだ　もともとブロック構造が採用されていた



MS-09R RICK DOM

MS-09Rリック・トム

陸戦機として高い評価を得て　社製の重MS、MS-09トムの推進系を熱核ジェットエンジンからロケット・エンジンに換装することで　空間戦への対応を実現した機体　第2期主力MS開発計画　の不調を受けて　ビーム兵器搭載型MSの実用化を待つ間の　暫定主力機　として開発されたという経緯を持つ　当初は　ロケット・エンジンの頭文字「R」を追加するだけでMS-R09と称していたが、MS-06R-2との選定競争に勝利して制式採用が確定した時点で　公国軍の正規ルールに則り、MS-09Rへと改称　リック・トムというネーミングが与えられた　重装甲かつ高火力　機動性にも優れる本機は　地球連邦軍が投入し始めたRGM-79ジムに対しても　互角以上の勝負を展開できる機体として重宝され　大戦末期のジオン公国軍MS部隊　を支えた

ちなみにプトレムス艦隊に配備された機体については、いずれも塗装パターンは標準仕様であり　とりたてて目立った　ところはなかったという　また　武装に関しても標準的であり　対艦攻撃を行う際にはシャイアント・バズを携行することが多かった　一方で艦隊直掩に回される場合は、機動性に優れた航宙戦闘機を捉えやすいザク・マシンガンを好んで用いられたとのことである

MS-06F ZAKU II



MS-06Fザクll

ブリムス艦隊には ノーマン・ライデンが搭乗したMS-06R-2に加えて、MS-09Rが6機 MS-06Fが2機配備されていた 同艦隊では3機1小隊制を採用していたため、その機体配分は必然的にMS-09Rから成る2個小隊と、MS-06系の1個小隊という形式となった ムサイ級軽巡洋艦の格納庫スペースからすると、1隻につき1個小隊ぶんの機体しか収容できない となれば、メンテナンス性の観点から同系統の機体をまとめておいた方が効率が良いという判断である しかし、足の遅いF型と機動性が売りのR2型を混成運用することにはデメリットも多かった そこで、ライデンは2機の僚機に支援射撃を任せ、R2型を駆る自身のみが前衛として突出する戦術を多用したという この時、F型にはR2型用の増槽を携行させ、戦場での推進剤の補充を行うという役回りを与えていたようだ R2型の腰部に設置されたプロペラントタンクは、R1A型と同様にカートリッジ式になっており、MSの手で交換ができたのだ 最大戦速による一撃離脱戦術を得意としたライデンは、それだけ推進剤の消費が激しく母艦に戻る手間を省くために僚機による艦外補給という手段を利用したようである ちなみに本機の塗装についてであるが、基本的には標準的なハタノに準拠していたものの、左肩のスパイクアーマーにのみライデン機と同じレッド系の塗料でラインが引かれていたようだ

YMS-14は、ランドセルや頭部ユニットなどを交換することにより、高機動仕様のB型や火力支援仕様のC型へと改装することが比較的容易であった。そこに加えて、ジオニック社やツィマット社などの各社から集められた最高の技術スタッフが、設計支援システムを備えるミナレットの艦内設備を用いることで、細かな改修を繰り返したのだ。コレヒドール暗礁宙域での訓練は、運用側のソフト面だけでなく、ハード面の更新という意味でも密度の濃いものとなり、BR型やC-1A型、C-2型といった複数のサブバリエーションが生み出されたという。また、支援機であるC型系に直衛機としてB型系を組ませる2機1小隊制の運用法も、この時期に重ねられた戦技訓練によって確立したものと伝えられている。

コレヒドール暗礁宙域での訓練は、12月に入ってからも継続された。この訓練期間中には、マゼラン級戦艦1隻、サラミス級巡洋艦2隻からなる連邦軍パトロール艦隊と遭遇、交戦するハプニングも生じているが、「キマイラ」側はいっさいの損害を出すことなく、これを撃滅したと報告されている。ただし、連邦軍側には交戦の記録が残されておらず、作戦行動記録や喪失艦リストを調べ上げても、該当する日時に暗礁宙域へ向かった艦すら見つけることができない。戦後になって連邦軍は、大戦初期に拿捕された艦艇か

CHIMAIRA

キマイラ隊

■突撃機動軍特別編成大隊「キマイラ」

通称「キマイラ」隊は一年戦争末期、最新鋭機YMS 14ゲルググと熟練パイロットを招集して新設されたMS大隊である。立案者は突撃機動軍情報統括局局長でもあったヒュー・マルキン・ケルビン大佐。その設立にあたっては、キシリア・ザビ少将の特別な計らいがあったとされ、発足間もない10月下旬時点では大隊規模に満たない少数編成であったというが、最盛期には大隊の定数を大きく上回る人員が所属しており、「特別編成大隊」という呼称か用いられたと伝えられている。

キマイラ隊は、大きく4つのグループに別けられる。中核となるエースパイロットたちで構成されたMS部隊、母艦と支援艦で構成された艦隊、中核部隊の予備も兼ねた艦隊直衛MS部隊、そして技術支援隊「ヒュトラ」である。このヒュドラとは、シオニック社やツィマット社、MIP社などの兵器メーカーから召集されたトップエンジニアたちで構成される技術者集団であり、巨大プラント船「ミナレット」の艦内設備を用いることて、パイロットたちの求めに応じて、どんな兵装であれ半日て設計を終え、二日後には実物を用意して見せたという。

なお、艦隊は旗艦であるザンジバル級機動巡洋艦「キマイラ」を筆頭に、同級機動巡洋艦「サングレ・アスル」、ムサイ級軽巡洋艦3隻、プラント船「ミナレット」という構成てあったとされているか、時期によっても異なったようで、確定とは言えない状況である。

■主な隊員

ジョニー・ライデン（MS-14B　MS-14C）
ジェラルト・サカイ少尉（MS 14C）
トーマス・クルソ大尉（MS-14C）
ジャコピアス・ノート大尉（MS 14C 1A）
ジーメンス・ウィルヘット大尉（MS-14BR）
エメ・ディプロム中尉（MS-14BR）
デヒット・チェイスマン少佐（MS 14BR）
ユーマ・ライトニング中尉（MS 14B）

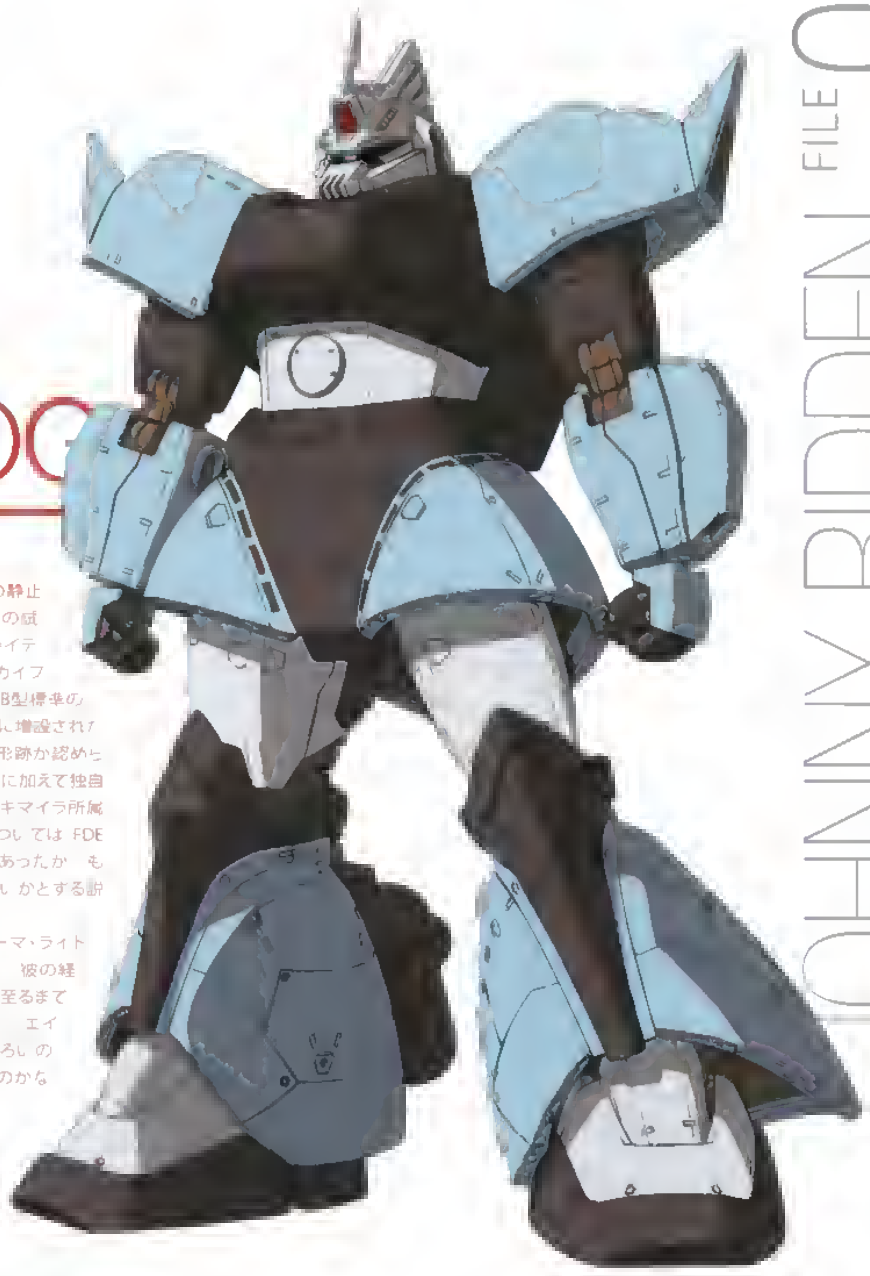
エース部隊の訓練の標的として利用されたのではないかとする公式コメントを発表しており、遭遇戦の存在そのものを明確に否定している。ともかく、この戦いの真偽はどうあれ、厳しい訓練を経て戦線に復帰した彼らの働きには、目覚ましいものがあった。

U.C.0079年12月24日、地球連邦軍による攻略作戦により、宇宙要塞ソロモンが陥落。連邦軍は制圧したばかりの同要塞をコンペイトウと改称すると、この地を拠点として部隊の再編を開始した。同月26日にはレビル大将麾下の連邦軍第1連合艦隊がコンペイトウに到着、公国軍の小規模部隊による散発的抵抗があったものの、3日後の29日には、部隊編成を終えて公国軍の最終防衛ラインの一端であるア・バオア・クーに向けて進軍を開始した。これに対して公国軍は、コンペイトウ周辺からア・バオア・クーに至るまでの航路で、いくつかの部隊が連邦軍の足を鈍らせるべく攻撃を試みている。総帥命令により訓練を中断して舞い戻った「キマイラ」もそのひとつであり、ティアンム艦隊に対して3隻のムサイ級巡洋艦と12機のMS-14Cをもって攻撃をしかけている。なぜ、この時に限ってC型のみという偏った編成を採用したのか詳細は定かでないが、ともかく「クラリオン」と名付けられたこの作戦は成功、公国軍側の勝利に終わった。「キマイラ」はムサイ級軽巡洋艦1隻大破、MS2機大破、3機中破という損害を出しながらも、サラミス級巡洋艦2隻、改コロンブス級宇宙空母1隻を撃沈、さらにMS14機、宇宙戦闘機22機を撃破する大戦果を挙げたのである。

連敗続きの公国軍にとって、久々の大勝といえるこの戦闘は、厳しく報道が規制されていたサイド3本国でも大々的に報じられている。なお、クラリオン作戦にジョニー・ライデンか参加していたどうかは定かでない。ただし、彼はコレヒドール暗礁宙域での訓練以降に「キマイラ」の第1中隊長に就任しており、また乗機としてMS-14BとMS-14Cの双方が記録されていることからも、参戦していた可能性は十分あるだろう。

ちなみに、ソロモン攻防戦に先駆けて、「キマイラ」はコレヒドール暗礁宙域を後にしており、反逆罪

MS-14B GELGOOG



MS-14Bゲルググ ユーマ・ライトニング中尉機

オノ公国軍広報部が撮影したものとされる 枚の静止画像にて確認された機体 コレヒト ル暗礁宙域での試験運用の様子を捉えたとされるもので ョニー・ライデ 少佐のMS 14Bに随伴する形で この鮮やかなスカイブ ー て塗装された機体が写 ていた ットセルはB型標準の増加タイプであるか C型形状の頭部ユ ト や脚部に増設されて フォ マルタ クなど しく かの点に 改修の形跡が認められる 特に頭部ユ トに関しては サブ・センサ に加えて独自の放熱機構が組み込まれて いるように見受けられ、キマイラ所属機のいずれとも異なっており興味深い こうした点については FDE 全機能開発試験機 をレトロフ トさせた機体であったか もしくは、その部材を流用した機体であ たのではないかとする説が囁かれている

なお 記録によると本機を進めていたのは ユーマ・ライトニング中尉なる人物であ たとされている ただし 彼の経歴については不明な点が多 キマイラ への配属に至るまでの経緯は判明していない 驚くべきことに、彼はティ エイ ャ の若者であ たようなのだが なぜエ スぞろいの部隊に そのような若年パイロ トが所属していたのかなど謎が多い

の疑惑がかけられていた友軍艦艇の拿捕に貢献していたとの証言もある この証言者の話によれば、ソロモン方面からサイド3本国へと向かうガガウル級駆逐艦 ベルル・ノワール を捕捉、臨検しようとしたところMSによる抵抗を受けたため、ライデン自らがこれを人破させ、脱出を試みたパイロットを拘束したとのことである しかも、この人物こそドズル・ザビ中将の懐刀として知られる宇宙攻撃軍のトップエース、シン・マツナガ大尉であったという驚くべき情報もある 当然、ザビ家の内情がからむスキャンダラスな一面があるこの戦闘の正式な記録は残されておらず、現状、関係者の証言のみが証拠となっている。このように事実関係はやや不確かではあるが、エース部隊「キマイラ」がキシリア・ザビ少将の直轄部隊であったという性質から考えれば、あながちあり得ない話でもないだろう

【最期】

ブオン独立戦争の最後を飾った戦闘として歴史に名を残す、ア・バオア・クー攻防戦　前日のソーラ・レイの照射により、主力であった第1連合艦隊の大半を、その指揮官であるレビル将軍ともども失った連邦軍であったが、残余の戦力をもってして攻略作戦は強行された

U.C.0079年12月31日、「星一号」作戦開始の号令のト、全天を覆い尽くさんばかりの連邦軍艦艇が、ア・バオア・クーに対して突撃を開始した　最終防衛ラインの一角を成すここが抜かれれば、サイド3本国はまさに裸同然となるだけに、公国軍は集められるだけの戦力をア・バオア・クーに集結させた。ソロモンから脱出してきた宇宙攻撃軍の生き残りに、グラナダから馳せ参じた突撃機動軍、さらには虎の子の本国防空人隊――　一説では、公国軍が最終決戦に備えて集めたMSは，3600機に達したという　しかし、連邦軍もこの頃までには、RGM-79をはじめとする各種MSの生産体制を整えており、公国軍を上回る総計4800機余りを投入している。これらのMSについて、ある試算では公国軍側3000機、連邦軍側4000機ほどが未帰還に終わったとされている。ア・バオア・クー攻防戦とは、それほどの激戦であったのだ

よく知られているとおり、エース部隊「キマイラ」もまた、この攻防戦に参加している。ジョニー・ライデンは、真紅に塗装されたMS-14Bを駆り、混沌の戦場へと飛び出した。しばしば、"血で血を洗う"と表現されるこの攻防戦において、彼がどのような活躍を見せたのか。多数の敵機を撃破したであろうことは想像に難くないが、残された記録は余りに少ない

ライデン機の最期の目撃証言とされるものは、いくつか存在する。そのひとつは、標準時31日23時前後のこと、場所はNフィールド上部の要塞北側　脱出を試みるザンジバル級機動巡洋艦を支援している真紅のMS-14Bを目撃したというものである。この頃には、すでに彼の乗機の周辺には「キマイラ」所属機の姿はなく、戦場で合流したMS-06F、MS-09Rからなる部隊とともに戦っていたという　この証言によれば、ライデンはそのサンジバル級に忠誠の対象であったキシリア・ザビ少将が乗艦していたことを把握していたようで、これを守らんと圧倒的に不利な戦況でも果敢に戦い続けていたという　さらに、最後まで彼に付き従っていたMSは、プリムス艦隊時代の部下の乗機であったという説まであるが、これはいささか出来すぎというものだろう。

一方で、さらに後の証言もある。地球連邦軍のMSパイロットとして攻防戦に従軍した経験を持つグレッグ・ダグラス元連邦軍少尉によると、同日23時20分過ぎに戦域から撤退しようとするライデン機を含む「キマイラ」の残余を目撃したというのだ。RGM-79に搭乗していたダグラス氏は乗機が損傷した状態で漂流し、ア・バオア・クーから離れつつあった　そんな時、交戦状態にあるライデン機と思しきMS-14Bと、ユーマ・ライトニングの乗機らしきMS-14BRを目撃したというのだ　さらに増加装備付きのザンジバル級機動巡洋艦、すなわち「キマイラ」と、僚艦である青塗装のザンジバル級機動巡洋艦「サングレ・アスル」、そしてムサイ級軽巡洋艦3隻から成る艦隊が、正体不明の別の艦　おそらくプラント船「ミナレット」――を守りつつも、追跡者と砲戦を演じながら戦域を脱する姿を目撃したという。同じ部隊に所属するMS同士の不可解な戦闘、その結果として残されたMS-14Bの腕部ユニットには「三つ首の獣」を象ったエンブレムが描かれているのを確認したと同氏は証言している。敗戦が確定的となった状況で、その後の行動方針を巡り対立が生じたとでもいうのか　ともかくこの後、ザンジバル級機動巡洋艦「キマイラ」は、連邦軍部隊によって拿捕されることになるのだが、そこにライデンの姿はなかった。凄惨な同士討ちの果てに、人知れずこの世を去ったのか。あるいは、追跡を逃れて脱した「サングレ・アスル」のように、ア・バオア・クーより脱出し、何処かへと身を隠したのか――　今となっては、知る術はない



U.C.0080年1月15日、突撃機動軍所属ジョニー・ライデン（軍籍番号PM056330279A）は、戦闘中行方不明として、終身中佐へと昇進の上、軍籍から除籍された ■



[illegible]隊は[illegible]国軍のまさ[illegible]
最高の技量を有[illegible]イロットと新鋭[illegible]を配備し一来たるべき決戦に備えてお[illegible]しかし旧世紀の世界大戦で[illegible]見られたような、決戦のための戦力はその事の影響[illegible]々とも少し[illegible]他のすべてあるがゆえに温存されることになる。キマイラ隊も本来各国の寄せ集めであるゆえ、ノロモン戦に参加しなかったノヨー。ライデンが最終決戦のアハオア[illegible]攻防戦に参加できたことは彼にとって幸運でやり[illegible]のかどうか、現在となっては知る由もない。



PRINCIPALITY OF ZEON

GABBY HAZARD

ギャビー・ハザード

後にバズーカ射撃の名手として知られることになるギャビー・ハザードが、軍人としてのキャリアを歩み始めたのは、U.C.0075年のことである。国防軍に志願した彼は、厳しい適性試験をパスし、第一世代のMSパイロットとなる栄誉を掴んでいる。そして基礎訓練を終えた彼は、同年11月に設立された教導機動大隊に編入され、シャア・アズナブルやA・ガイアといった錚々たるメンバーと共に、MS-05Bザクを用いてMS運用戦術の開拓に貢献したと言われている。

U.C.0078年10月、国家総動員令が発令されると同時に、国軍が分割される旨が発表された。予てよりMSの運用法を巡る思想の違いが表面化していたドズル・ザビ少将とキシリア・ザビ大佐（階級はいずれも当時）の対立がいよいよ決定的となり、開戦を翌年に控える状況で大胆な組織改編が断行されたのである。結果としてドズルとキシリアは、ともに一階級昇進の上、それぞれ新設の宇宙攻撃軍と突撃機動軍を率いることとなった。また、これに伴いギレ



MS-05Q ZAKU I

MS-05Qザク

MS-05Bを改装した近代化改修機。U.C.0078年、MS-06シリーズの量産開始を以て前線部隊の機種転換が本格化。それまで主力の座にあったMS-05Bは順次、後方の補給部隊などに回されることとなったが、ベテランパイロットの中には、取り回しが容易なMS-05系に愛着を感じる声も聞かれたという。そんな中で浮上したのが、最新の部材を用いることでMS-05系の性能を底上げするという改修プランである。一説によれば、この案を強力に後押ししたのはドズル・ザビ少将（当時）であったという。開戦を控えた状況下でMSの頭数を揃えることを重視していた彼は、既に大量に調達していたMS-05系を有効活用すべきとの見解を有していたとのこと。その真偽のほどはともかく、熱核反応炉に換装を含む改修内容の取りまとめは順調に進み、MS-05Qの型式番号が与えられている。そして、第1期改修計画として240機という決して少なくない数が目標として掲げられたのだが……ところが、ここに来て計画が狂い始める。突如として国家方針計画が浮上、MSの調達計画に混乱が生じたのだ。すでに生産ラインを新型機の増産に割り当てることが決定され、転じてMS-05Q向け改修部品の製造は中断。結果として完成した機体は30に満たなかったとされている。つまり、キャノン・ザビ中将が得たのは、後に手に入れることになるMS-06R-1A以上に希少な機体であったのだ。

ン・ザビ総帥が指揮する戦力は、親衛軍――名目上はデギン公王の直轄部隊――として切り離されたため、ジオン公国の国軍は大きく二つの組織に分割されることとなったのである。この時、貴重なMSパイロットたちもまた各軍に分配されているが、当時少尉だったギャビー・ハザードはドズル中将麾下の宇宙攻撃軍に配属されたという。

その後、第一次編成のMS機動部隊で小隊長の役割を与えられた彼は、MS-05Qザクを受領。同年1月には、すでにMS-06Cザクの量産が開始されていたが、ギャビー・ハザードは教導機動大隊時代に慣れ親しんだMS-05系の支給を望み、マイナーアップデートバージョンのQ型が与えられたようだ。Q型仕様に改修された機体が総計30機程度であったことを考えれば、この時点ですでにハザードは上層部からかなりの期待を集めていたものと思われる。そしてほどなく、開戦初期の戦場にて、この期待が正しかったことが証明される。



ギャビー・ハザード
突撃機動軍中佐
【軍籍番号 PM0556836225】

【大戦中の活躍】

U.C.0141、作戦司令官ドズル・ザビ中将麾下の宇宙攻撃軍部隊の一員として、ギャビー・ハザードはサイド5(ルウム)宙域にいた。MS-05Qを駆る彼は、後にルウム戦役と呼ばれることになる一連の戦闘にて、サラミス級巡洋艦2隻、FF-S3セイバーフィッシュを中心とした航宙機13機の撃墜をマーク。エースパイロットとして名乗りを上げた。その際、彼の乗機は、ザク・バズーカとヒート・ホークのみを装備していたとされる。対艦攻撃用で弾速の遅いザク・バズーカと近接戦闘用のヒート・ホークで、これほど多くの航宙機を撃墜したというのだから驚きだ。ともかくこの大戦果により、ドズル中将から直々に勲章を授与された彼は、二階級特進で大尉へと昇進している。

しかし、ルウム戦役からほどなくハザードは突撃機動軍へと異動している。どうやら教導機動大隊時代の上官からの引き抜きがあったようだ。ともかく転属した彼は、MS-06Sザク II を受領した。動きが固いとしてMS-06系に否定的な態度を示してきたハザードではあったが、出力とレスポンスが向上したS型の感触は良好だったらしく、すぐさま適応してみせたと伝えられている。なお、当初は頭部とシールド、スパイクアーマーのみをブラウンで塗装していたが、機体受



MS-06S ZAKU II

MS-06Sザクii

キャ・ザ・トナ艦撃機動重ヒ移籍した後も受領機体記録映像を確認する限りそ機部[illegible]制御用のサブコンピュータが増設されてないため、中も極初期生産された機体のひとであったようだ。

また彼の愛機を担当したメカニック整備兵が証言によれば、主推進器のケーブルエンジンを中心にチューンアップが施されており、出荷時よりも数パーセント最大推力が向上しているほかオプションパーツの追加も激しかったという。S型への機種転換期間も、ザクト生産ライン中止ギリギリまでパーツを使い切り機種変更不能状態に陥るような事故を起こしている友軍機よりも発見回収されるまでの数時間に優れMIA戦闘中に行方不明となったケースが多いのも、彼の名声のためか補足されたS型[illegible]機動性に優れた機体がそこに陥りやすい原因かもしれない。

なお機体塗装に関してであるが、受領当初は頭[illegible]トのみを塗装[illegible]機体受領から1ヶ月ほど後に再塗装を実施[illegible]手を軸に差し色を配する特徴的なトリコロールカラーが採用された[illegible]時

領から1ヶ月後には早くもカラーリングパターンを変更。全身をブラウンとブラックで塗装する、特徴的なパーソナルカラーを使い始めたのは、この時からだったようだ。以降、彼はこのS型で大戦中期まで戦い続けた。主にムサイ級軽巡洋艦の艦載機部隊の隊長として活動していたハザードは、地球降下作戦における船団護衛任務や地球軌道上の哨戒任務に従事。ルナツーを母港とする連邦宇宙軍との小競り合いの中で、着実に撃墜スコアを更新していった。

そして数ヶ月が過ぎた6月のこと、ギャビー・ハザードはグラナダへと召喚され、グラナダ守備隊への転属命令を受けている。艦隊勤務から一転して月面基地へと配属された彼だが、身を落ち着ける暇があったかと言えば、そんなことはなかった。新型機、MS-06R 1A高機動型ザクIIを受領、すぐさま機種転換訓練に入ったためである。しかも、所属基地がR型の開発拠点であるグラナダだったこともあり、設計を担当したエリ



MS-06R-1A高機動型ザクII

オット・レム少佐から、直接のレクチャーを受ける機会に恵まれたようだ　当時、クラナダに勤務していたルシオニック社の技師によれば、ハザードは操縦技量の高さはもちろん、パイロットが操縦時に感じる細かな感覚を言語化して説明することに長けており、レム少佐は大いに感銘を受けた様子であったという　こうして築かれた信頼関係は、次第にハザードにとっても良い方向で作用していくことになる　バズーカを好んで使用していた彼のために、H&L社が開発した新型兵装　シャイアント・バズ」が優先的に支給されたのだ　さほどの事とは思えないかもしれないが、ジャイアント・バズを運用するにはマニピュレータを介してMS本体から液体炸薬を供給しなければならないため、MS-09系のように予め運用を想定している機体でなければ、通常は装備はできない　この点をクリアするため、ハザードのR-1Aには、レム少佐の発案で液体炸薬供給システムが後付けで実装されたというのだ

かくして機動性に優れた機体と、ジャイアント・バズという高威力の新兵装を手にしたハザードは、連邦偵察艦隊の迎撃任務や月面領土戦で活躍することになる　しかし、戦場にトラブルは付き物でもある　9月12日、月軌道上で輸送艦の護衛任務に従事していた際、同部隊のパイロットのミスにより、僚機と激しく接触、機体の脚部ユニットを大損するという不幸な事故に遭遇してしまう　彼の機体は、すぐさまジオニック社の施設へと送られたが、整備部品が底をついていたこともあり、修理には時間を要する旨の連絡が入った　かくして彼は、代替機として当時最新鋭の1号機、MS-09Rリック・トムに乗り継ぐこととなる

この機種選択の理由として、使い慣れたジャイアント・バズを装備可能な機体であったことが、大き



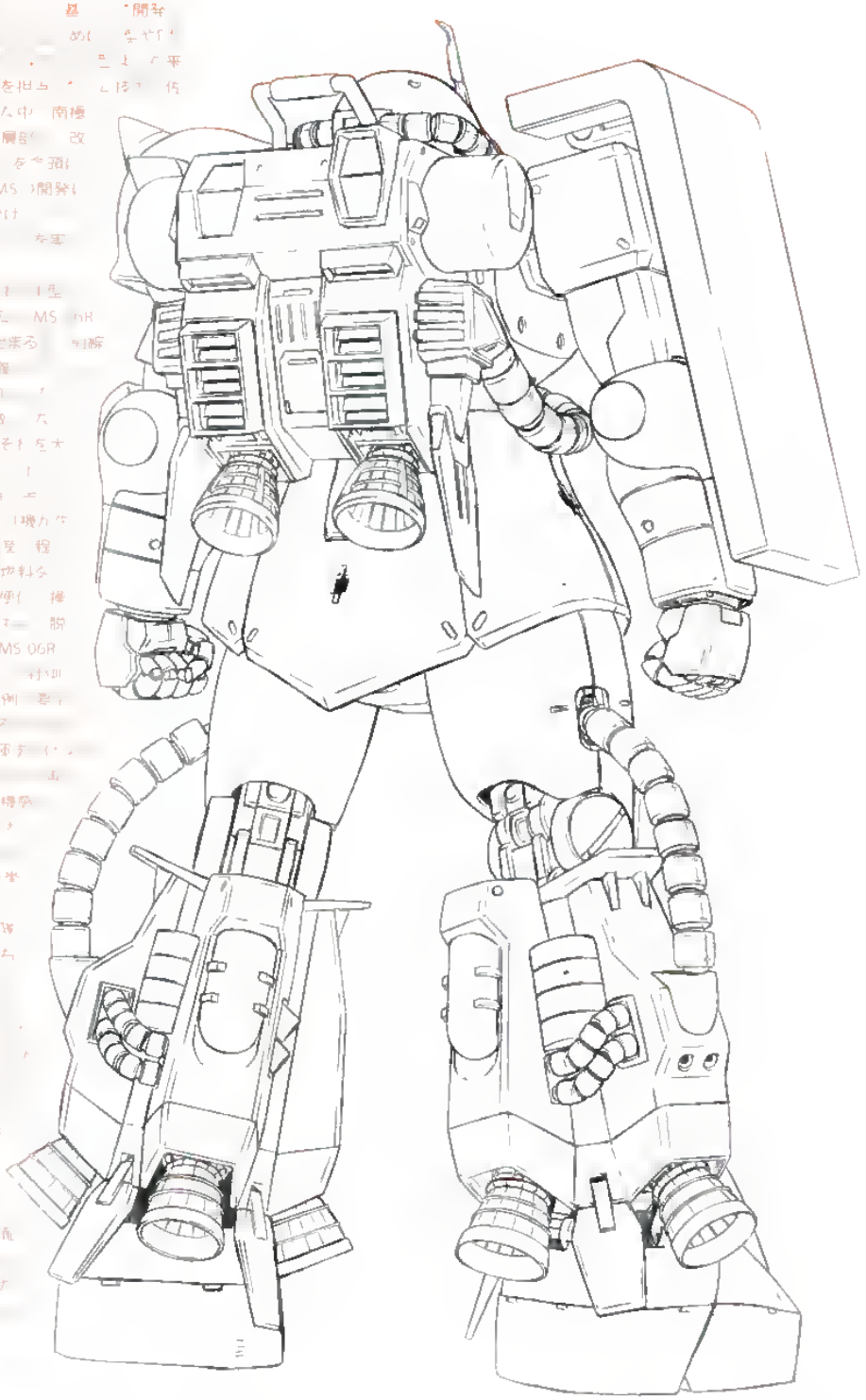
MS-06R-2高機動型ザクII

な要因と[illegible]とは想像に難くない　とはいえMS-09Rの連川は、あくまで一時的なものに過ぎなかった　ほどなく彼は、惜しくも量産選定に敗れた悲運の名機、MS-06R 2高機動型ザクIIを受領しているのだR1A型を失ってから、わずか2週間後のことであったというから、おそらくR2型の支給は予め決定されていたのであろう

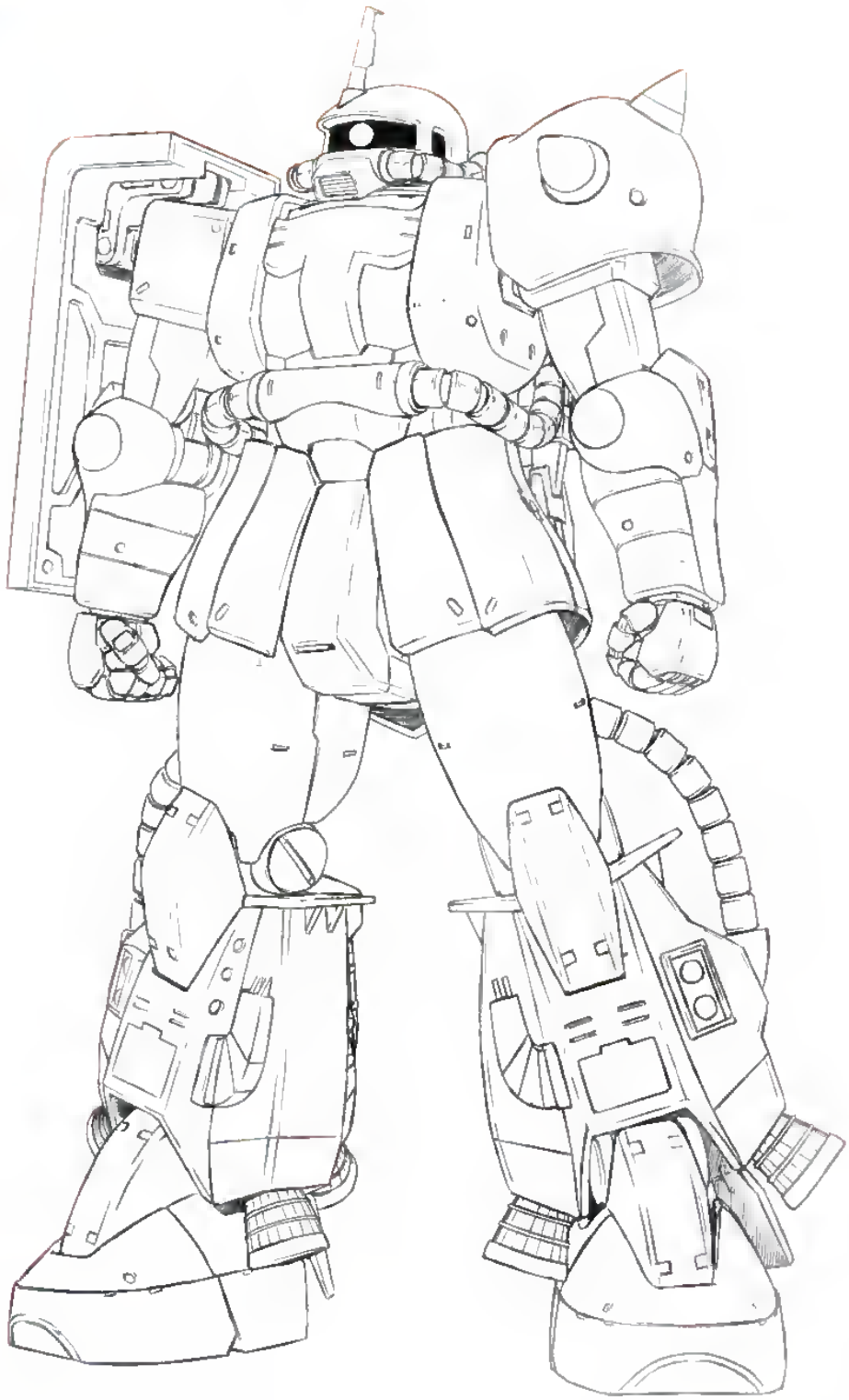
ともかく希少なR2ライダーとなったハザードは、その後もジャイアント・バズを片手に奮戦を続けることになる　グラナダ守備隊での勤務が続いたため、ソロモン攻防戦にこそ参加しなかった彼だが、キシリア・ザビ少将が自ら率いた増援部隊としてア・バオア・クー要塞へと異動しており、12月31日の同要塞攻防戦にも従軍している。ただし、多くのエースパイロットたちがそうであったように、"シオン独立戦争"における最終戦となったこの戦いにおいて、ハザードがいかなる活躍を見せたのかは判然としていない。混沌の戦場にて姿を消し、未帰還となっているのだ後日、ブラウン塗装のR型と思しき機体が、連邦軍艦艇の艦砲射撃によって大破する瞬間を目撃したとの友軍パイロットの証言が軍部に届け出られた結果、ギャビー・ハザード中佐は戦死認定を受けているが、これを疑問視する者たちも少なくない。MS-06R-1を含めればブラウン系のR型は複数存在しており、たとえ証言が事実であったとしても、それが直ちにハザードの死に結びつくとは限らない、との主張があるのだ。実際問題として終戦前後の混乱に紛れて姿を消した、いわゆる「ジオン残党」はかなりの数に上る　したがって、彼がア・バオア・クーでの戦いを生き延びた上で、暗礁宙域やアステロイドベルト――小惑星「アクシズ」など――に逃れていた可能性も十分に考えられるのである。■

MS-06R-1A ZAKU II

MS-06R-1A高機動型ザクII



MS-06R-1A高機動型ザクII





MS-09R RICK DOM

MS-09Rリック・トム

U 0 79年9月12日の不幸な出来事に 愛機 っM 06R Aを失 ナキービ ・ハサ トは 代替機と MS 09Rを受領 ナ ニ 機体を運用 ナ は約2週間と短 出撃は10回を下回 交戦に至 ては片手の指で数え れるほど あ たと伝えられ る

本機はあ まで MS 06R 2を受領するまで 時的な乗機に過ぎず ナか てカラ ク タ の変更を含め 特別なカスタマイズの類はほとんど行われていな 本体胸部 イ 機番 457 が記されたみ であ た



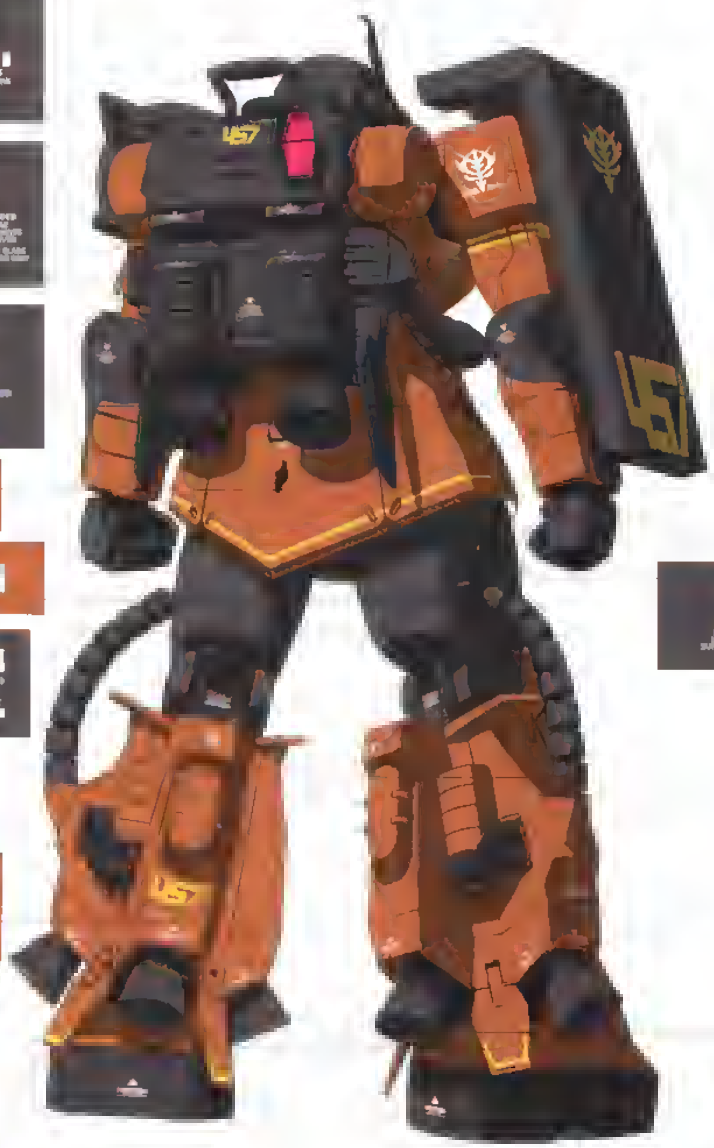
■H&L GB05R ジャイアント・バズーカ

一年戦争時に運用されたMS用携行兵装としては最大級のサイズを誇る火器。口径は360mm。MS側から液体炸薬を供給するシステムを採用しているため、この火器を使用するためには、本体に専用の機構が必要とされる。また、非常に重量があるため取り回すためには相応のトルクが求められたといい、この兵装の運用が想定されていたMS-06R 2の腕部ユニットの関節は、従来型の機体と比べかなり強化されていたようだ。



[illegible]ト」活躍するには、単に機械技術や戦術のセンス[illegible]、愛機の挙動やコンディションを把握する能力、また開発者や整備担当のメカニックマンと意思疎通を図り、機体を自分にとって万全な状態に保つといった能力もまた重要である。ギャビー・ハザートは高機動型ザクIIに特別な改修を施して使用したが、技術者と組み上げた兵器の戦闘力を十全に引き出せたからこそ、彼はエースパイロットたり得たといえるかもしれない。


RESCUE
457
DANGER
CAUTION
WARNING
CAUTION
CAUTION
CAUTION
DANGER
HOT EXHAUST BLASTS
WARNING
457
NOTICE
DANGER
HOT EXHAUST BLASTS
CAUTION



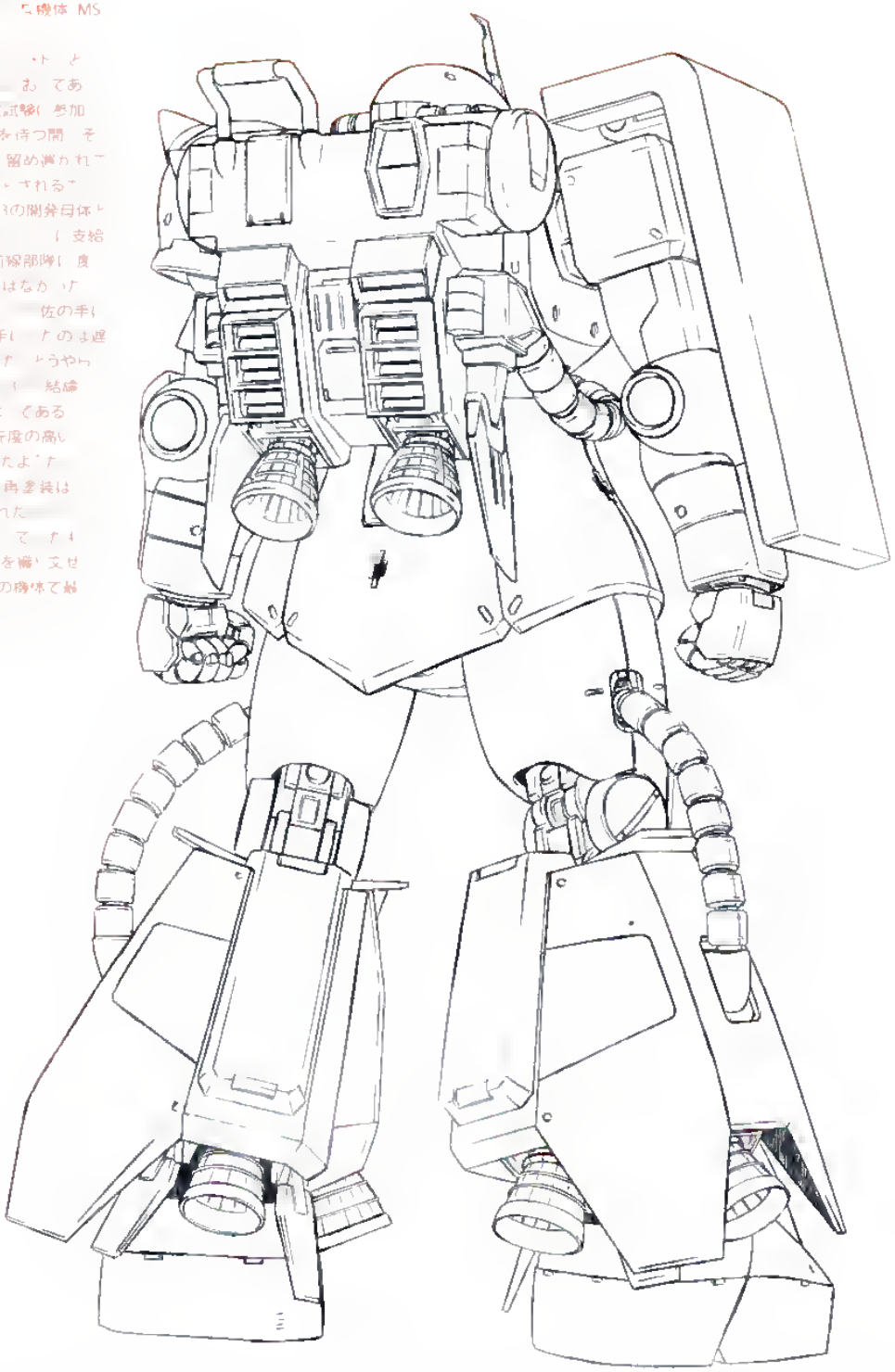
MS-06R-1A ZAKU II CAUTION SIGN AND MODEX

MS-06R-2 ZAKU II

MS-06R-2高機動型ザクII

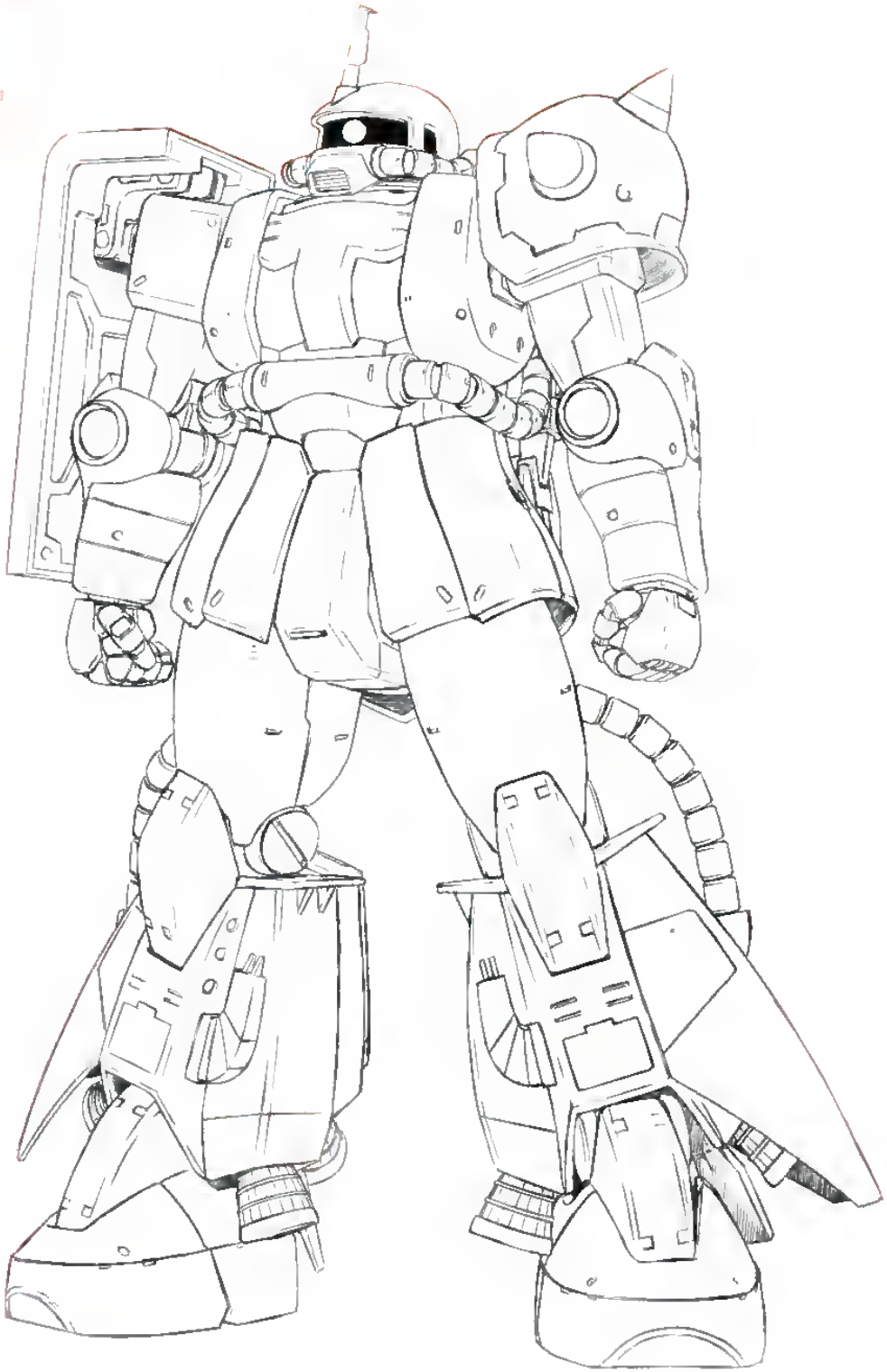
オ 伸 戦争 ト た オ ー 最後
ナ機作 ゃ生産数 る 4機 系 ら機体 MS
06R で ナ

本機り 前定モ 機 の座をMS 09R ・ト と
争 ナ機体である ゃは よ 乳れた お てあ
る 7月 (ヘ ナタ ィわれた選定試験 参加
ナ ナ 4機は 重 層部による結論を待つ間 そ
ま オ ' 社 ナタ 場 留め置かれ ナ ほとな オ採用の通知かもたらされる
る その後 社内 残されMS 06R 3の開発母体と
る1機を除き 3機か申請のあ (支給
いれる なるのか そオ ' 前線部隊 度
されナ (クはょすしも同時期ではなかナ
8月初旬 セくも1機か ・ ・ イ 佐の手 度 て るカ キャヒ ・ サ か手 ナのは遅れる ヒ 月弱、9月下旬頃たよよ とうやら 何機を研究開発用に社内に残すか 結論 へ出るま は 忖余曲折かあ たよ である そのため 放出枠か決まる直 優先度の高い 申請者に対し 順次 支給されてい たよ ナ なお サ ト 専機となるR2型 再塗装は オ 社 ナタ 場アイれた ハ ハタ は R1A型て用 て ナ ほぼ 系(クを揃い文せ ナ な アる サ トは この機体て最期まて戦い抜しナのた ナ



MS-06R-2高機動型ザクII

型番号 [illegible]
全高
頭頂高 7.5m
本体重量 8[illegible]t
全備重量 不明
装甲材質 超硬スチ[illegible]ール合金
エネル[illegible]ギー出力 不明
スラスター推力 不明




RESCUE
457
DANGER
CAUTION
WARNING
CAUTION
CAUTION
457
57
NOTICE
DANGER
WARNING
DANGER
CAUTION



MS-06R-2 ZAKU II CAUTION SIGN AND MODEX



MOBILE SUIT OF ZEON

IAN GRADEN

イアン・グレーデン

北米戦線は、[illegible]において最も激しい戦闘が行われた地域の一つであり、多くのエースパイロットが生まれたが、なかでもイアン・グレーデンは高い評価を得た人物として知られている。彼は、公国軍の北米大陸における最重要拠点、キャリフォルニア・ベースにおいて守備隊長の任に就き、地球連邦軍による[illegible]よく対抗した。

彼の[illegible]連邦軍がMSを全面的に戦線へ投[illegible]以前に記録されたものが多く、MSの撃墜数は通[illegible]2機と、ほかのエースたちに比べればいささか見劣りする。だが、大戦を通して記録した航空機34機、戦闘車両71両というスコアは、ミノフスキー粒子散布下におけるMSの[illegible]性を存分に利用したものであったとは[illegible]ものであり、グレーデンが類い希な操縦センス[illegible]たことに疑いの余地はない。なお、MS[illegible]数に関しては、キャリフォルニア・ベースから退き、最終的にケープ・カナベラル基地において連邦軍に投降するまでの間に、幾分かの上積み分があるのではないかとも推測されるが、これについては後述する。

さて、後に北米戦線きってのエースとなるイアン・グレーデンが生まれたのは、U.C.0051年のことであった。ヨーロッパからの移民者の家庭に生まれた彼は、多くの国民が公国宣言に沸いていたU.C.0069年、18歳の若さで軍に志願している。[illegible]で基礎訓練を終えた後、彼が配属された[illegible]就航間もないペプア

MS-05B ZAKU I



MS-05Bザクi

史上初のMS部隊として知られる教導機動大隊には、その設立当初、27機のYMS-05――後にMS-05Aへと改称――が配備されていた。パイロットの育成、およびMSを使用した戦術の開拓を目的としていた同隊は、所属する人員はもちろん配備される機体にとっても過酷な試練の場であり、発足後の数ヶ月間で訓練中に出た死傷者は10数名に登り、少なくとも5機のMSが喪失したといわれている。今日的な視点に立てば常軌を逸しているようにも思える教導機動大隊の訓練であるが、それだけ実戦に近い厳しい状況での運用であったとも言え、だからこそ、未知数の新兵器であるMSが抱える多くの問題点を洗い出せたのだ、という論もある。翌年7月には、同隊での運用を経て指摘された点を改善したMS-05Bが配備されているが、これこそが史上初の主力MSたるMS-05系の中でも最大の生産数を誇る機体となった。この事実もまた、グレーデンら教導機動大隊の精鋭たちによる成果のひとつと言えるだろう。なお、B型の最大の特徴は、主機をZAS社製のZAS-MIBBから、M&Y公社製のMYFG-M-E5に換装した点である。規格や性能的には同等といえるものであったが、後者の方がメンテナンス性に優れており、再出撃に要する時間が圧倒的に短かったという。

級ミサイル戦艦といった前衛部隊ではなく、後方支援部隊の古びた補給艦であったらしい。血気盛んな若者としては、大いに不満を感じる配置であったのだろう。その後、数度に渡り航宙機パイロットへの転属希望を出しており、ほどなくこれが受け入れられる形で、パイロット候補生として訓練を受けることになる。そして、念願叶ってコブル型宇宙戦闘攻撃機のパイロットとなり、以後の数年に渡って本国防空隊の一員としてキャリアを積むことになるのだった。

さらなる転機が訪れたのは、U.C.0074年のこと。同部隊のゴブル乗りから、MSの存在――当時、ロールアウトしたばかりのMS-05Aザクiのことだと思われる――を伝え聞いたのである。たちまちこの奇妙な新兵器に魅了された彼は、後にMSを装備した新部隊が設立されるとの情報が正式に通達されると、真っ先に志願の手を上げたのだった。むろんMSパイロット候補生の一次募集は定員が少なく狭き門であった。しかし、グレーデンは厳格な選抜試験と、さらに厳しい訓練過程を見事にくぐり抜け、翌0075年11月に発足した教導機動大隊に配属されている。そして、この伝説的な部隊にて彼の才能が開花してゆく。密閉型コロニー内の秘密実験場で行われた重力下戦闘訓練で、グレーデンはずば抜けて高い適正を示したのだ。それゆえ彼は、1G下におけるMSの戦技開拓を主目的とするチームに抜擢され、さらに翌年の0078年秋の時点で訓練教官の任を拝命するに至ったのである。







イアン・グレーデン
地球攻撃軍中尉
【軍籍番号 PM0513384612G】

【開戦】

重力下戦闘のエキスパートという地位を揺るぎないものとしたイアン・グレーデンであったが、開戦前後の一時期に限って言えば、その肩書は彼にとって足枷でしかなかった。

同じ教導機動大隊出身のパイロットたちが、一週間戦争やルウム戦役といった開戦直後の緒戦において華々しい活躍を演じ、次々とエースの称号を獲得してゆく中、訓練教官だった彼は常に後方にあり続けた。しかも、当時の公国軍将兵は等しく独立戦争は短期間で終結するものと考えており、地球上にまで戦線が拡大するとは予測していなかった。したがって彼は、あり得ない重力下戦闘を教える者として、異形のMSパイロットでありながら軍内の冒険に位置するという微妙な扱いを受けていたのである。

ところが状況が一変する U.C.0079年1月29日、先のルウム戦役にて囚われの身となっていた連邦宇宙軍の名将、レビル中将が特殊工作隊の手でサイド3本国より奪還されたのである。さらにレビル中将は、地球連邦の勢力圏内に戻るや「ジオンに兵なし」と、全世界に向けて演説を発信。これが決め手となり、南極で行われていたジオン公国と地球連邦の両政府による停戦交渉は決裂し、戦時協定の締結に



MS-06C ZAKU II

MS-06Cザクll

ンオン独立戦争の開戦前後，重力下戦闘の教官を務めていた時にイアン・グレーデンが用いていた機体　ズム・ンティ工廠で製造されたMS-06Aの1機であり，彼はこの機体を以て，教導機動大隊の同僚たちと協力しつつ，陸上におけるMS戦闘の基礎技術を築き上げていった　なお，一見すると通常の機体と変わらないように見えるが，地上における運用法を研究する過程で，パイロットが乗降する際に用いるワイヤー式昇降装置や，重力下での整備性を考慮して開閉方向を調整したメンテナンスハッチなと，今では当たり前となっている仕様か定められ，順次，追加実装されていったとのことである

ちなみに，本機は後にC型仕様へと改められ　シールドとスパイク・アーマーか追加されているか，その際には左右の重量バランスに差か出ることから，グレーデンを中心に重力下歩行プログラムの最適化作業を行ったエピソートか今に伝えられている　このような彼らの地味な働きかあってこそ　ンオン公国軍は電撃的な地上侵攻作戦を成功させることかできたとも言えるたろう

留まったのだ　か、しこ戦争の長期化か確定し，公国軍上層部は継戦に必要な資源を獲得するための手段として、地球降下作戦の立案を急ぐこととなったのである。そうとなれば、重力下戦闘の専門家たるグレーデンに否か応でも目か集まるというもの　2月1日を以て、ガルマ・ザビ大佐を総司令とする地球攻撃軍の発足か発表されると、彼はその一員として前線部隊への異動命令を受けている

イアン・グレーデンの配属先は、地球攻撃軍第二地上機動師団、北米大陸を攻撃目標とする第一次降下作戦の主戦力となる部隊であった。二名の部下と共に、MS-06Fザクllを受領した彼は、2月半ばからの2週間弱で慌ただしく機種転換訓練を行うと、3月11日、作戦開始の号令を受けて北米へと降り立っている。ちなみに余談であるか、第一次降下作戦にて旧ロシア領の資源地帯に降り、その後、南欧での第二次掃討作戦で活躍した第29機甲中隊、通称「ブリッツ中隊」の面々もまた、教官時代のグレーデンの教え子たちであった。師に先駆けて地球に降り立ち、戦功を挙げてみせた彼らの成功を伝え聞いたグレーデンは、大いに奮起して自らの降下作戦に臨んだという。



MS-06Fザクll

さて、北米の砂漠地帯に降下した第一地上機動師団は、東西の二手に分かれて進軍しているが、グレーデンが属していたのは西海岸方面に進出した部隊であった。彼らに与えられた目標は北米地域最大の連邦軍基地、キャリフォルニア・ベースの占領である。当然、激しい抵抗が予想されていたが、彼らには、じっくりと時間を掛けてはいられない事情があった。当地には、コロニー落としの余波で損害を受けた潜水艦隊が修理のために入港していたのだ。自前の海洋戦力をほとんど持たない公国軍としては、是が非でも潜水艦隊が修理を終えて出港する前に港湾施設を抑え、これを確保しなければならなかったのである。

潜水艦隊を逃がすべからず、この至上命題を達成すべく、グレーデンたちMS部隊は危険を承知で突出し、激戦に身を投じることとなった。結論から言えば、彼らはやってのけた。降下からわずか2日後の3月13日、第一地上機動師団は、キャリフォルニア・ベースを制圧、見事に建造されて間もない新鋭艦を含めた複数の潜水艦を鹵獲することに成功したのだった。なお、グレーデンはキャリフォルニアを巡る一連の戦いで、61式戦車を中心に戦闘車両11両を破壊。後にこの功績を以て、ガルマ・ザビ大佐から勲章を授与されている。

【キャリフォルニアのエース】

ジオン公国軍は、制圧したキャリフォルニア・ベースを、そのまま自らの拠点として利用することとした。その際、注目すべきは本国からジオニック社やMIP社からの出向組を含む多くの技術を呼び寄せ、兵器開発工廠を置いた点である。以後、キャリフォルニアでは、陸戦、および水陸両用型MSの開発、航空機や陸上兵器の生産、鹵獲した潜水艦の改装といった重力戦線を支える兵器群の準備が加速してゆく。したがってキャリフォルニア・ベースは北米地域の主要拠点であるというだけでなく、資源採掘拠点たるオデッサと並んで重力戦線を支える地球攻撃軍の最重要拠点と位置づけられた。それだけに防衛体制の構築は念入りに行われており、先の制圧戦で多大な戦果を挙げたイアン・グレーデンもまた、守備隊の一員として配置されることとなる。

ただし、グレーデンに求められていたのは、単なる基地施設の防衛任務だけではなかった。守備隊に属しながらも、ふたたび訓練教官として地上戦のノウハウを教える立場に立たされたのだ。彼の教え子となったのは、補充人員となるべく送り込まれてきた新米パイロットだけでなく、戦前からMSに乗っていたベテランも含まれていた。そのどちらであっても、皆一様に地球上の環境には不慣れで、重力下特有の戦闘技術を伝える必要があったためである。そこでグレーデンは教官の立場から数々の意見具申を行い、効率的な重力下適応を目的とした訓練プログラムを作成にも貢献した。その中には、ガウ級攻撃空母からの空挺降下術やド・ダイYSを用いた空戦技術なども含まれており、彼の指導によって巣立っていったパイロットたちの多くが、後のジャブロー攻略戦などでその戦技を実践することとなる。

一方、グレーデンは守備隊のパイロットとしても戦功を重ねていった。守備隊の発足当初は、MS-06Jザク II を運用していたが、この頃はまだ連邦軍側も反撃の糸口さえ見つけられない有様で、交戦の機会は少なかった。しかし、数ヶ月も経過すると、ようやく後手に回り続けていた連邦軍も態勢を整えたと見え、威力偵察や基地施設の破壊を目的とした攻撃が行われるようになり、少しずつ出撃の頻度が増していくことになる。そうとなれば、星の数も増えるというもの。出撃を重ねるごとにスコアを重ねていったグレーデンは、後方の基地に駐屯する守備隊に身を置きながらも、北米戦線きってのエースパイロットとして知られるようになっていく。

驚異的であるのは、その撃墜数のみならず、攻め手である連邦軍部隊の裏をかく「先読み」の戦術であった。状況判断に長けるというような表現では足りぬほど、少ない情報から驚くほど正確に敵軍の動向を読み取り、それゆえに通常では憚られるような大胆な作戦を実行に移して、敵味方の双方を驚かせた。

その一例として、グレーデンが多用した挟撃戦術が挙げられる。基地施設へと侵攻する敵軍の背後へと少数の手勢を率いて密かに周り込み、攪乱しつつ挟撃を行うのだ。ただし、この戦術は成功すれば背後から一方的に蹂躙できるが、万が一にも動向を察知されて敵軍が反転してきた場合、孤立する形となるため極めてリスクが高い。ミノフスキー粒子散布下の戦場では、広範囲に及ぶ敵軍の動向を完全に把握することは難しく、負けない戦い方が求められる防衛戦では、なおさらのこと基地を背にした布陣がセオリーとされる。しかし、グレーデンはあえて自ら部下を率いてこれを行った。大戦初期から中期にかけて、組織的な作戦行動力を失っていた北米地域の連邦軍は、各地でゲリラ的な抵抗活動を続けていたが、そうした戦術に対しては、待ち構えて防戦一方となるより、機動力を活かして柔軟に対応する方が効果を発揮したのである。防衛側である公国軍がセオリー通りの行動を取るという前提で攻める連邦軍部隊は、多くの場合、裏をかかれて潰走する結果となった。



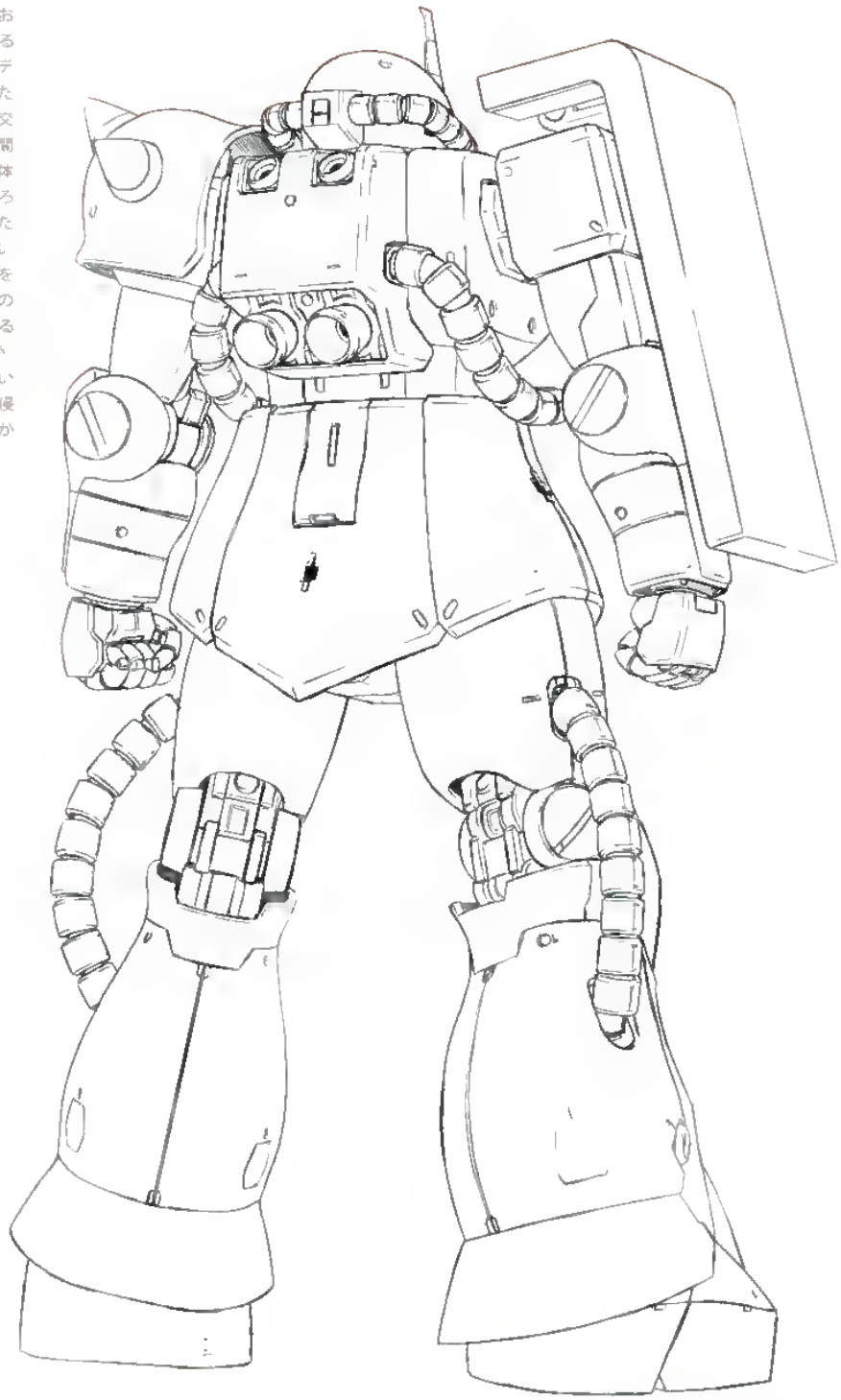
MS-06Kザク・キャノン(ラビットタイプ)

また、グレーデンはMS-06Kの特徴を活かし、戦闘中に躊躇なくランドセルを投棄して接近戦闘を行うことがよくあった。いかに威力が優れていようとも、弾切れを起こした180mmキャノン砲は邪魔なだけのデッドウェイトに過ぎない。そうてあれば、切り離そうという発想自体は理解に叶っているか、大戦も末期に入り補給が滞りがちになっていた公国軍の前線部隊では、後に使える装備を捨てるという思い切った行動には、なかなか踏み切れないものてあった。むろん、キャリフォルニア・ベースという大兵器製造工場を拠点としていたからこその"思い切り"ではあるのだが、その一瞬の判断が戦場では生死を分かつことになる。グレーデンのパイロット適性を雄弁に物語るエピソードのひとつても、過言ではないだろう。たたし、ランドセルの回収、整備、再装備の手間は当然のごとく整備員にのしかかることになる。彼の多大な戦果の影には、こうした整備兵の苦労があったことも忘れてはならない。

MS-06F ZAKU II

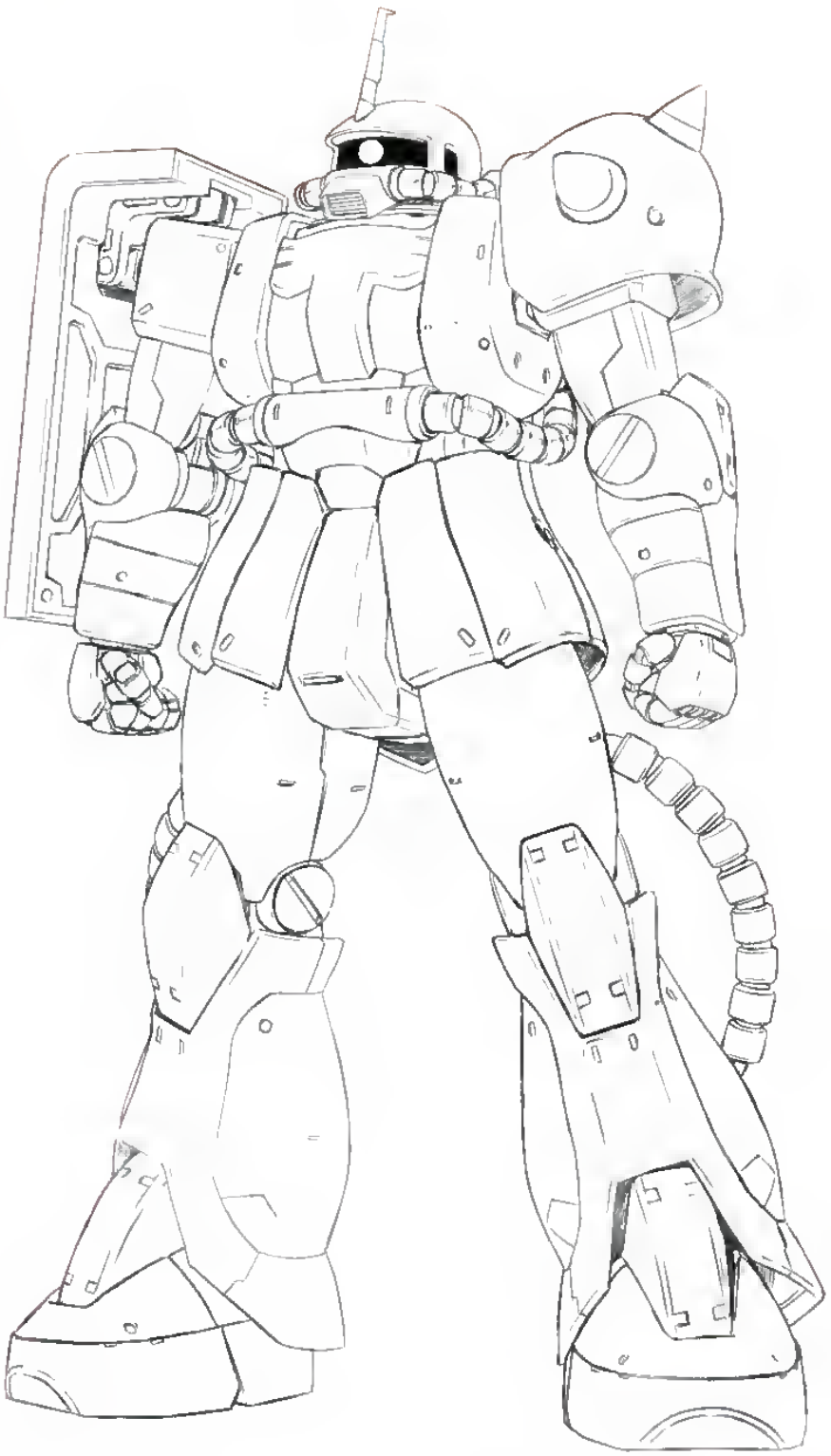
MS-06Fザク

地球攻撃軍第二地上機動師団への異動と併せて、イアン・クレーデンが受領した機体。地上用のMS-06Jは、UC 0079年1月中旬には既にロールアウトしており、第2次降下作戦より、実戦投入が本格化しているのだが、また生産数が限られていたため、クレーデンが受領したのはF型から空間戦装備を取り除いた簡易型とでも呼ぶべき機体であったようだ。停戦交渉の決裂から地球侵攻作戦の決定まで、さほど時間的な余裕があったわけではないため、これらの機体の重力下環境への適応作業については整備員はおろか、パイロットまでもが参加し、大慌てで行われたということである。第二地上機動師団に所属していたMSパイロットが述懐するところによれば、降下を控えたHLVの中でも作業は続き、コクピットハッチの周辺に転落防止用の滑り止めとしてラバー材を貼るため四苦八苦していたとのこと。クレーデン自身がそのような作業をやっていたのかまではわからないが、しばしば電撃的と評される公国軍による地球侵攻作戦の裏には、このような地道にも思える努力があったということである。



MS-06Fザクll

正式番号 MS-06F
全高 17.5m
本体重量 56.2t
全備重量 74.5t
装甲材質 超硬スチール合金
ジェネレーター出力 976kw
スラスター推力 43,300kg
センサー有効半径 3,200m




RESCUE
CAUTION
WARNING
CAUTION
CAUTION
CAUTION
NOTICE
DANGER
HOT EXHAUST BLASTS
CAUTION



MS-06F ZAKU II CAUTION SIGN AND MODEX

WEAPON

ザクIIの武装



■EA-6 ヒートホーク Type5

赤熱化したブレードで、敵機を溶断する白兵戦用兵装。そのルーツは、コロニー建設に用いられる作業用宇宙艇搭載の高周波誘電溶断器にあるとされ、本来はユーティリティー・ツールとして開発された。コロニー内部や宇宙要塞への進入時に、通路を塞ぐハッチや残骸を除去するような目的での運用が想定されていたのである。ところが、これが対艦攻撃や対MS戦闘に有用であるとされ、次第に武器として扱われるようになったのだ。

■M-120A1 ザク・マシンガン

MS-06と並行して開発された120mm口径のマシンガン。ジオン公国軍におけるMS用標準兵装と位置付けられたため、大戦を通して大量に製造され、各戦線で利用された。ライセンス生産が行われたため、ほぼ同仕様のZMP-50DやMMP-78といった火器が複数存在する。またショートバレルタイプのM-120ASや、銃剣型ヒート剣を追加したM-120ACといった亜種も多い。



【北米戦線の崩壊】

やがて、北米戦線も約半年にわたる膠着状態を脱し、情勢が大きく動くUC.0079年9月18日、サイド7・1バンチコロニーにて存在が確認された連邦軍製MSが、母艦たる強襲揚陸艦「ホワイトベース」共々、友軍のシャア・アズナブル少佐（当時）の追跡を逃れて、北米地域へと降下してきたのである。これに対し、地球攻撃軍司令ガルマ・ザビ大佐は自ら部隊を率いて迎撃に当たった。これが9月23日のこと。ホワイトベースは南進して南米シャブローを目指す予定であったが、公国軍の勢力圏である北米を横断することは危険であると判断してこれを断念。そのまま西進して、太平洋へと抜けるルートを選択した。その際、シアトル方面へと向かったが、ガルマ・ザビ大佐は重要拠点たるキャリフォルニア・ベースの防衛戦力を割いて迎撃に当てることは認めず、シャア・アズナブル少佐と連れ立っての追撃にこだわったようだ。結局、グレーデンたちは、ホワイトベースと交戦する機会を与えられず、運命の10月4日を迎えることになる。この日、ガルマ・ザビ大佐は、ガウ級攻撃空母による特攻を敢行。廃墟と化していたシアトル市街地の上空にて戦死を遂げたのである。

総司令を失ったことで、微妙なバランスの上で成り立っていた北米戦線にほころびが生じた。10月以降、地球連邦軍は北米にもMSを投入し始めることになるが、これに対抗すべき時に国民的にも人気の高い"プリンス"を喪ったことは、指揮系統の乱れや士気の低下という面で思いの外、影響力があったのだ。

この時期、グレーデンは新たにMS-06Kザク・キャノンを受領し、中尉に昇進の上、新設されたキャリフォルニア・ベース直属の支援戦闘MS中隊の中隊長に抜擢されている。この機体を得てからの彼の活躍はめざましく、認定戦果も上昇曲線を描いていくことになるのだが、裏を返せばそれだけ交戦の機会が増えたということでもある。ほころびは、日を追うことに広がり始めていたのだ。

その象徴ともいえるのが、10月下旬に行われたキャリフォルニア・ベースに対する大規模空爆である。この危機に際してグレーデンは、120mmガトリング砲を装備した状態で出撃して対空火線を張り、フライマンタ型戦闘爆撃機を中心に対航空機スコアを荒稼ぎしてみせた。だが、彼は個人の認定戦果を喜ぶこともできなかった。なぜなら、この空爆は同時期



■腕部3連装ミサイル・ポット

対艦用の手撃ち放し式兵器として開発された兵装。ザ
ックバズーカと共通の弾体が使用可能なように設計され
ため、当初は280mm口径であった。地上に展開するMS
稼て導入される際にはケーシングをそのまま流用した
推進用モーターの増設を期すため口径は320mmまたは
340mmとされ、弾体を地上目標の破壊に適したものへ
変更して使用した。飛翔体は発射後展開する折り畳み有
翼式である。

■H&L-SB25K ザク・バズーカ

対艦攻撃用に開発された280mm口径
のMS用バズーカ。開戦当初は戦術核
弾頭を用いることで、地球連邦が誇る
宇宙艦隊相手に猛威を奮ったが、南極
条約の締結に伴いNBC兵器の使用が
禁止されたため、これ以降は通常弾頭
を使用するようになった。とはいえ、宇
宙艦艇や要塞施設に対して有効な火
器であることに変わりはなく、大戦を通
して運用され続けることになる。

ヨーロッパ戦線で準備が進められていたオデッサ作戦に対する陽動であったことが、ほどなく明らかとなったためである。北米の公国軍は、各地の部隊をキャリフォルニア・ベースに引き上げさせ、防御態勢を固めに入ったが、それこそ連邦軍の思う壺であった。11月7日、レビル大将率いる連邦軍部隊はオデッサ作戦を発動。3日間に渡る激戦の末、旧ロシア領の資源地帯の奪還に成功した。そして、この戦いを境に、北米戦線にも火の手が上がり始める。

11月に入り、連邦軍はオーガスタやバンカーバーといった北米に残存していた拠点にて、MS部隊の新設を進め、いよいよ反撃の態勢を整えつつあった。むろん公国軍とて無策であったわけではなく、シャア・アズナブル大佐率いる「マッド・アングラー隊」がシャブローの侵入口を発見したことを糸口として、11月30日、残存戦力をかき集めてシャブロー攻略を試みている。たが、運命の日は北米の公国軍にとって最悪の日を出した。多大な損害を受けながらもシャブローは持ちこたえ、公国軍はなけなしの戦力を失ってしまったのである。守備隊として居残りを命じられていたクレーデンは、攻略失敗の報を聞いて、ただ静かに沈黙をしたと伝えられている。

先読みに優れていた彼の沈黙は、おそらく先の暗い見通しを予見してのものだったのだろう。11月30日、シオン公国総御府は地球攻撃軍の重力戦線からの撤退を正式発表。12月5日より、北米戦線においても本格的な撤収作業を開始している。この日はまた、連邦軍側がアフリカ大陸と北米大陸の双方で"掃討作戦"の発動を宣言した日でもあった。グレーデンが守るキャリフォルニア・ベースは、HLVの発射施設を備えていたこともあって、数少ない脱出口となった。彼の役目は、地球侵攻の拠点を守ることから、逃げゆく友軍部隊を殿となって守るものへと変じていったのである。

グレーデンたちは、連邦軍の進軍を阻止すべく手を尽くした。ある時の戦いでは敵の進軍ルートを予測した上での待ち伏せ作戦を敢行。陸戦兵器を満載したミデア型輸送機を、護衛の航空機共々撃ち落としてみせた。この戦いでグレーデンは、K型への機種転換後の通算撃墜記録を30機に延ばし、シオン公国軍最高司令部から報償を授与されている。ただし、公国軍側も無傷ではなく、連邦軍輸送部隊を全滅に

追い込みながらも、J型1機大破、K型2機中破という損害を出していたようだ。いかに個人の戦績を高めようとも、少しずつ味方の戦力は削られてゆく。これ以降、終戦までの間、グレーデンにとっての戦いは厳しさを増すことはあっても、楽になることはなかったという。

12月14日、連邦軍は北米大陸西海岸地域への侵攻作戦を決行。第11独立機械化混成部隊を含む、多数のMS部隊を投入して、キャリフォルニア・ベースの攻略に挑んだ。幾度となく攻勢をはねのけてきたグレーデンたち守備隊も、この大戦力を前には、ただ時間稼ぎをするのが精一杯。エースとして高く評価されていたグレーデンには、HLVに席も用意されていたというが、守備隊長が戦列を離れるわけにもいくまいと一蹴し、固辞したと伝えられている。

かくして、キャリフォルニア・ベースは陥落した。だが、グレーデンも侵攻部隊に対して、2機の友軍機——MS-06JKザク・ハーフキャノンであったとされる——を引き連れて得意の遊撃作戦を敢行。前線司令部を兼ねていたヘビィ・フォーク級陸上戦艦を撃沈している。これはビッグ・トレー級に比べれば小型ながら強力な火砲を備えるものであったが、僚機と連携しつつ足を止めると、180mmキャノン砲の一撃でブリッジを破壊したようだ。ともかく、この攻撃で敵陣に穴を開けた彼らは、そのまま死地からの脱出に成功している。以後、グレーデン率いるキャリフォルニア・ベース守備隊の残余は、補給のアテもないままに北米大陸を東進。連邦軍の追撃を振り切りながら、時に友軍の残存兵力と合流しつつフロリダ方面へと向かっていった。ケープ・カナベラル基地のHLV発射施設から、宇宙へと脱出するという微かな望みを抱いての行軍であった。

【終戦】

やがてケープ・カナベラル基地に辿り着いたグレーデンとその部隊——それまでの過程で離合集散を繰り返し、もはやキャリフォルニア・ベース守備隊とは言い難い陣容となっていた——は、撤退する味方を援護するためこの地に踏みとどまって戦った。12月下旬に入ると、HLVもほとんど底をついており、宇宙港に身を寄せたとて軌道上への帰還も望み薄となっていたが、2000人の将兵を守ってグレーデンはよく戦った。なお、基地内における指揮系統の調整により、戦時特進の処置を受けて上級中尉となった。

この終戦間近のケープ・カナベラル基地における攻防戦で、彼は初となるMSの撃墜を記録。RGM-79ジムを2機、RGC-80ジム・キャノン1機を撃墜したようだが、かなり混沌とした状況であったらしく、認定戦果における対MS撃墜数は2機となっている。

終戦の報を受けると同時に、グレーデンは基地に残った将兵の安全を確保することを最優先とし、連邦軍に投降した。詳細は不明であるが、捕虜として囚われている間も沈黙を貫き、下される処断を甘んじて受ける覚悟を決していた様子であったという。派遣された弁護士の献身的な計らいにより処罰を免れ、U.C.0080年10月、釈放の上、ジオン共和国へと帰還を果たしている。なお、戦後の調査によれば、理論家でありながらも不可解な「先読み」によって、多くの戦果を挙げた彼の動向について、ニュータイプの資質があったのではないかとも言われている。法廷とは無縁の証言者によれば、ケープ・カナベラルの戦いにおいても10に近い数のMSを、たったひとりで相手取り、少なくともその半数は撃破していたとの説もある。これが事実だとすれば、隠れた対MS・エースパイロットでもあったことになるのだが、イアン・グレーデン自身がそのような主張をしたことは一度としてなかった。スパイダーの意匠をパーソナルエンブレムとした男は、ただ蜘蛛のように沈黙を守り続けたのである。■



MS-06K ZAKU CANNON

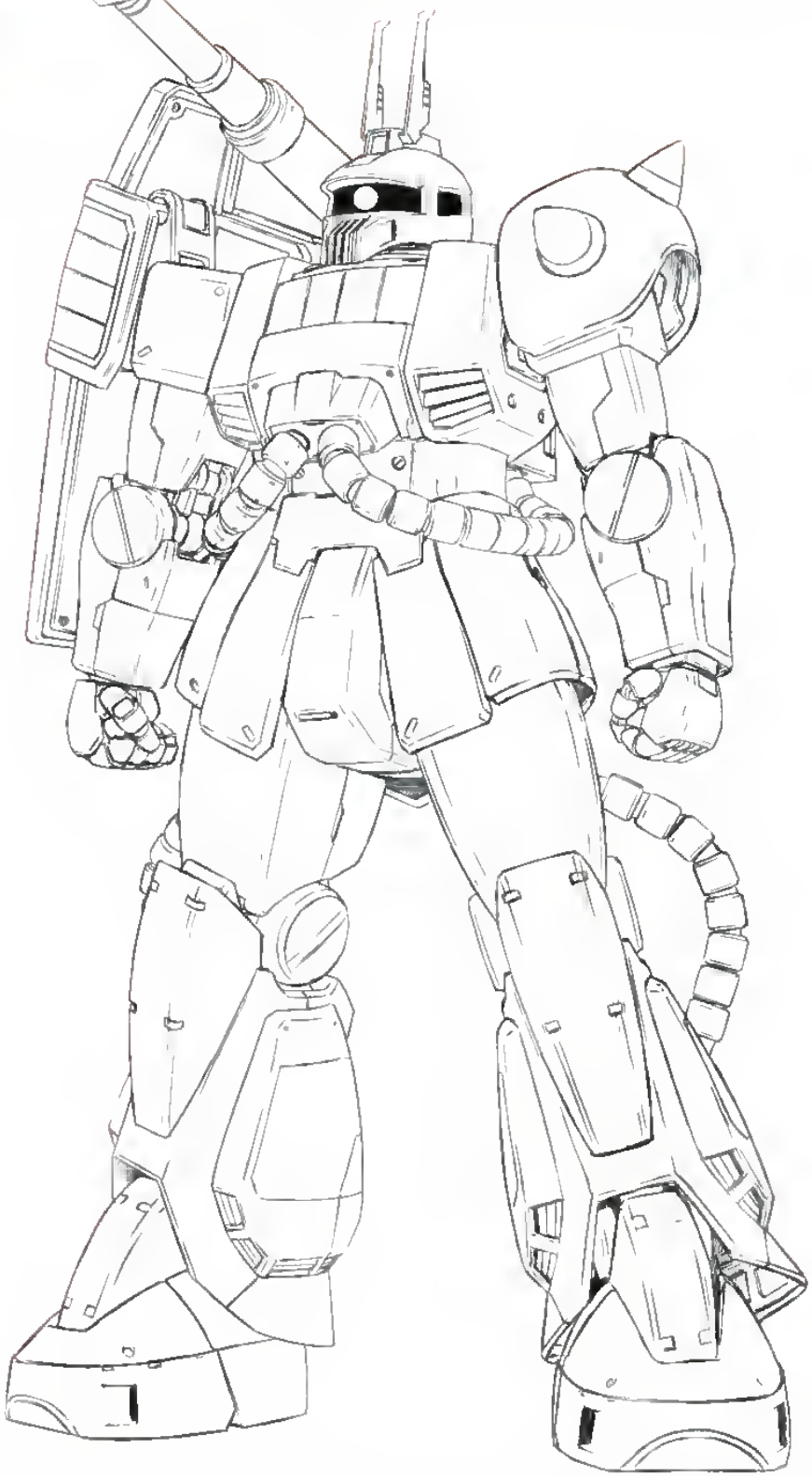
MS-06Kザク・キャノン

キャリフォルニア・ベース[illegible]にて開発された地上用MS[illegible]
当初は、陸戦機たるMS-06Jのサブ・フライト・システム[illegible]という型式番号を与えられ開発が進められていた。この時期、J型をベースに対空砲ユニットをオプションとして増設する方向で検討が進められていたようだが、在来機であっても地球連邦軍の航空戦力に対して十分に対抗できるという実績から、各戦線よりもたらされたことで、その開発計画は凍結されることとなる。ところが、UC 0079年9月下旬に入り、連邦軍製MSの存在が明らかになったことを受けて、計画に再度の見直しが入る。地球連邦軍が投入してきたMSの中に、キャノン砲を備えた中距離支援機、RX-77-2カノンキャノンの存在が確認されるに至り、高い火力を有する支援用MSの有用性が議論されるようになってきたのだ。
時期的には、既にMS-09ドム系が投入されていたが、ホバー走行による機動性の高さを売りとする機体と、足を止めて砲撃を行う中距離支援機に親和性が低いことや、キャリフォルニア・ベースに置かれたMS-06Jの生産ラインを転用でき、短期間での量産が可能であるなどの理由から、J-12試案をベースにしたMS-06系中距離支援機の開発が決定したのである。
ただし、MS-06J-12支援砲撃用の180mmキャノン砲を担がせただけの単純な構造であったかと言えば、決してそうではない。MS-07グフやMS-09ドムの実用化を経て得ていた技術的蓄積を活かし、脚部に補助推進システムを導入するなど、抜本的な改修を断行。頭部ユニットについても、モノアイレンズを拡張して全周式に改めつつ、YMS-08で試みられた頭頂部補助センサーを導入。その上で排熱によるセンサー類への影響を嫌って、伝導パイプを排除するなど、大胆な改良を加えている。また、本機の特徴としてラントセルを着脱可能にした点も挙げられる。敵機に接近された場合など、重量物であるラントセルを排除すれば、J型と同等以上の格闘戦能力を発揮できたという。さらに、このラントセルには180mmキャノン砲を備えたタイプだけではなく、120mmガトリング砲を有するタイプも用意。本来の対空防御用途にも用いることができるよう設計されていた。
以上のように、本機の設計は単なるJ型の枠組みを大きく逸脱したものとなった。結果的に、型式番号もMS-06Kへと改めて、少数の生産が開始。その一次生産分の機体は、キャリフォルニア・ベース子飼隊に供給され、イアン・クレーテン中尉やアルフレディーノ・ラム少尉たちの手に渡り、新たに支援戦闘モビルスーツ中隊が編成されたのである。

MS-06K ZAKU CANNON

MS-06Kザク・キャノン

型式番号 MS-06K
全高 18.4m
頭頂高 17.7m
本体重量 59.1t
全備重量 83.2t
装甲材質 超硬スチール合金
ジェネレーター出力 976kW
スラスター推力 41,000kg
センサー有効半径 4,400m



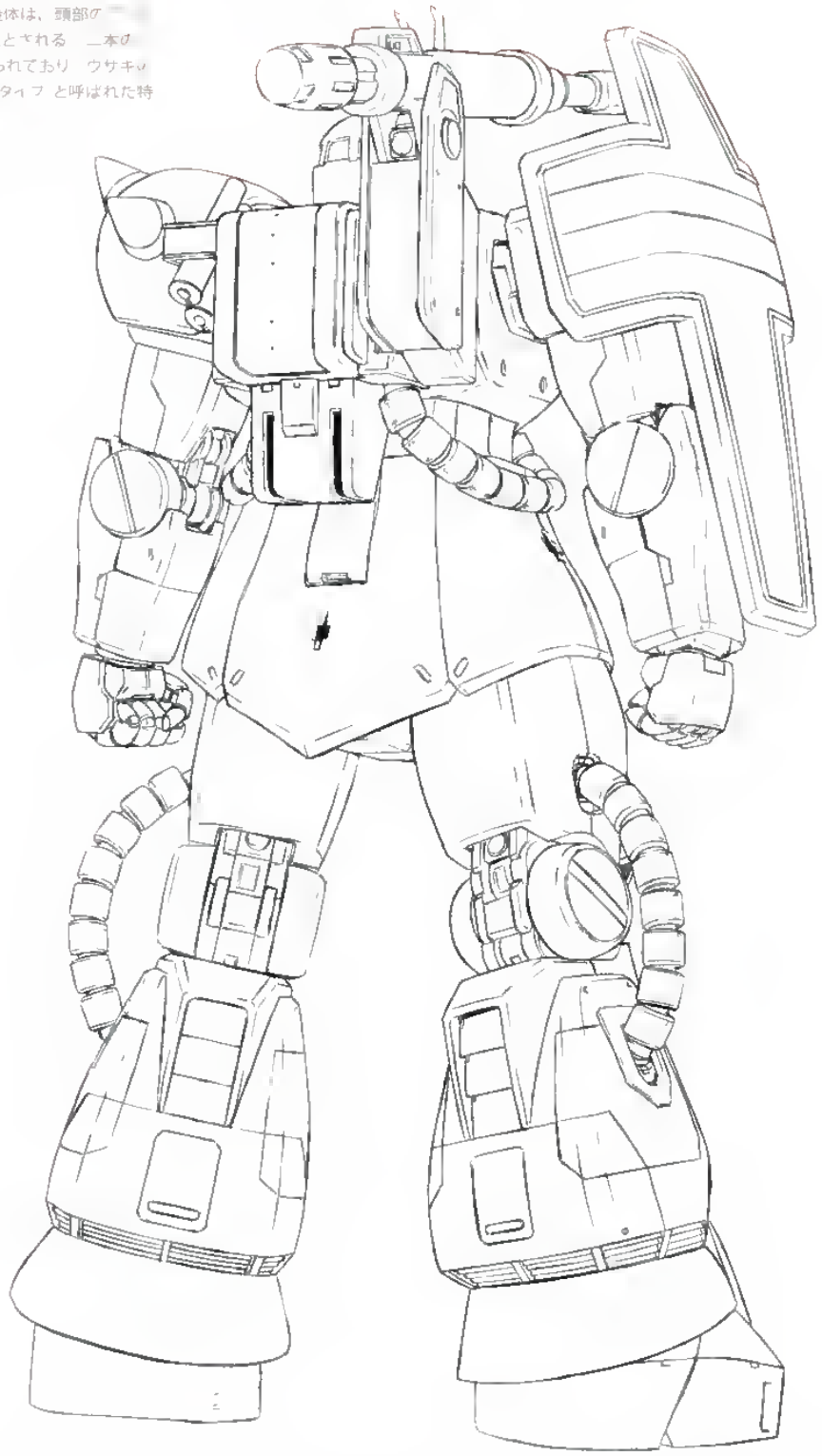
先読みに長け、大胆な戦術で敵部隊を翻弄し
ブ テンは 終戦間際の戦果を地球連邦軍
球自されたくない晴もあ た 方 盾のエ ース
トと ての貴価は 敗走し地球脱出 の 帰の希
望にすが クゥ リナ ルへ辿り着いた味方村
を守 て最後まで戦い抜き 挙げた首級を。ることも
い 沈黙を貫いた その生き様にある



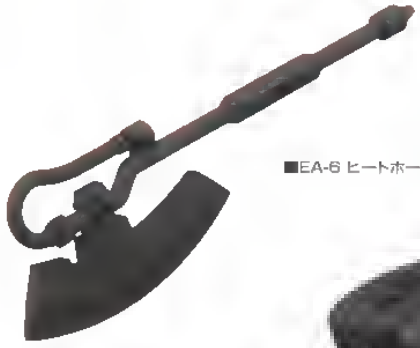
IAN GRADEN

MS-06K ZAKU CANNON

MS-06Kザク・キャノン（ラヒットタイプ）



WEAPON
ザク・キャノンの武装



■EA-6 ヒートホーク Type5

■M-120A1 ザク・マシンガン

■H&L-SB25K ザク・バズーカ



■ビッグ・ガン

MS-06K向けのオプション兵装として、キャリフォルニアベースにて開発された二連装ロケット弾ポット。腰部背面にあるマウントラッチに保持させることで、スカートアーマーの左右に積載のポッドが設置される設計となっている。なお、このマウントラッチ自体はMS-06系の標準設備であるため、MS-06Kに限らず、F型やJ型にも装備することはできた。


SPIDER
RESCUE
DANGER
CAUTION
532-08
46
WARNING
CAUTION
JACK
NOTICE
DANGER
DANGER
DANGER
DANGER



MS-06K ZAKU CANNON CAUTION SIGN AND MODEX



EARTH FEDERATION FORCE

TENNETH A. JUNG

テネス・A・ユング

一年戦争における地球連邦軍最多スコア保持者として知られる絶対的エース、テネス・A・ユング　そのトータルスコアは、ニュータイプと名高いアムロ・レイ少尉をも上回るとされ、同時代の連邦軍将兵からは生ける伝説として尊敬を集めた　そんな稀代の英雄が生まれたのは、カリブ海の片隅に浮かぶ小さな島、キューハ島であったという　環境汚染が進んだ宇宙世紀時代においても、地球最後の楽園と呼ばれるほどの美しさを保っていた自然豊かな環境で育ったテネス少年であったが、彼の余りある冒険心は狭い島に留まることを許さず、やがて空を目指すことになる　しかし、必ずしも裕福な家庭ではなかったこともあり、航空機パイロットへの道を歩む手段として、高等教育過程の修了したUC0073年、地球連邦空軍に入隊　そして3年後となる0076年に基礎訓練を終了し、念願のパイロットとなっている。

彼の最初の任地は、北米大陸東岸のノーフォーク基地であった　同基地所属の第188飛行隊に配属され、FF-4トリアーエズのパイロットとして軍務に就き始めたのである　その後、0078年には大西洋艦隊に所属するヒマラヤ級空母「アパラチア」の艦載機部隊 ――海軍航空隊ではなく、空軍のトリアーエズ飛行隊をフェリーしていた――へと転属。ここで一年戦争の開戦を迎えている。



TENNETH A. JUNG FILE 04







テネス・A・ユング
地球連邦軍少佐

【開戦】

U.C.0079年1月3日、ジオン公国は地球連邦政府に対して宣戦を布告、同時にサイド6を除く各サイトへの奇襲攻撃を敢行した。翌4日、公国軍は「ブリティッシュ作戦」を発動。サイド2・8バンチコロニー「アイラント・イフィッシュ」の住人をGGガスによって虐殺した後、コロニー外壁に核パルス・エンジンを装着、質量弾として地球へと降下させる史上初の「コロニー落とし」を実行に移した。これに対し地球連邦軍は、出撃可能な宇宙艦艇をかき集めて抵抗、大損害を出しながらも、その軌道を逸して連邦軍本部たるジャブロー基地への直撃だけは免れることに成功する。しかし、コロニー落とし自体を阻止することは叶わず、1月10日、崩壊しつつあった「アイランド・イフィッシュ」の先頭部が、オーストラリア大陸東岸に落着したのであった。

空が落ちてくるようであったとも形容されるこの悪魔的な所業により、周辺地域に壊滅的被害がもたらされたことは言うまでもないが、同時に津波などの余波を受けて連邦海軍の戦力もまた広範に渡って損害を被ることとなった。ユングが乗艦していたヒマラヤ級空母「アパラチア」は、北米大陸を挟んで太西洋に位置していたため無事であったが、ことと次第によっては彼もまた戦わずして海の藻屑となっていたかもしれなかったのである。



TGM-79 ジム・トレーナー

[illegible]戦の機会はなかなか訪れなかった[illegible]月11日、第1次降下作戦を展開し、旧ロシア地域の資源地帯の制圧に乗り出したが、大西洋上を航行していた彼には交戦のチャンスはなかったのである。アバラチアはヨーロッパ戦線支援のためブリテン島へと向かったが、そうこうする内に公国軍による第2次降下作戦が始まり、またたく間に北米一帯が制圧されてしまう。かくしてユンクたちは戦わずして母港ノーフォークを失い、寄港地であったヘルファストに留め置かれ、追って指示あるまでは同地の防衛に当たるようにと命じられたのだった。

転機が訪れたのは、この頃のことである。ベルファストの一角でくすぶっていたユングは、宇宙軍への転属希望者を募る報せを目にしたのだ。開戦初期の一週間戦争、およびルウム戦役で壊滅的被害を被っていた宇宙軍は、損耗した戦力を補うために陸海空軍への協力を呼びかけていた。その一環として航空機パイロットに対する航宙機への転換を支援する施策があり、ユンクは戦いの場を求めて、これに志願することとなる。

かくしてUC.0079年4月、宇宙軍への正式な転属命令を受けたテネス・A・ユングは、宇宙へと上がり、ルナツーへと向かったのである。FF-4への搭乗経験のある彼は、そのまま空間戦仕様のFF-4トリアーエズへの機種転換、および空間戦闘訓練を開始。2ヶ月弱の訓練の後、6月に入って実戦部隊へと異動。この時、配属されたのは、アンティータム級補助空母「ハンコック」の艦載機部隊であったという。その後、約2ヶ月の間に計14回の戦闘ミッションに参加。ゴブル型宇宙戦闘攻撃機やガトル型宇宙戦闘爆撃機といった航宙機を7機、ジッコ型突撃艇2隻を撃破している。また、僚機との共同で、ムサイ級軽巡洋艦2隻の撃沈に貢献。MS3機の撃墜――個人撃墜の認定戦果は1機のみ、残り2機は僚機との共同撃墜であったが、当時の連邦宇宙軍の規定では共同撃墜も各パイロットに1機ずつの撃墜を認定していた[illegible]も認められており、早くも航宙機パイロットとして頭角を現している。シュモクザメを描いたパーソナルエンブレムを用い始めたのも、この時期からだという。



【MSパイロットへの道】

U.C.0079年8月、テネス・A・ユングは南米シャブローにいた　飛行隊司令からの推薦もあり、MSパイロット候補生に選抜されていたのだ　極めて短期間で航空機から航宙機への転換を成し遂げ、空間戦闘をマスターして戦果を挙げてみせたユングの適応力を買ってのことである　かくして彼は、ふたたび訓練の日々へと戻った　当初はシミュレーター中心の訓練であったが、ほどなくしてTGM-79ジム・トレーナーが完成すると、同期の訓練生と交互に教官役を務めながら訓練を行い、MSの操縦スキルを磨いていった　そして、RGM-79系の生産ラインが確立したことを受けて実戦部隊の編成が決定されると、こうした部隊のひとつに参加することとなる。

同年9月、ユングはジャブローで製造されたばかりの真新しいRGM-79ジムと共に、ふたたび宇宙へと舞い戻り、ルナツーへと向かった　そして、数ヶ月前までの「古巣」であるアンティータム級補助空母「ハンコック」に戻ると、軌道上に展開する公国軍ハトロール艦隊に対する迎撃任務に従事　9月下旬から10月にかけて5回の戦闘ミッションに参加し、MS4機、航宙機9機の撃墜を記録している　また、艦艇に関しては、ムサイ級軽巡洋艦1隻、チベ級重巡洋艦1隻を撃沈、僚機との共同で、さらに巡洋艦1隻の撃沈にも貢献したと伝えられている　彼は航宙機への転向の際と同様に、見事にMSという新兵器にフィットしてみせたのだ　ちなみに、これらの戦果の大部分が標準装備とされたビーム・スプレーガンではなく、ハイパー・バズーカによるものだったと言われている　射撃センスに優れた彼にとっては、収束率が低く当てやすい一方で射程距離や威力に難のあったスプレーガンよりも、威力に優れたバズーカの方が戦果に直結したということなのだろう

こうして、MSパイロットとしてのキャリアを順調に歩み始めたユングであったが、総計149機とも言われる対MS撃墜スコアの大半は、一年戦争最後の1ヶ月間に集中している。11月初旬、ついに反撃に転じた地球連邦軍は、ヨーロッパの要であったオデッサ周辺を奪還　同月下旬には、公国軍がなけなしの戦力をかき集めてジャブロー基地を攻めたものの、これに失敗したことで地球上での大勢は決した　12月に入ると、北米、アジア、オーストラリア、アフリカといった諸地域で大規模な反攻作戦が行われ、防戦一方となった公国軍は、次第に宇宙への脱出口を求めて各地の宇宙港へと殺到することとなる。そんな中、ユングが所属するルナツー駐留の宇宙軍部隊に与えられたのは、地球上から脱走してきた公国軍を軌道上で待ち受け、叩き落とすという任務であった　戦闘能力を有するザンジバル級機動巡洋艦であればいざ知らず、その大部分が非武装のHLV（重量物打ち上げロケット）であったから、射程距離まで接近さえできれば迎撃は容易である。すでに制宙権を奪還しつつあった軌道上を周回しつつ、包囲網狭まる地球上を監視。宇宙港施設に打ち上げの兆候あれば、母艦からMSを発進させこれを迎撃する。前線の将兵から「モグラ叩き」とも呼ばれていたこの任務で、ユングたち宇宙軍のMSパイロットたちは撃墜スコアを荒稼ぎしていった　当時の連邦宇宙軍の規定では、基地施設や艦艇に駐機している出撃前の機体を破壊した場合も、撃墜にカウントしていたため、陸戦MSを満載したHLVを撃沈することで、スコアが雪だるま式に膨らんでいったのだ　それら、モグラ叩きの戦果をどう評価するかは別として、友軍部隊を救おうと突出してきた公国軍回収部隊との交戦でも、ユングは撃墜をマークしており、この時期に軌道上でかなりの星を挙げたことに間違いはない。





RGM-79 ジム

かくして、MSハイ
ロ ットとしてもエースと呼ぶに相応しい働きをしてみせたユングは、ほどなく異動の辞令を受けている　新型機、RGM-79SCジム・スナイパーカスタムで構成されたMS狙撃部隊の新設に伴い、引き抜きを受けたのだ　SC型が標準装備するR 4タイプの狙撃用ビーム・ライフルは、威力と射程ではスプレーガンに勝り、弾速はバズーカをはるかに上回る　当時は耐ビーム・コーティング技術が未成熟だったこともあり、R-4タイプのビーム弾を熱核反応炉やコクピットを内包する胴体ユニットに命中させることができれば、ほぼ一撃で敵機を無力化することができた　そんな優れた火器を有する機体を、極めて高い射撃精度を誇るユングが手にしたのだから、結果が出ない方がおかしいというものだろう　狙撃部隊への転属以降、彼の撃墜スコアはさらに更新されてゆくことになる。

ただし、快進撃を続けるテネスにも大敵はいた　当時、彼の愛機を担当していた整備兵が述懐するところによれば、MS-06R系の機体には、ほとほと手を焼いていたようである　二度に渡りR型の接近を許し、内一度は格闘戦の末に撃破したものの、もう一方ではかなり追い込まれたらしい　ソロモン攻略戦の最中、ブラウンに塗装されたR1A型と思しき敵機を発見。遠距離から狙撃を試みたものの第一射をデブリに阻まれたことで仕留め損ない、射撃ポイントを特定されたのだという　脚部に追加された補助推進器を巧みに利用することで細かに機動を変更し、第二射、第三射と連続で撃ったR1A型は、マシンガンによる牽制を効果的に用いて肉薄、ヒート・ホークで斬りかかってきたテネスは思い切りよくR-4タイプを放棄し、ボックス型ビーム・サーベルで応戦したことで敵の意表を突き窮地を脱することはできたようだが、右脚ユニットを半ばほどから断ち切られたとのことである。この経験には冷静沈着で知られるテネスも肝を冷やしたらしく、帰投してきた彼は青い顔をしていたという。



RGM-79Cジム・スナイパーカスタム

RGM-79Gジム・コマンド宇宙戦仕様

【最終戦と戦後の活躍】

UC0079年12月、ユングは少佐に昇進、第7狙撃部隊（SSU-7）の隊長としてトラファルガー級支援巡洋艦トライアンフへ異動となっている。

12月24日、ティアンム大将を始めとする多くの将兵を失いながらも、地球連邦軍は宇宙要塞ソロモンを陥落させ、シオン公国のサイド3本国への侵攻に向けた橋頭堡を確保することに成功した。愛機に手痛い傷を負いながらも、どうにかこの激戦を生き延びたユングは、翌25日に、コンペイトウと改称された旧ソロモンに赴いている。ア・バオア・クー攻略作戦の発動までに、脚部ユニットを失ったRGM-79SCの修理が間に合いそうにもないという報告を受け、代替機の受領のため補給艦でひしめく宇宙ゲートのひとつに足を向けたのである。

ここで受領したのは、ルナツーの生産ラインで製造されたばかりの真新しい新型機、RGM-79GSジム・コマンドであった。操縦シートのビニールさえ剥がされていない新品の機体を手に入れたユングは、受領書にサインするやコクピットに乗り込み、同じく激戦を生き延びていた母艦に向けて飛び立った。この帰り道が彼にとってのGS型の慣熟飛行であり、母艦に着艦する頃には操作系のセッティングは、あらかた済んでいたという話である。

以上のような経緯もあって、新たな機体で臨むこととなったア・バオア・クー攻防戦であったが、ここでもユングは大戦果を挙げている。戦場と母艦、あるいは補給艦の間を三往復した彼は、その最後の出撃時に複数の僚機と共同でドロス級空母の撃沈に貢献、



多数のMSを腹に収めた状態の巨大空母を撃墜したことで、一挙に数十機単位の撃墜認定を受けている。戦中におけるユングの公認戦果は、MS149機という途方もない数字となっているが、その背景にはこのドロス級空母共同撃沈が大きく影響していたのだ。とはいえ、この大記録も戦後になって行われた規定の変更に伴って見直されており、共同撃墜を除いた個人撃墜記録の認定戦果は52機、証拠不十分とされた未認定戦果が6機となっている。それでも、彼がMSを手にしたのが9月下旬であったことを考えれば、3ヶ月程度でこれだけの戦果を挙げたことになり、ユングの操縦技量が確かなものであったことに疑いの余地はない。

なお、生きて終戦を迎えることができた彼は、戦後も軍に残り武装解除を拒否した旧公国軍残党勢力の掃討作戦、いわゆる「残党狩り」にも参加している。U.C.0080年、余剰生産されたフェロウ・ブースターの支給を受けた彼は、愛機SC型にてこれを運用。さらに撃墜スコアを上乗せしたということである。■

TENNETH A. JUNG

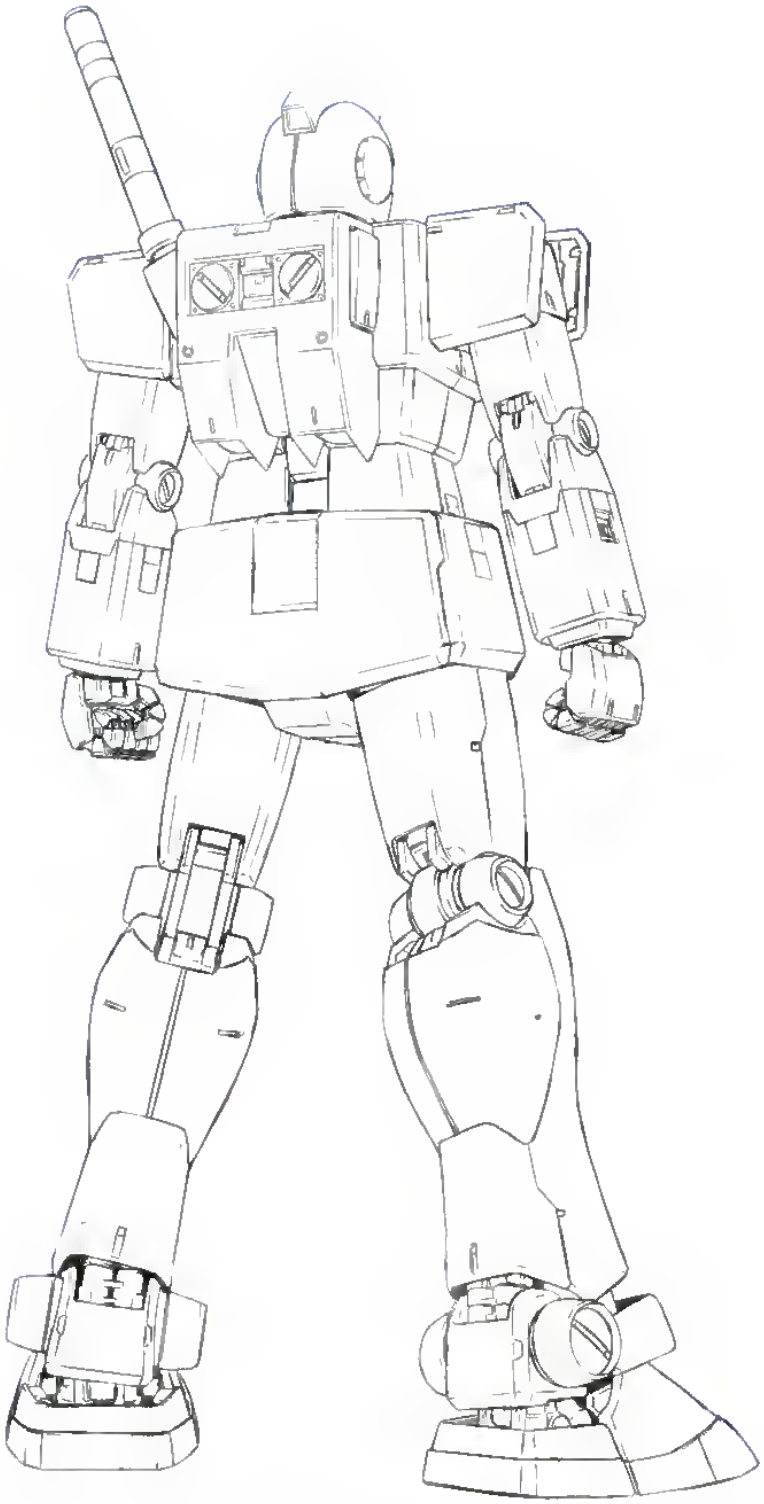
TGM-79 GM TRAINER

TGM-79 シム・トレーナー

MSパイロットの育成に用い[illegible]訓練機。コ[illegible]トが複座式に変更されている[illegible]が最大の特徴で、教官と訓練生が同時に乗りこむ[illegible]が可能。シートは下に配置され、上[illegible]の教官席からはカ[illegible]ウィンドウ[illegible]よって、直接、外界を目視できるようにな[illegible]ている。また、大量生産に備えて装甲材質も安価な物へと変更されてい[illegible]るが、大きな特徴と言えるだろう。

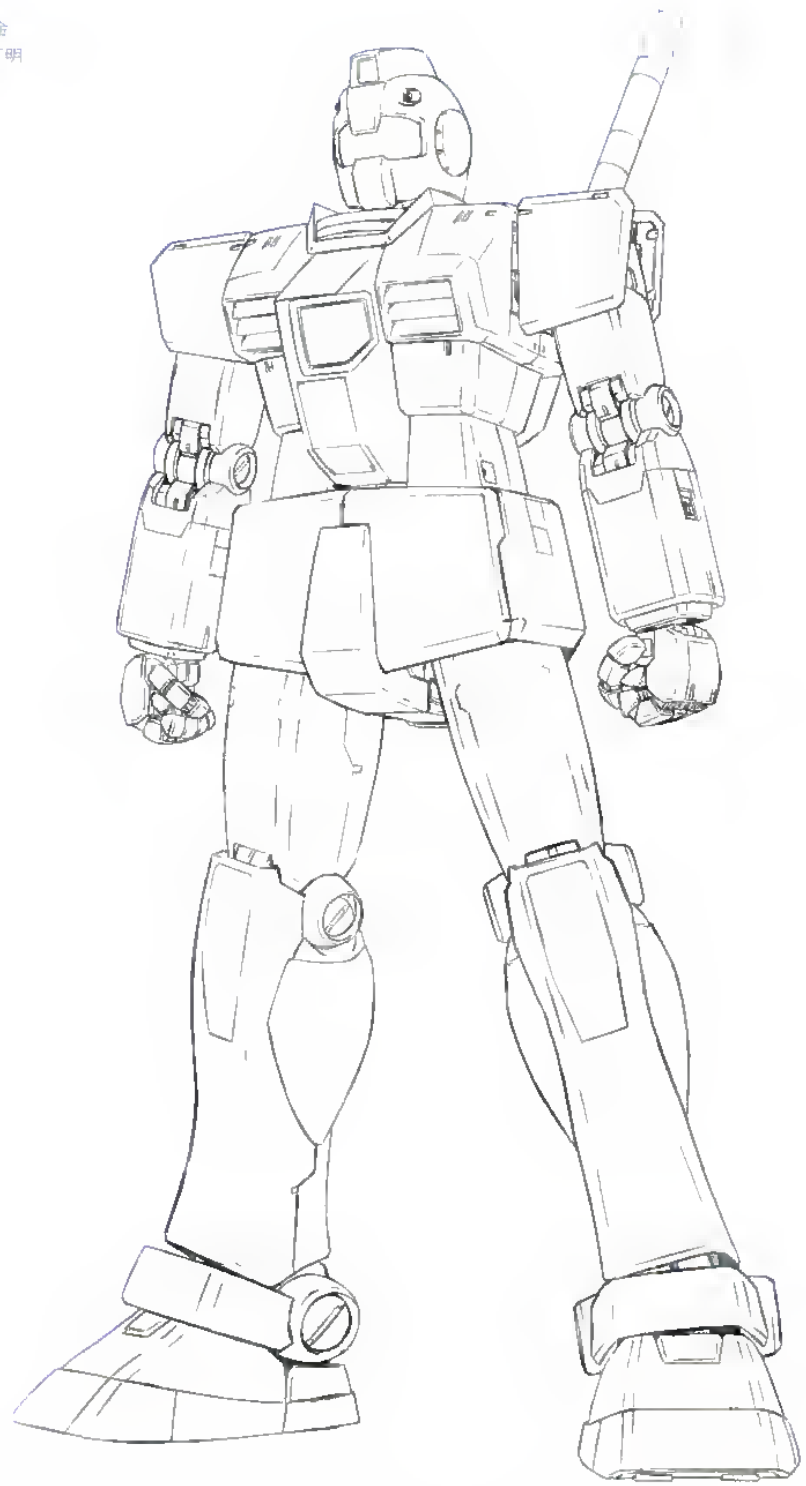
地球連邦軍が開戦以降の短期間の内に、大量のMSパイロットを育成し得たことの要因とは、教育型コンピューターによる効率的な運用データの集積と、それを下地にした優秀な機体制御システムが挙げられるだろうか。しかしながら、シミュレーター中心の訓練には限界があり、実機への搭乗なくしては学び得ない感覚や技術も多く、本機が果たした役割も決して無視できない。戦時下において、新兵に加えて戦闘機や航宙機のパイロット、戦車兵、果ては軍艦勤務の船員に至るまで、さまざまな出自を持つ者たちを一人前のMS乗りへと育て上げた本機の功績は、高く評価されるべきであろう。

なお、頭部ユニットからバルカン砲がオミットされていることからもわかるように、本機はあくまで訓練機であり実戦を想定したものではない。よって、U.C.0079年11月[illegible]ャブロー攻防戦においては、緊急の対応として手持ち式の火器のみを装備した状態で出撃、応戦したという記録も残されている。



TGM-79ジム・トレーナー

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]



TENNETH A. JUNG

RGM-79 GM



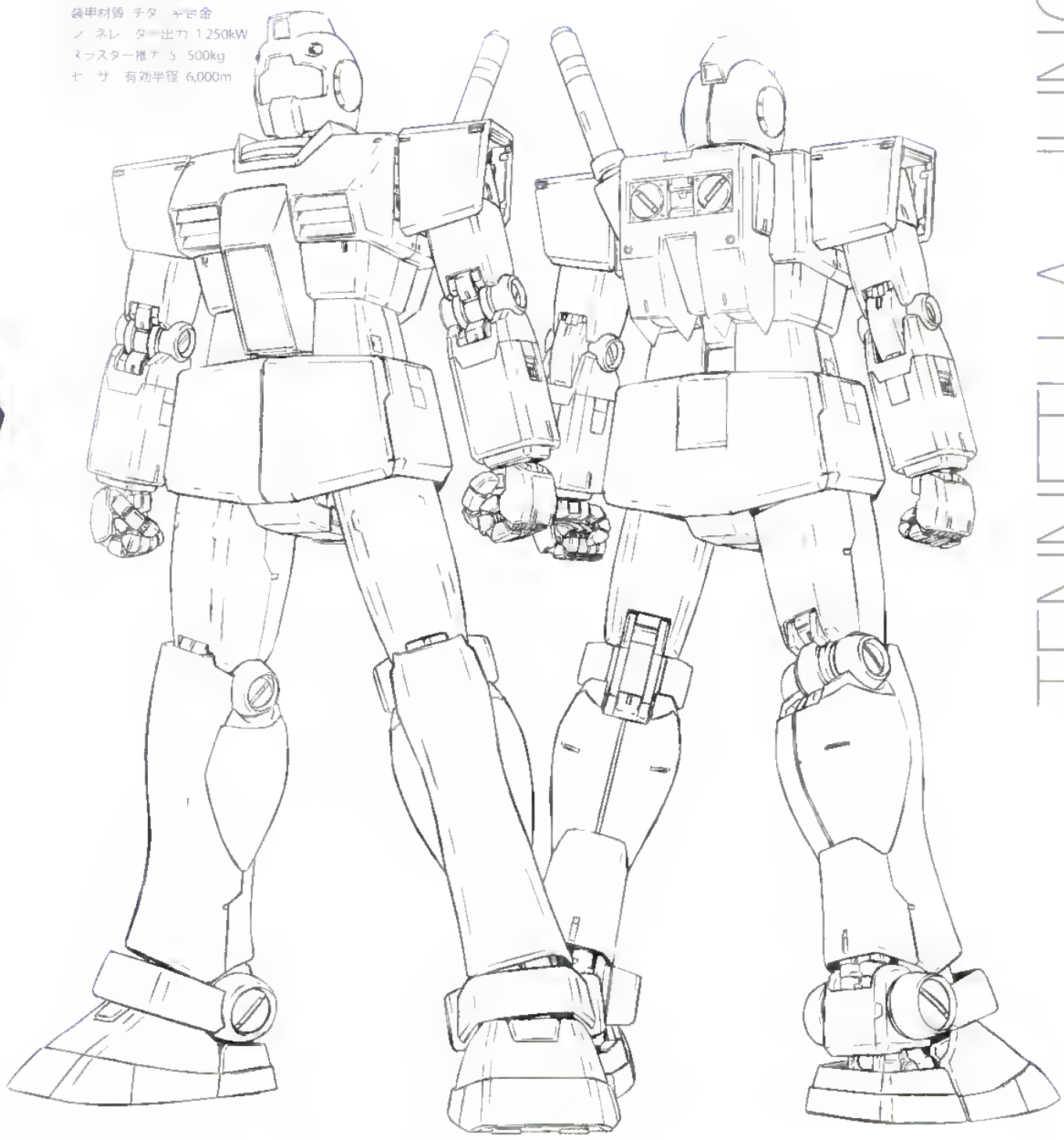
RGM-79シム

V作戦において近接格闘戦用の機体と 位置つ
けられて た試作機 RX 78 ガンタム タイプの生産型
として設計された機体であり 地球連邦軍の主力MS
として 年戦争末期の反攻作戦を支えた 装甲材質
と てルナチタニウム系合金の採用が見送られるな
ど スとされたRX 78と比べて いくつかの点に
おいて性能的に下回っていることから 低コスト低性
能な機体と考えられがちであるが これはあくまで
生産性などを勘案した上で 兵器として完成さ
せた結果に過ぎない 限定的ではありながら
も ム兵器の運用を可能とするなど
ノオ 公国製MSに対する必要
最低限のアドバンテージ
は確保されており
事実 MS 0h

リ 州におけるキル 大戦を通して高水準を維
持して
なお RGM 79系には様々なバリエーションが存在し
ていることでも有名だが テネス・A・ユングがMSパ
イロットとしてのキャリアを開始した当初に
搭乗していたのは、俗に第2期生産型と呼
ばれるタイプであった これは ャフ
ー工廠や奪還後のキャリフォルニア
工廠など 計6ヶ所の施設にて終戦ま
でに総計288機が生産されたもの
で 第1期生産型と比べて装甲材
質などに変更が加えられている

RGM-79ジム

型式番号 RGM-
頭頂高 18.0m
重量 41.2t
全備重量 58.8t
装甲材質 チタン合金
ジェネレーター出力 1,250kW
スラスター推力 5,500kg
センサー有効半径 6,000m

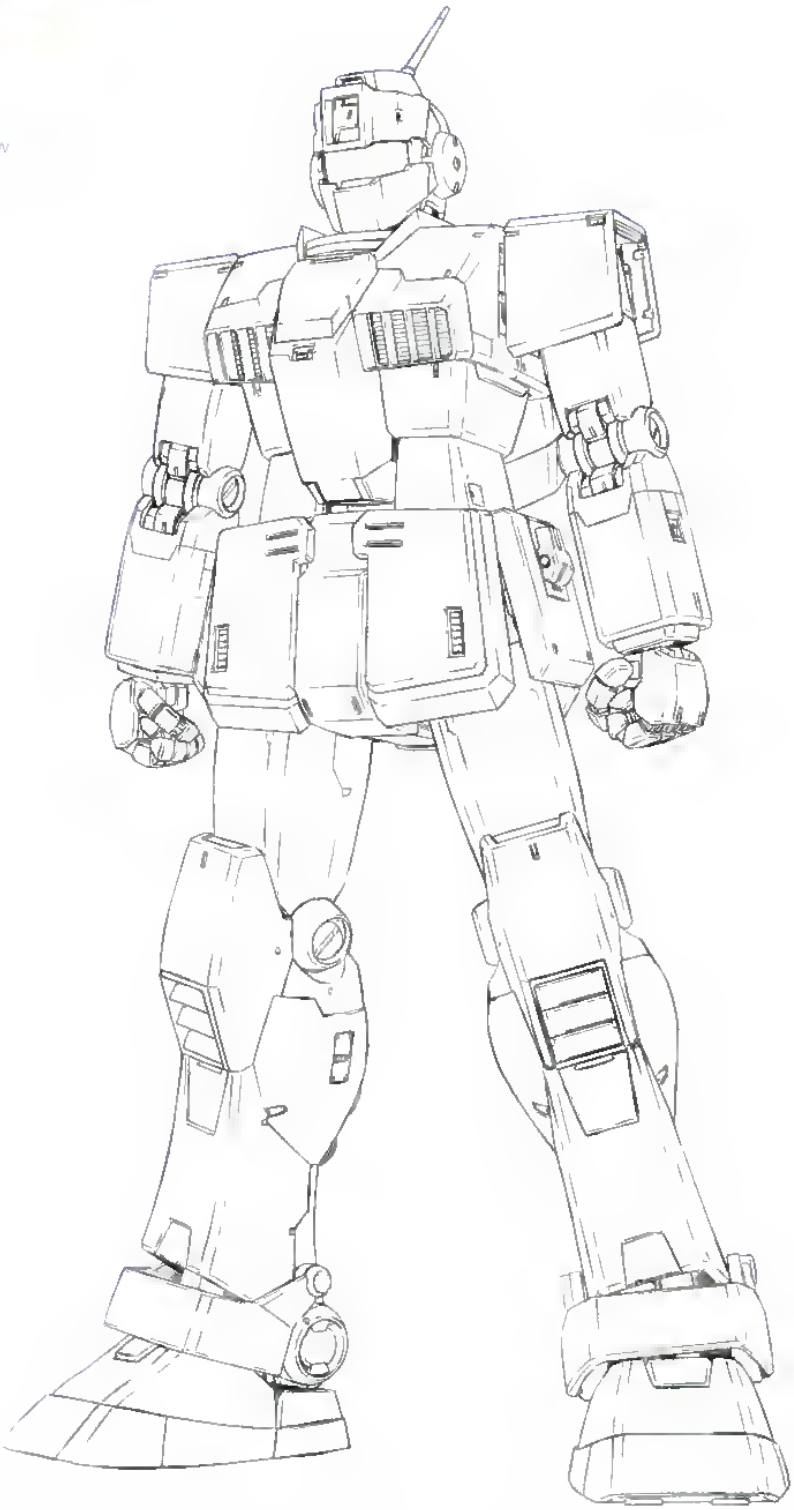


TENNETH A. JUNG

RGM-79SC GM SNIPER

RGM-79SCジム・スナイパーカスタム

型式番号 [illegible]
全高 18.0m
頭頂高 18.0m
本体重量 [illegible]
全備重量 75.3t
装甲材質 チタン系合金
ジェネレーター出力 1,390kW
スラスター推力 68,000kg
センサー有効半径 7,300m





天性の狙撃セ スを持つテネス A ↓ MS-06ザ
クなどの 敵的なジオン公国軍MSが相手であれば
度の奇襲しかできない状況であ ても必ずこれを戦
勝に導いてきたという 方で 味方を囮にして敵を狙撃に適したポイントへ誘導する戦術などを用いる また戦後の ジオン残党狩り の際に この行為を楽しむといった言動が 見られた などの噂からその非情さが取りざたされることもある たが 味方パイロットたちもその狙撃技術には全幅の信頼を置いていたのは事実であった。

RGM-79SCジム・スナイパーカスタム

大戦末期に 主にベテランパイロ ト向けに配備された狙撃型MS RGM 79をベースに 装甲 推進力、ジェネレーター出力などを全面的に強化したもので しばしばRX 78系に匹敵する高性能機と表現される 総生産数は50機に満たないか テネス・A・ユングを始めとする輝かしきのエ スパイロ トたちの手に渡ったことで多大な戦果を上げ、これが華広報によって広く喧伝されたことで 高い知名度を獲得するに至った

しかし、その完成に至るまでには紆余曲折があった 当初 V作戦」において、近距離格闘機、中距離支援機 長距離支援機の3機種による連携運用構想を描いていた軍部であったが、MSの早期実戦配備を望む前線側からの圧力に押される形で、RX 78をベースとした凡用量産機、すなわちRGM 79の生産を急く決断を下した これにより、極めて短期間のうちにMSの実戦配備に漕ぎ着けることに成功したのだが、方で初期構想においてはRX 77ガンキャノン系が担う予定であった中距離支援任務が宙に浮く格好となった もちろん、暫定措置としてRX 77 2の追加生産を行いつつ、後継モデルの開発も進められたが性能とコストのバランス取りに苦慮し、実戦投入は遅れに遅れることとなった

TENNETH A JUNG

RGM-79SC GM SNIPER

WEAPON

シム・スナイパーカスタムの武装



■BOWA XBR-M-79W-2 二連ビームガン

大戦末期に開発された対MS用ビーム兵器。M-79C 1型を2本束ねたような形状をしているが これは交互に射撃することで加熱を抑制しつつ、より多くのビーム弾を連続して射撃できるようにしようとの狙いからの設計であった」一部のRGM 79SCが サイトアームとして実行することがあったようだが、ビーム兵器の進化は思いの外はやく この種のダブルバレル式兵装は、短期間で姿を消すこととなった。



■BOWA BR-M-79C-1 ビーム・スプレーガン

M 79向けにホウワ社が開発した対MS用ビーム兵器。ー ー ームカか1250kw程度の機体でもトライブ可能なように設計されているのが最大の特徴である。収束率の低さがネックとされたか、これを逆手に取りビーム弾を拡散させることで 広範囲を攻撃することができた。たとし 大気圏内ではビーム弾の減衰か激しく 射程距離の面で難が多かったこともまた 紛れもない事実である。



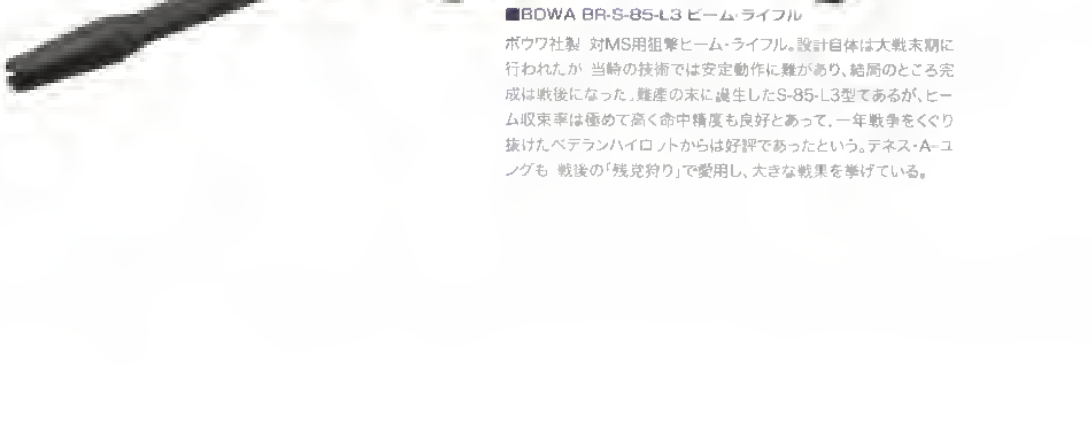
■BOWA BR-M-79L-3 R-4 ビーム・ライフル

RX-77向けの武装として開発されたXBR-M 79a(後にXBR L 79に改称)をベ スとして、狙撃用MS向けに再設計したビーム・ライフル。中・長距離からの精密射撃に特化すべく、ビーム弾の収束率の向上に務めている一方て 射撃用センサーは最低限のものに留めている。これは、本体側のセンサー類やFCS(射撃管制装置)が充実した狙撃用MSによる運用を念頭に置いているためであった。



■BOWA XBR-S-79b 折畳式ハンドビーム ガン

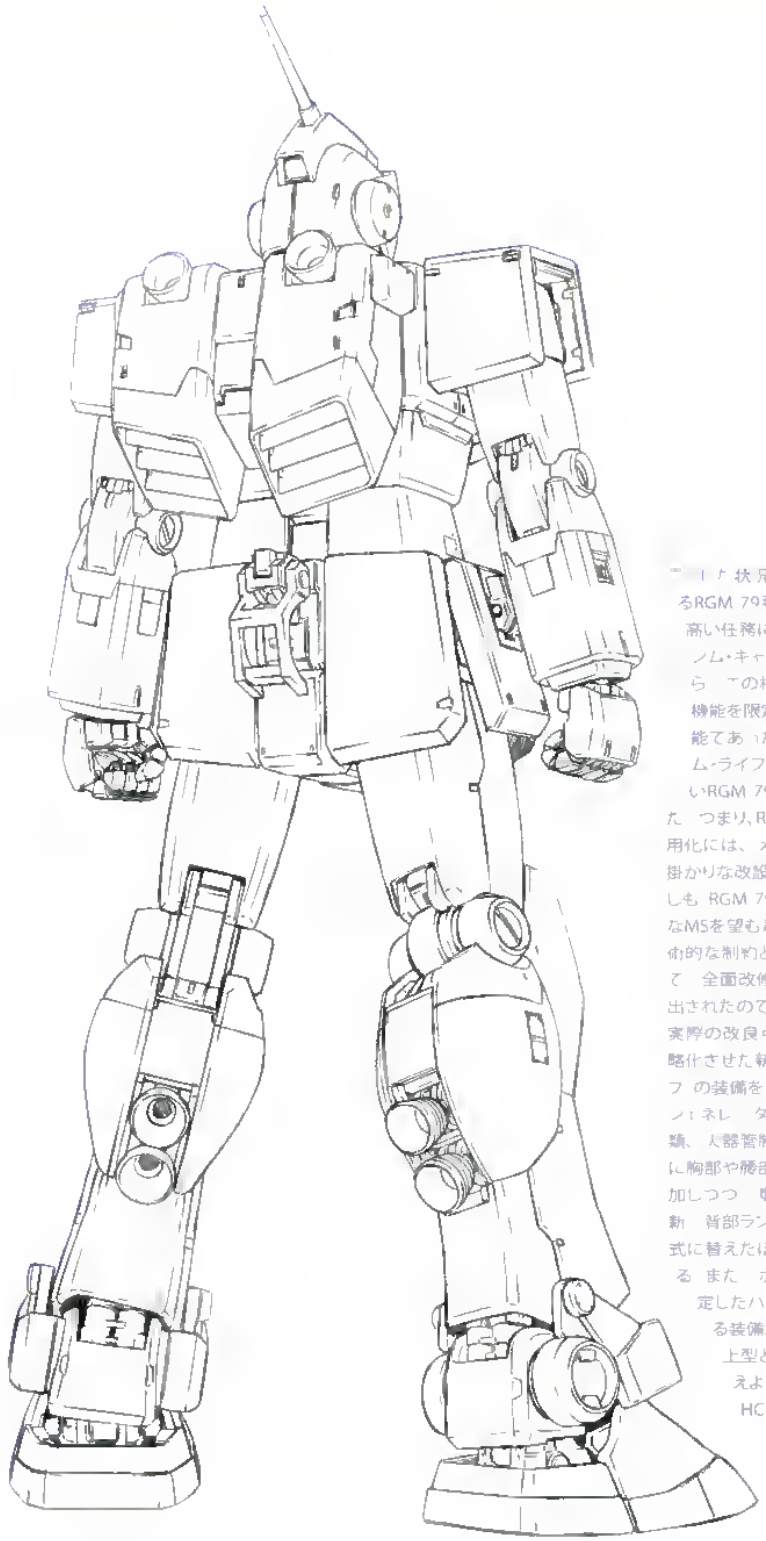
狙撃用MS向けのサイトアームとして開発された対MSハ ト ル。文字通り折り畳むことが可能て 腰のサイトアーマーや脚部側面前腕部側面などに懸下することが可能である 出力はM 79C 1を下回り 命中させたとしても一撃でMSを撃破できるような火力は有していない。あくまでも敵機のセンサー類や推進系を破壊することて 脱出の隙を作ることを目的とした自衛用兵器なのである。



■BOWA BR-S-85-L3 ビーム・ライフル

ホウワ社製 対MS用狙撃ビーム・ライフル。設計自体は大戦末期に行われたが 当時の技術では安定動作に難があり、結局のところ完成は戦後になった。難産の末に誕生したS-85-L3型であるが、ビーム収束率は極めて高く命中精度も良好とあって、一年戦争をくぐり抜けたベテランパイロットからは好評であったという。テネス・A・ユングも 戦後の「残党狩り」で愛用し、大きな戦果を挙げている。

CUSTOM



[illegible]状況を打開す[illegible]用機たるRGM-79系に改良を加える[illegible]より専門性の高い任務に対応させるという[illegible]であり、RGC-80ジム・キャノンが開発されることとなる。しかしながら、この機体は生産性の向上のため支援砲撃に機能を限定させており、狙撃任務への転用は不可能であった。そもそも、XBR-L-79型の狙撃用ビーム・ライフルはRX-77向けの兵装であり、出力の低いRGM-79系ではトライフルすら不可能であったのだ。つまり、RGM-79系をベースとした狙撃型MSの実用化には、メインジェネレーターの換装を含む、大掛かりな改設計が必須であったということである。折しも、RGM-79を受領した前線部隊から、より高性能なMSを望む声が続々と上がってきていた。こうした技術的な制約と運用側からの要望が重なった結果として、全面改修機としてのSC型の開発にゴーサインが出されたのであった。

実際の改良点を見ていくと、XBR-L-79型の構造を簡略化させた新型狙撃用ビーム・ライフル「後のR-4タイプ」の装備を念頭に入れ、出力向上を図るべくメインジェネレーターを換装。同時に排熱機構やセンサー類、火器管制システムにも手が加えられている。さらに胸部や腰部など、被弾率の高い箇所の装甲厚を増加しつつ、重量増に対応するべく推進システムを刷新。背部リアスカートの主推進器をベクトノズル方式に替えたほか、脚部にも補助推進器を増設している。また、ポニークス型ビーム・サーベルや格闘戦を想定したハイザーなど、狙撃任務には不要と思われる装備が追加されたことも、本機が全面性能向上型としての一面を持っていたことの証左と言えよう。実際、SC型をベースに防衛任務用のHC型「カート・カスタム」や、迎撃機仕様のKC型「インターセプト・カスタム」といった亜種が生み出されているのだ。

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

17



ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

DO NOT PLUG SENSOR HOLE DO NOT OVER PAINT ON SENSOR FACE

E.F.S.F.

DO NOT PLUG SENSOR HOLE DO NOT OVER PAINT ON SENSOR FACE

EMERGENCY USE ONLY
FORCED SEPARATING CONTROL ACCESS IS ON TOP SIDE

R.G.M.-79 7 S.S.U



MULTI-PURPOSE ATTACHMENT
DO NOT EXCEED IN LOADING UPPER LIMIT
MUST BE AWARE OF ADJUSTING CG
KEEP CLEAR ON ATTACHMENT SURFACE

MONITORING ACCESS
INCLUDES
COMMUNICATOR TO COCKPIT
STATUS MONITORING DISPLAY
DIRECT ACCESS TO
MAIN COMPUTER
AND INSPECTION TERMINAL

EMERGENCY MANUAL OPEN CONTROLLER

CAUTION
STAND CLEAR
ENTRY DOOR SWINGS UP
DO NOT STAND / STAY IN SWEPT ZONE

ACCESS FOR BACK ARMOR DETACHING CONTROL

17

CAUTION
MULTI-PURPOSE ATTACHMENT DROPS DOWN
DO NOT EXCEED IN LOADING UPPER LIMIT
MUST BE AWARE OF ADJUSTING CG
KEEP CLEAR. DO NOT STEP, STAY IN AND STAND ON

AIR JET INTAKE
DANGER
DANGER

DANGER
KEEP AWAY
HIGH VOLTAGE
HIGH ENERGY SOURCES INSIDE

NO STEP

NO STEP

DANGER
KEEP AWAY
DANGER
HOT BLOW AND SWIRLING SPARKS

EXTRA EQUIPMENT HOLDER INSIDE

DANGER
HOT EXHAUST GASES
STAY BACK AND KEEP CLEAR

DANGER
HIGH VOLTAGE / HIGH-ENERGY SUPPLY
HAZARDOUS VOLTAGE
CAN CAUSE SEVERE INJURY OR DEATH
TURN OFF POWER AND
LOCK-OUT BEFORE SERVICING

ACCESS FOR
ARMOR PLATE
DETACHING CONTROL

HOT GASES BLAST
DANGER

DO NOT PLUG
SENSOR HOLE
DO NOT OVER PAINT
ON SENSOR FACE

17

RGM-79 SSU

DO NOT PLUG
SENSOR HOLE
DO NOT OVER PAINT
ON SENSOR FACE

MONITORING ACCESS
INCLUDES
COMMUNICATOR TO COCKPIT
STATUS MONITORING DISPLAY
DIRECT ACCESS TO
MAIN COMPUTER
AND INSPECTION TERMINAL



MULTI-PURPOSE ATTACHMENT
DO NOT EXCEED IN LOADING UPPER LIMIT
MUST BE AWARE OF ADJUSTING CG
KEEP CLEAR ON ATTACHMENT SURFACE

EXTRA EQUIPMENT
HOLDER INSIDE

ACCESS FOR BACK ARMOR
DETACHING CONTROL

CAUTION
EQUIPMENT MOUNT
HOLDING CLAW
SWINGS DOWNWARD
DO NOT STAND ON
TOP SIDE
KEEP CLEAR

CAUTION
MULTI-PURPOSE ATTACHMENT
DROPS DOWN
DO NOT EXCEED IN LOADING UPPER LIMIT
MUST BE AWARE OF ADJUSTING CG
KEEP CLEAR, DO NOT STEP
STAY IN AND STAND ON

CAUTION
CONTAINING
THRUST MOTORS
AND AUXILIARY
MACHINERY

EXTRA EQUIPMENT
HOLDER INSIDE

HOT GASES BLAST
DANGER

NKLI
DAMPE- DJU
LD BEHIND ARM ANEL

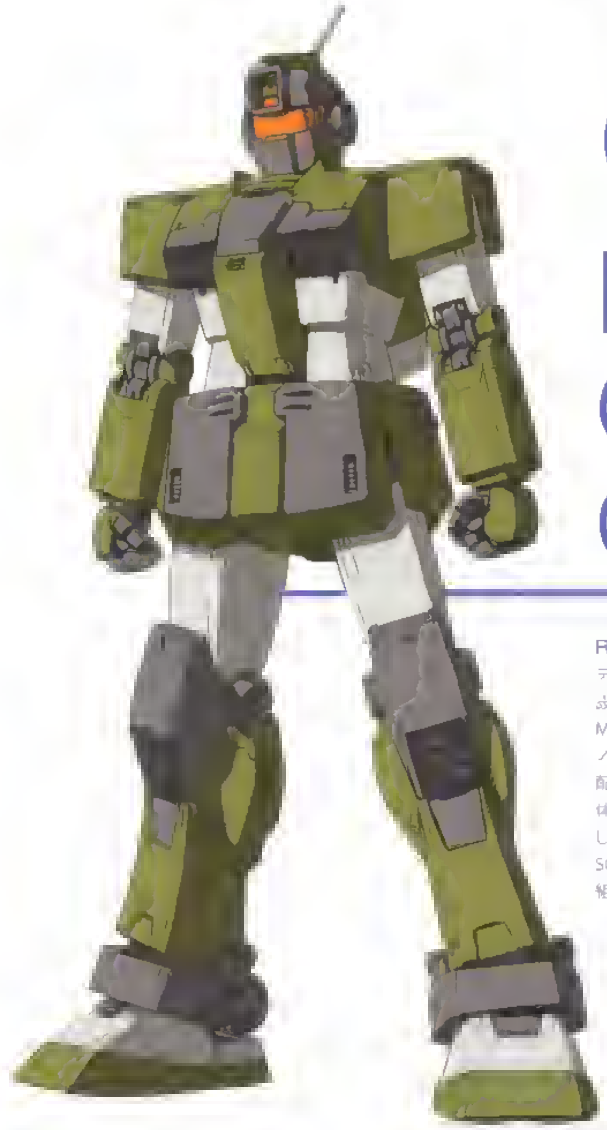
WARNING
HOT SURFACE
BURN HAZARD
DO NOT TOUCH

DANGER
STAY
OVER 10
BACK
METERS
DANGER
HOT BLOW AND
SWIRLING SPARKS

RGM-79SC GM SNIPER CUSTOM CAUTION SIGN AND MODEX

SSU-7

第7狙撃部隊





RGM-79SC GM SNIPER CUSTOM

RGM-79SCジム・スナイパーカスタム（カール・ヴァルトマン機）

テネス・A・ユングが配属された第7狙撃部隊、通称SSU 7は、連邦軍が設立した極初期のMS狙撃部隊として知られている。当然のことながらMSによる狙撃を主任務とする部隊なと、それまで存在しなかったため、ノウハウもなく、パイロットたちは手探りの状態で実戦に臨むことになった。配備された機体についても同様で、狙撃用ビーム・ライフルを備える機体はかりで構成されていたわけではなく、狙撃仕様のSC型か4機に対して、軽装型のL型か8機という変則的なものとなっている。SSU 7ではSC型2機とL型1機で構成される第1小隊と第2小隊を狙撃小隊と定義、2機1組のSC型で交互に狙撃を行うという戦術を使用した。R 4タイプの狙撃用ビーム・ライフルは、射程や威力において申し分のない性能を有していたが、エネルギーチャージやバレルの排熱に時間を要するという欠点もあり、連続射撃には限界があったのだ。そのため、攻撃の合間に敵機に接近されるリスクを低減する意味で、狙撃手にペアを組ませて互いにフォローし合うという方法論を採ったのである。ちなみに、ユングの相棒役を務めたカール・ヴァルトマン曹長は、牽制射撃の名手とされ、敵機の動きを封じ込める技か巧みであった。大戦末期のユングか、次々と撃墜を記録できた背景には、彼の働きかあったことも忘れてはならないだろう。

RGM-79L GM LIGHT ARMOR





RGM 79Lジム・ライトアーマー（アーロン・ダイアモント機）

SSU 7第1小隊に所属したアーロン・ダイアモント曹長の乗機。同隊に所属するほかの5C型とほぼ同じ青緑色を基調としたカラーリングに塗め上げられている。

なお、軽装型のL型が狙撃部隊であるSSU 7に配備されたのには、2つの大きな理由があった。ひとつは、スキル粒子環境下対応の短距離データリンク・システムを利用し外界のデータを共有することで観測手段を務めること。また、狙撃に専念することで無防備になりがちな僚機を守る護衛というのも重要な役割だった。実際、L型のパイロットを務めたアーロン・ダイアモント曹長は、狙撃手役を務める僚機の危機を救っていたようで、ユウクは彼を第1小隊の番犬とみなしてははからなかったという逸話が残されている。

一方、同じSSU 7の所属ではあっても、第3小隊はL型のみ3機で構成されていた。これは、母艦の直掩を主任務としていたためである。ただし、ア・バオア・クー攻防戦においては、全戦力を要塞攻略に投入すべしという艦隊側の意向があって、第3小隊は突出した第1、および第2小隊の援護射撃を受けつつ要塞表面に降りたち、橋頭堡を確保することに貢献したが、激戦の最中に相次いで2機を喪失。残る1機も中破するという悲惨な結末を迎えている。



■第7狙撃部隊（SSU-7）

第7狙撃部隊、通称SSU-7は地球連邦軍の狙撃による支援部隊である。本来は特殊任務に当たる狙撃能力の高い部隊の編成であったが、一年戦争も終盤にさしかかっていた12月の段階ではRGM-79を主戦力とする連邦軍MS部隊の作戦支援に回され、一年戦争の最終戦となったア・バオア・クー戦においては、各部隊の突入支援を行った。

特殊任務部隊であるため、隊員は少数精鋭と呼べる構成で、ジム・スナイパーカスタムが4機、ジム・ライトアーマーが8機でこれを3小隊とし、この内、第1および第2小隊は、トラファルガー級支援巡洋艦「トライアンフ」を母艦としていた。同艦はサラミス級を旗艦とする艦隊に所属しており、第3小隊はトライアンフの僚艦に搭載された。なお、各小隊は予備機として、ジム・ライトアーマーをそれぞれ1機ずつ与えられていたという。

● 第1小隊

No.1	テネス・A・ユング	RGM-79SCジム・スナイパーカスタム
No.2	カール・ヴァルトマン	RGM-79SCジム・スナイパーカスタム
No.3	アーロン・ダイアモンド	RGM-79Lジム・ライトアーマー

● 第2小隊

No.1	ジム・スナイパーカスタム	
No.2	ジム・スナイパーカスタム	
No.3	ジム・ライトアーマー	

● 第3小隊

No.1	ジム・ライトアーマー	
No.2	ジム・ライトアーマー	
No.3	ジム・ライトアーマー	

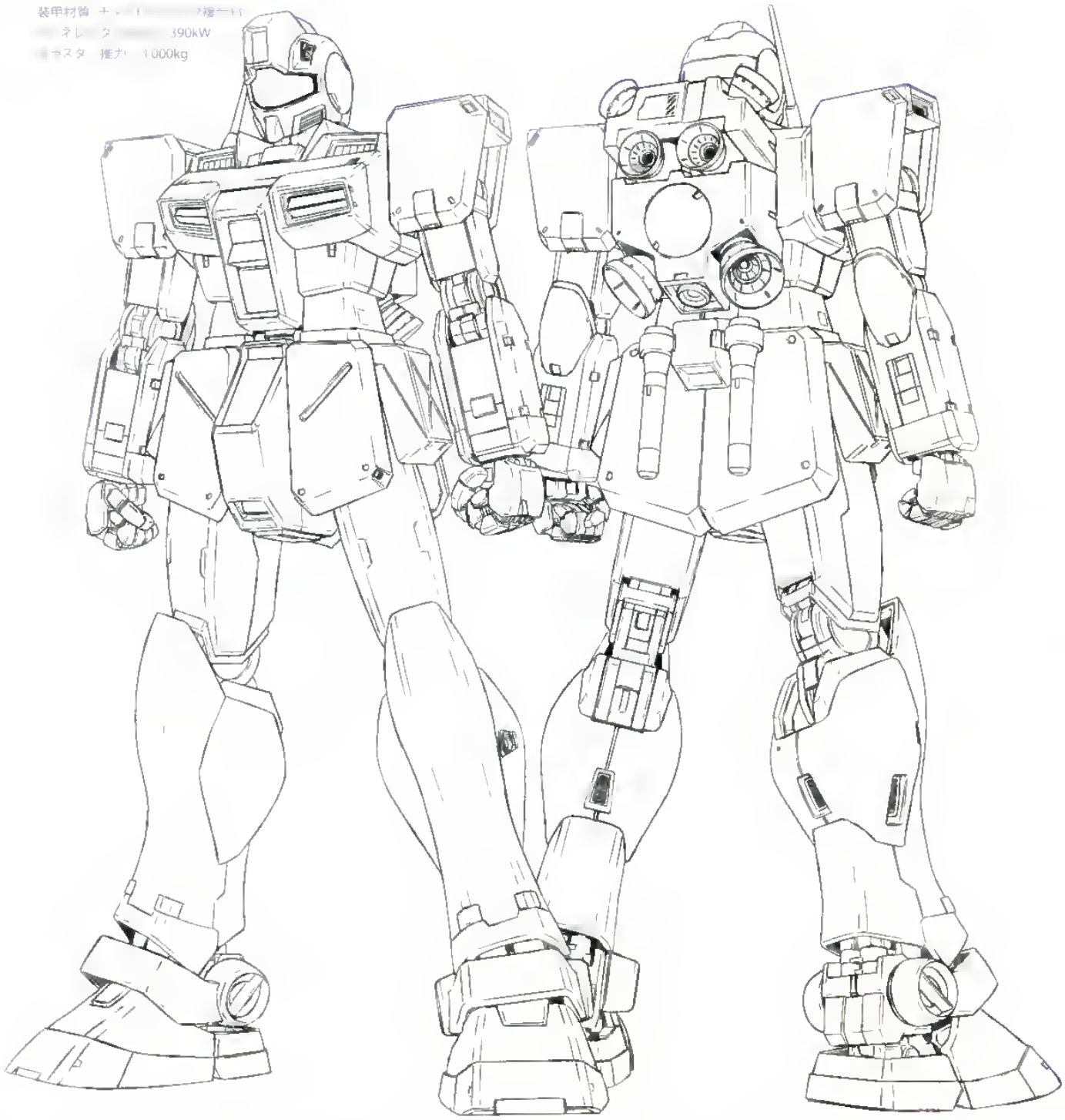


TENNETH A. JUNG

RGM-79GS GM COMMAND

RGM-79GSジム・コマンド宇宙戦仕様

型式番号 RGM-79GS
全高 18.0m
本体重量 45.1t
全備重量 75.0t
装甲材質 ナノラミネート装甲
ジェネレーター出力 390kW
スラスター推力 1000kg



RGM-79GSジム・コマンド宇宙戦仕様

北米オーガスタ工廠が設計を担当した RGM-79の性能向上型。同工廠が開発したRGM-79Dをベースにタキム社製の新型ジェネレーターを採用。1400kW に迫る出力を得ることで、ビーム・ガンやビーム・ライフルの安定動作を担保し、総合的な火力を向上させている。また、推進系も刷新されており、大気圏内外それぞれに最適化させた2種類のスラスターを並行開発。これを以て、地上用のG型と空間戦用のGS型という2機種を同時に実用化することに成功した。火力と機動力の双方で高い水準を維持した本機は、熟練パイロットの手に渡れば、MS-09系やMS-14系とも互して戦えたとされ、前線からの評価も極めて良好であった。

ただし、問題点もあった。当時の冶金技術で、G型系が採用していた小型高出力の新型ジェネレーターを製造するには、無重力環境の生産設備が必要とされていたのだ。つまり、連邦最大のMS生産工場であったシャフローでの製造が行えず、事実上、ルナツーの生産ラインでしか作ることができなかったということである。テネス・A・ユングが受領した機体もまたこうした経緯もあってルナツーから出荷されたばかりの状態であったのだ。

WEAPON

ジム・コマンド（宇宙戦仕様）の武装



■BOWA BG-M-79F 3A ビーム・ガン

旧世代MS用携行ビーム兵器のテストヘッド的な位置付けで開発された火器。ビーム・スプレーガンとビーム・ライフルの中間的な存在として、ビーム・ガンというカテゴリーに分類される。本体後部に、ビーム加速器を束ねたボトル状のバッテリーパックを備えている点が特徴であり、これにより最大12秒間の連続射撃が可能となった。そのため命中精度が向上した他、連続射撃すればMA-05ビグロなどの大型機をも撃破可能であった。



■NFH/ RGM-M-Sh-AGD 対MS戦用シールド

タワーシールドを、MSサイズに拡大するというコンセプトで設計されたチタン・セラミック複合材製の大盾。運動エネルギーの軽減や跳弾を期待して、表面を湾曲させているのが特徴である。また、先端部に切れ込みを入れることでクロー状に成形しているが、これは地面に突き刺すことで固定したり、近接戦闘時に刺突兵器として用いるための処理だという。さらに表面に初期の耐ビーム・コーティングが施されてもいる。

DANGER

E.F.S.F.

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

KEEP CLEAN
ON GLAZE SHIELD SURFACE

WARNING
COMBUSION GAS EMITTING DUCT
POISON INHALATION HAZARD

DANGER
DO NOT STAY IN FIRING LINE

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

KEEP CLEAR
AMMUNITION BAY SLIDES TO LATERAL

EMERGENCY USE ONLY
FORCED SEPARATING CONTROL ACCESS IS ON TOP SIDE

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

DANGER
KEEP AWAY
HIGH VOLTAGE
HIGH ENERGY SOURCES INSIDE

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

DANGER

DANGER
KEEP AWAY
HIGH VOLTAGE
HIGH ENERGY SOURCES INSIDE

DO NOT PLUG SENSOR HOLE
DO NOT OVER PAINT ON SENSOR FACE

DO NOT PLUG SENSOR HOLE
DO NOT OVER PAINT ON SENSOR FACE

EMERGENCY MANUAL OPEN CONTROLLER

CAUTION
ENTRY DOOR SLIDES UPWARD
DO NOT LEAN AGAINST DOOR

EXTRA EQUIPMENT HOLDER INSIDE

MONITORING ACCESS
INCLUDES,
COMMUNICATOR TO COCKPIT
STATUS MONITORING DISPLAY,
DIRECT ACCESS TO
MAIN COMPUTER
AND INSPECTION TERMINAL

CAUTION
HIGH ENERGIZED MATERIAL LOADED
HANDLE WITH CARE

CAUTION
HATCH DOOR DROPS DOWN
DO NOT STEP, STAY IN AND STAND ON

EXTRA EQUIPMENT HOLDER INSIDE

MANIPULATOR HARMONIZER IS BEHIND BACK ARMOR

HOT GASES BLAST
DANGER

CARGO RELEASE CONTROL

CAUTION
INCLUDES HIGH VOLTAGE AND ENERGIZED INSTRUMENTS

HOT GASES BLAST
DANGER

NO STEP

NO STEP

DANGER
KEEP AWAY
HOT BLOW AND SWIRLING SPARKS
DANGER

HOT EXHAUST GASES
DANGER

DANGER
HIGH VOLTAGE / HIGH-ENERGY SUPPLY
HAZARDOUS VOLTAGE
CAN CAUSE SEVERE INJURY OR DEATH
TURN OFF POWER AND
LOCK-OUT BEFORE SERVICING

HOT GASES BLAST
DANGER

HOT EXHAUST GASES
DANGER

E.F.S.F.

DANGER

DANGER

ACCESS FOR
ARMOR PLATE
DETACHING CONTROL

ACCESS FOR
ARMOR PLATE
DETACHING CONTROL

DANGER
KEEP AWAY
HIGH VOLTAGE
HIGH ENERGY
SOURCES INSIDE

ACCESS FOR
ARMOR PLATE
DETACHING CONTROL

ACCESS FOR
ARMOR PLATE
DETACHING CONTROL

DANGER
KEEP AWAY
HIGH VOLTAGE
HIGH ENERGY
SOURCES INSIDE

MONITORING ACCESS
INCLUDES
COMMUNICATOR TO COCKPIT
STATUS MONITORING DISPLAY
DIRECT ACCESS TO
MAIN COMPUTER
AND INSPECTION TERMINAL

EXTRA EQUIPMENT
HOLDER INSIDE

HIGH ENERGIZED MATERIAL LOADED
HANDLE WITH CARE

DANGER
KEEP AWAY
HIGH VOLTAGE
HIGH-ENERGY
FIELD SOURCES
INSIDE

EXTRA EQUIPMENT
HOLDER INSIDE

MANIPULATOR HARMONIZER
IS BEHIND BACK ARMOR

CARGO RELEASE CONTROL

CAUTION
SABER HOLDER HAS
NO RECHARGER

CAUTION
INCLUDES HIGH VOLTAGE AND
ENERGIZED INSTRUMENTS

HOT GAS ES BLAST
DAN GER

HOT GASES BLAST
DANGER

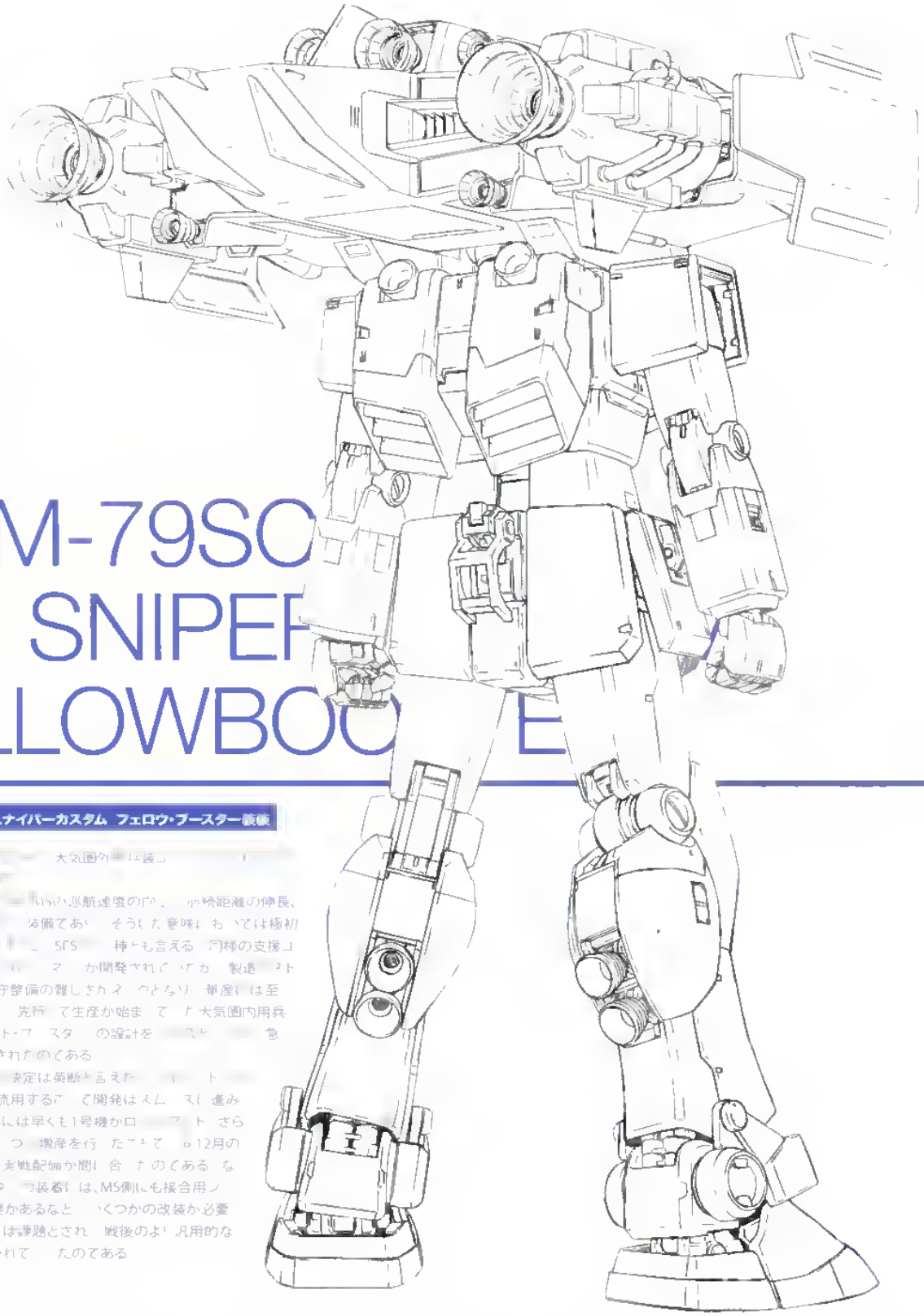
DANGER
KEEP AWAY
HIGH VOLTAGE
HIGH-ENERGY
FIELD SOURCES
INSIDE

ACCESS OF
ANKLE JOINT ACTUATOR /
DAMPER ADJUSTER IS
LOCATED BEHIND ARMOR PANEL

WARNING
HOT SURFACE
BURN HAZARD
DO NOT TOUCH

DANGER
STAY
BACK
OVER 10
METERS
HOT BLOW AND
SWIRLING SPARKS
DANGER

RGM-79GS GM COMMAND CAUTION SIGN AND MODEX



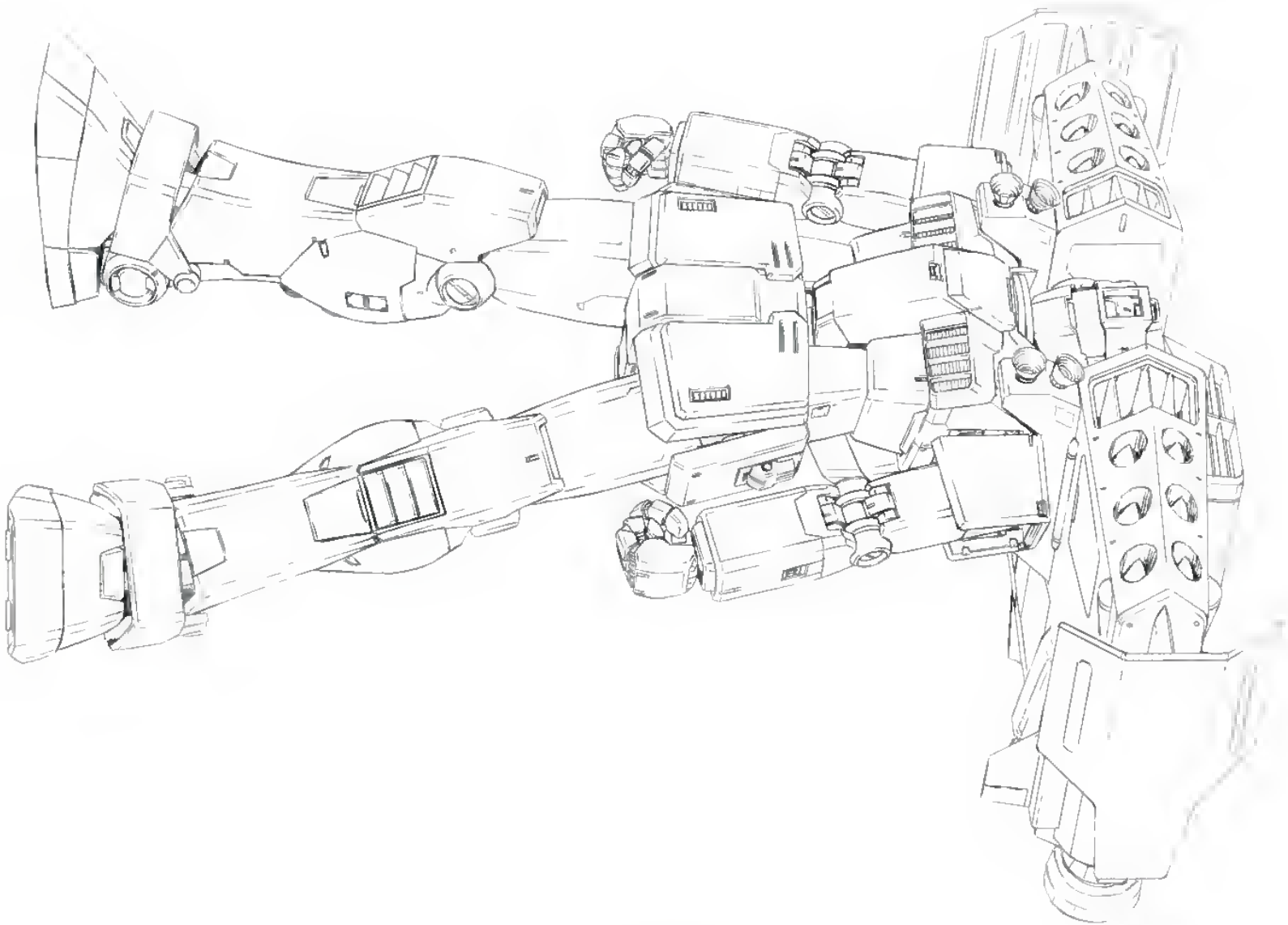
RGM-79SC
GM SNIPEF
FELLOWBOO E

RGM-79SCジム・スナイパーカスタム フェロウ・ブースター装備

大気圏外[illegible]仕様」

[illegible]を装備し[illegible]
[illegible]ース[illegible]いわゆる巡航速度の[illegible]。[illegible]の航続距離の伸長、[illegible]の強化を目[illegible]装備であり、そうした意味においては極初期[illegible]サン[illegible]イト・[illegible]ー[illegible]SFS[illegible]種とも言える。同様の支援ユ[illegible]ニットでは、既に[illegible]マ[illegible]が開発されていたが、製造コストや生産性、そして保守整備の難しさがネックとなり、量産には至らなかった。そして、先行して生産が始まっていた大気圏内用兵装ユニット「レヘト・ファスタ」の設計を[illegible]急ぐ[illegible]そこで本機が開発されたのである。

結論から言えば、[illegible]決定は英断と言えた。[illegible]ファスタの[illegible]ムを流用するこ[illegible]で開発はスムーズに進み、C0079年11月上旬には早くも1号機がロールアウトさらに生産ラインを転用しつつ増産を行ったことで、0.12月の「星一号作戦」まで[illegible]実戦配備が間に合ったのである。なお、ブロウ・ファスタ[illegible]装着には、MS側にも接合用ノードを設置する必要があるなど、いくつかの改装が必要であったことから、これらは課題とされ、戦後のより汎用的なSFS開発へと引き継がれていったのである。







EARTH FEDERATION FORCE

LYDO WOLF

リド・ウォルフ

かつて漆黒にペイントされた機体を駆り、勇猛果敢な戦いぶりで多大な戦果を挙げたことから、「踊る黒い死神」と呼ばれ恐れられた男がいた。名は、リド・ウォルフ。UC0052年、人種のるつぼと化していたフランスはパリの下町にて、アルメニア系とアラブ系の混血である父と、北アフリカ系にルーツを持つ母との間に生まれた彼は、何人にも見えて何人にも見えないと評される独特の風貌を備えた青年へと成長を遂げた。

そんな彼が、軍人を志したのは愛国心からでもなければ、冒険心からでもなかった。失業率が極めて高かった旧市街の薄汚れた一角で少年期を過ごした彼は、仕事もなく日中から酒浸りになり、酔って家族に拳を振るう父に反発して、軍人となることを決意したという。正規軍という安定した就職先で身を立て、貧労人であった母を養うこと。そして、理不尽な暴力に訴える父をねじ伏せるだけの強い男になること。その小さな正義心に従って努力を重ねた彼は、高等教育過程の修了後に地球連邦空軍の士官学校に入学。4年間の教育プログラムを終て、航空機のパイロット資格を得るとシャイアン空軍基地に配属されている。ここでウォルフは、当時最新鋭であったFF-3セイバーフィッシュのパイロットとなる幸運に恵まれ、軍隊生活の第一歩を踏み出したのだった。当時の彼を知る者の多くが語るところによれば、新人時代のウォルフは控え目でおとなしい性格で、若いパイロットにありがちな無謀さとは無縁の存在であったという。話を聞けば聞くほど、後の激しすぎる戦いぶりとは、まったく結びつかない人物像が浮かび上がるのだ。



リド・ウォルフ
地球連邦軍少佐

【死神の誕生】

一年戦争の開戦を、リド・ウォルフ少尉（当時）は旧ハンガリー領のケチケメート空軍基地で迎えた。遡ること2年前に北米から異動してきていた彼は、当地を拠点とする第868飛行隊にて小隊長を務めていたのである。ここでの乗機もまた、シャイアン時代と同様にFF-3セイバーフィッシュであったのだが、変わっている点もあった。同飛行隊の所属機は、ブラックを基調とした独特のカラーリングパターンを採用していたのである。これがウォルフの「踊る黒い死神」なる不気味な異名へと繋がってゆく。

UC 0079年も2月に入り、いよいよジオン公国軍は地球侵攻作戦に着手する。マスドライバーによる地表攻撃と宇宙艦隊による軌道上の制宙権確保を経て地ならしを行うと、少数の先発隊を地球へと降下。こうして高高度迎撃設備を破壊すると、3月1日、本命である第1次降下作戦を実行に移す。軌道爆雷による援護を行いつつ、地球攻撃軍第一地上機動軍団を中核とする部隊を、中央アジア地区天山山脈北部のバルハシ湖およびアラル海へ投下。そこを起点として、宇宙への階段となる旧カザフスタン領バイコヌール宇宙



RGC-80ジム・キャノン

基地へ向けて進軍を開始した　かくして　またたく間に目標を制圧した公国軍は、カスピ海北岸からヨーロッパ方面へ向かうルートと、カスピ海東岸から南下し中東地域を目指すルートの二手に分かれて進撃を続行する。この内、前者の迎撃にあたった部隊の中に、ウォルフたち第868飛行隊も含まれていた

キエフにて給油した後、フライマンタ飛行隊と合流したウォルフたちは、ヴォルゴグラード近郊で公国軍部隊と接触　はじめて、MS-06Fザクiiを目の当たりにした彼らは、果敢に対地攻撃を敢行するも有効打を与えることができず、逆に2機のFF-3を撃墜され、ほうほうの体で引き返す結果となった　開戦当初の緒戦において、公国軍陣営がミノフスキー粒子の散布による電波撹乱戦術を多用していたことを予め知らされていたウォルフたちは、もとより有視界戦闘を行う覚悟であったが、それでもなお、これまで訓練してきたセオリーが通用しない戦場では実力を発揮できなかったのである　しかし、戦場と基地を幾度も往復する内に、やがてウォルフは活路を見出す　当時、ヨーロッパはコロニー落としの影響で天候不順が続いており、厚い雲で覆われていることが多かった　ミノフスキー粒子がバラ撒かれていることを逆手に取り、上空の雲間に隠れて待機すれば、そう簡単には発見されない。こうして姿を隠しつつタイミングを計り、公国軍部隊が渡河すべく橋梁を渡ろうとするところを急襲したのだ。走行脚を有するMSが車両とは比較にならない自由自在な機動でミサイル攻撃を回避するのであれば、動くことのない足元の橋を狙おうというわけである。この策は見事に的中し、敵MSは河中に孤立　身動きが取れなくなったところで、友軍のフライ

マンタ戦闘爆撃機を呼び込んで攻撃させ、ウォルフは初のMS撃墜を達成したのだ　あくまで数機がかりでの共同撃墜であったが、それでもこの成功体験は連敗続きの戦闘機乗りたちを奮い立たせるのに十分であったことだろう

もちろん、そう都合よく何度も敵軍が渡河する場面に遭遇できるわけではなかったが、MSの足場を崩すという発想自体は有効であった　地図から地形を読み取り、18メートル級のMSが移動できるルートを絞り込み、狭い渓谷や足場の悪い山道に狙いを付け、友軍部隊と連携を取りながら攻撃する。ウォルフたちは、資源地帯を確保するために進軍する公国軍部隊に幾度となく襲いかかり、3月の一連の戦闘において総計5機のMSを仕留めてみせたのだった　それゆえ、第868飛行隊の黒い翼は、不慣れな地球の環境に戸惑う公国軍将兵から、死を運ぶ鴉などと呼ばれるようになり、やがて「踊る黒い死神」という異名が定着することになるのだった。

だが、死神とて決して不死身ではなかった。実戦を経験する度に、1機また1機と僚機が落とされてゆく。上官の戦死に伴い、中尉に昇進したウォルフは第868飛行隊の中隊長となるが、その昇進に喜びは伴わなかった　仲間が艦れるほどに、ウォルフたち生き残りのパイロットたちは、大胆に、無謀に、そして獰猛になってゆく。そして、その激しい戦いぶりが戦果を挙げる原動力となる一方で、自らに出血を強いるのだった　こうして、数ヶ月が過ぎ10月を迎える頃には、第868飛行隊の損耗率は8割を超え、継戦能力をほぼ喪失。オデッサ作戦を控えた戦力再編に伴い、同隊は解隊されることとなったのだった。



【MSパイロットへの転向】

部隊解隊に伴いヘルファスト基地での待機を命じられたリト・ウォルフ中尉には、いくつかの選択肢が与えられた　このまま空軍戦力の再編を待って、新たな飛行隊の一員となるのかひとつ　また、宇宙軍に異動して航宙機パイロットに転向するという進路もあった　だが、彼が選んだのはどちらでもない　新設のMS部隊に加わるために訓練を受けるという、第三の道を選択したのである

かくして彼は、ヘルファストから南米シャブローへと向かい、密林の地下深くに隠された基地施設で訓練に明け暮れることとなる。ここに至るまで、彼は多くの仲間を喪っていた　また、ジオンの占領下にあるパリで暮らしているであろう母との音信も途絶えて久しい。そうした状況下にあって、ウォルフは喪失感と不安感を覆い隠すためにも訓練に没頭した

11月になりオデッサ作戦が実行に移され、かつての戦友たちがヨーロッパの空を舞っていた時もまた、彼はジャブローにいた　MSパイロットの資格を得た後、新造されたばかりの簡易中距離支援機、RGC-80シム・キャノンの慣熟訓練を受けていたのだ。そして、この訓練を終えた後、ウォルフは愛機とともにミデア型輸送機に飛び乗ることになる。目的地は、アフリカ大陸の港湾都市トリポリであった

ここで当時のアフリカ戦線の状況を振り返っておこう　11月9日、ヨーロッパ戦線の要とされたオデッサを落とした連邦軍は、11月18日にベルベット作戦を発動　中東レバント地方から地中海沿岸の北アフリカ地域での勢力回復に向けて動き出した　この作戦は概ね順調に推移し、10日後となる28日には目的を達成したとしてベルベット作戦の終了を宣言。ヨーロッ



LYDO WOLF FILE 05



RX-77Dガンキャノン量産型

北方面から戦力を南下させ、カイロ、ベンガジ、トリポリの3都市に戦力を集結、来るべきアフリカ掃討作戦に備えることとした。リト・ウォルフのジャブローからの異動も、この動きに合わせたものであり、現地にて第3機械化混成大隊に合流している。

同隊は、実に多種多様な機体で構成されていた。もっとも多かったのは標準使用のRGM-79Bシムであるが、ウォルフとともに輸送されてきたRGC-80に加え、ベルファスト工廠にて製造されて間もない重装甲型のRGM-79H陸戦用ジム、ジャブロー工廠製の乾燥地対応型であるRGM-79Fデザート・ジムなど、実に雑多な構成であった。これは軍上層部がアフリカでの戦いを、来るべきソロモン攻略戦の試金石と位置づけていたことに由来するという。できるだけ多くの機種を実戦にて試し、運用データを収集しようとしていたらしいのだ。

ともかく彼は、RGC-80のパイロットとして、12月5日より開始されたアフリカ掃討作戦に参加。旧リビア領を南進し、その一角に駐屯地を設営し足場を得ることに成功する。だが、快調な進軍もそこまでだった。同月7日、公国軍上層部はアフリカ戦線の残存部隊に対し、引き上げ命令を通達、宇宙港を備えるアデン方面へと撤退を開始してはいた。だが、その一方でビッター大佐麾下の東アフリカ方面軍第3突撃機動師団など少なくない部隊が、消極的な方針に反発し、広大な砂漠地帯に踏みとどまって戦う道を選んだのである。ウォルフたち第3機械化混成大隊MS第2中隊もまた、こうした徹底抗戦派の部隊と遭遇することになる。

戦力的には、連邦軍陣営が勝っていた。多数の新



GM-79SPジム・スナイパーII

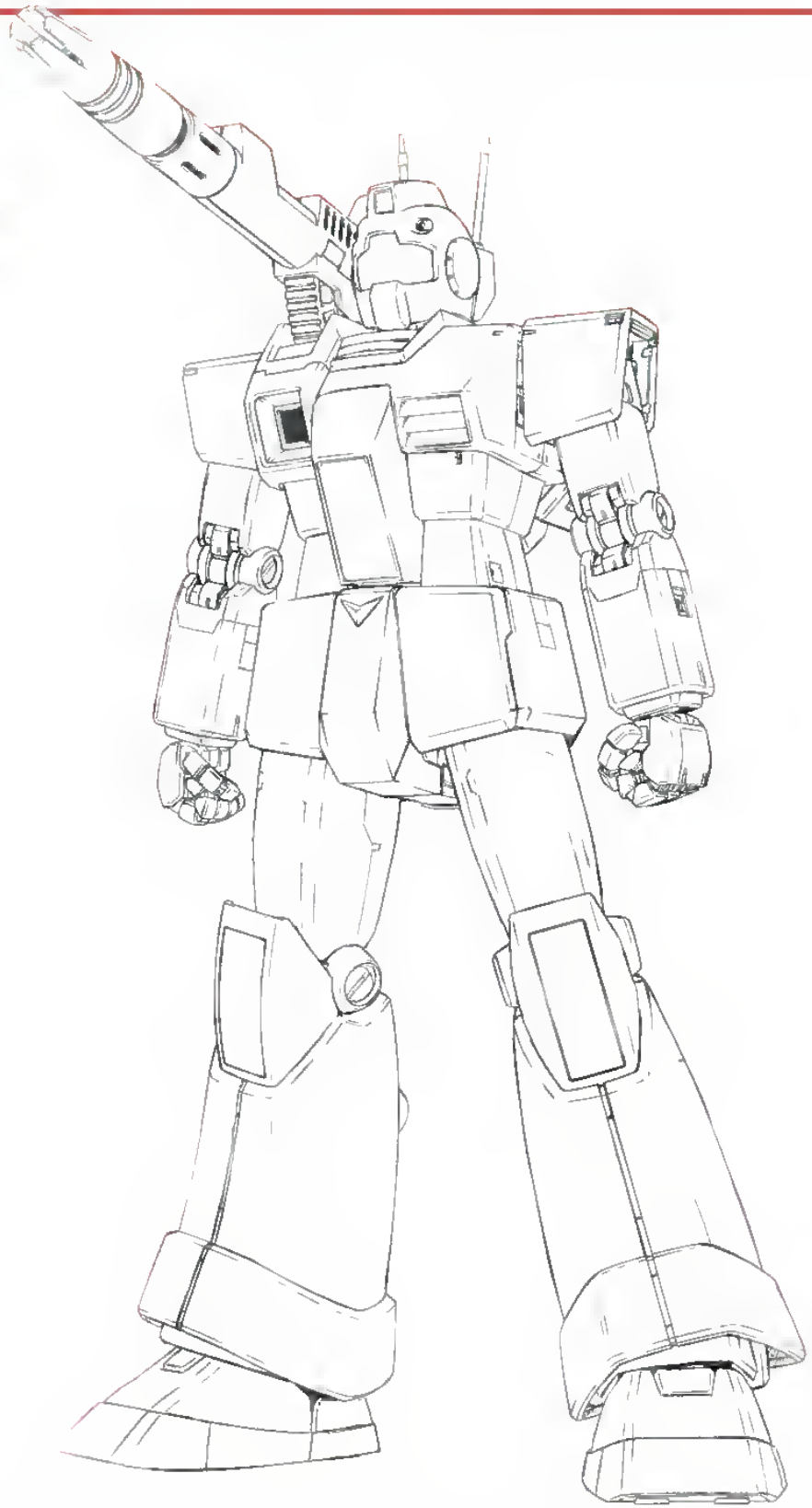
型機を備え、数に置いても引けを取らなかった。10ヶ月余りアフリカで戦い続けてきた公国軍のベテランパイロットたちは、粘り強く戦い続けた。空軍出身の優秀な元戦闘機乗りという触れ込みで、半ば鳴り物入りで加入したウォルフとしては、ここで戦果を挙げて存在感を示したいところであったが、どうにもMSという新兵器に馴染めない。敵機の撃墜を記録するところか、むしろ逆に突出し過ぎて被弾する有様で、予想外の苦戦を強いられることになった。念願のMSを用いて第868飛行隊の戦友たちの仇を討たんと意気込んでいた彼は、整備兵を「いくるめて乗機をブラックに塗布していたが、目立つ外見と高い戦意の割に損害ばかりが目立つ格好となってしまう。こうして1週間が過ぎる頃には、仲間の将兵からも皮肉めいた言葉が投げかけられるようになっていた。

しかし、ウォルフの所属の1個にあたる飛隊の中隊長、ビンス・マクマーン大尉は決して見捨てはしなかった。誰よりもこの勇猛な若者の経験とセンスを信じていた彼は、実績が伴わぬ状況下でありながら、ウォルフを強力に後押ししたのである。RGC-80が修復中となれば、追って配備された最新鋭機、RX-77D量産型ガンキャノンを優先的に与え、さらには戦闘機乗りの経験が活きるようにと、飛行支援ユニット「ライトライナー」を手配さえした。こうした隊長の計らいもあり、やがてウォルフは才能を開花。12月中旬の1週間で、公国軍MSを21機撃墜し、死神伝説を復活させたのであった。しかし、死神はまた大切な仲間を失う。彼が初のMS撃墜をマークする前日、ビンス・マクマーン大尉は公国軍機との交戦中に機体をヒート・サーベルで両断され、戦死していたのである。

RGC-80 GM CANNON

RGC-80 ジム・キャノン

型式番号 RGC-80
全高 18.4m
頭頂高 17.6m
本体重量 49.9t
全備重量 65.3t
装甲材質 スチール チタ[illegible]
ジェネレーター出力 976kW
スラスター推力 63,500kg

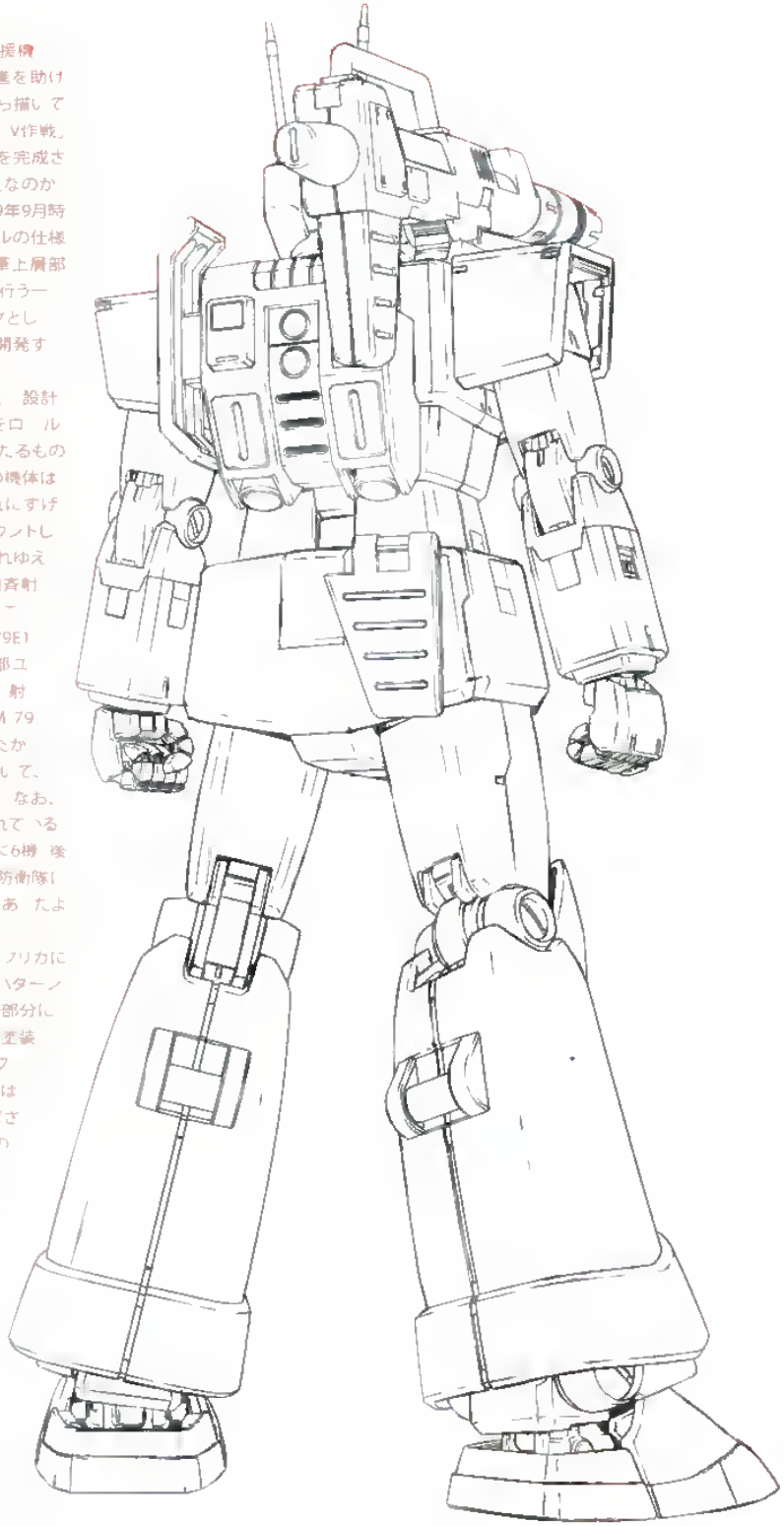




RGC-80 GM CANNON

RGC-80 ジム・キャノン

ャフ■ 工廠にて開発・製造された簡易中距離支援機
地球連邦軍は 支援砲撃によ て前衛部隊の前進を助ける中距離支援機という構想を かなり早い段階から描い ており 実際に 極初期のMS開発プロジェクトである V作戦」にお ても RX 77カンキャノンという優れた機体を完成させて た しか 高い完成度を誇っていたかゆえなのか RGM 79 ムの生産ライ ンが稼働し始めたUC 0079年9月時点においても 中距離支援機については量産モデルの仕様策定すら終わ ていな い状況であ た そこて 車上層部は暫定措置として試作機たるRX 77 2の追加生産を行う一方て RX 77系の量産モデルについてはペンディングとし RGM 79をベースとした簡易的な中距離支援機を開発する ととた これか、RGC 80ジム・キャノンである
たたし その開発すら必ずしも順調ではなかった 設計作業は急ヒ チて進められ 10月には試作1号機をロ ルアウトさせて いるのたか、試験運用の結果は惨憺たるものた たのた RGC 80 1の型式番号か与えられたこの機体は RGM 79を スに頭部ユニ トをRX 77系のそれにすげ替えた上て 上半身に360mmロケ ト砲2門をマウントしたけ う いかにも荒っぽい設計てあ た それゆえ機体の重量ハ スは要し 特に重力下ての主砲斉射時の姿勢制御に大きな問題を抱えることとな た こ結果を踏まえ、試作2号機では主砲を長砲身のM 79E1 変更した上て 搭載数も1門に削減 さらに脚部ユ トにウ イトも兼ねた分割式装甲を追加して 射撃時の安定性を向上させている 最終的に RGM 79 との ;共有率は6割程度にまて低減して ま たかそれてもとっにか仕様を確定 ャフロー工廠 おいて、終戦までの間に 少なくとも58機か製造されたと っ なお、これ の機体については 詳細な配備記録も残されて いるこれによると アフリカ戦線に19機、アメリカ戦線に6機 後 部かオ スト ア戦線に移動 ャフロ 防衛隊に9機、テ・ア ム艦隊に 14機、レビル艦隊に10機てあ たようた
ちなみい 本機を受領したト・ウィ レフは、北アフリカに到着した後、合流先の部隊で機体のカラーリングパターンを変更 る 本来であれは 腰や膝、ノ ル部分に用いられる塗料を用いて 胸、肩、脚まて暗色に塗装かつて所属 ていた第868飛行隊のFF 3セイハーフ を思わせるものと た 地球連邦軍 おいては こ したハ ソナルカラーともいうへき塗装か許可されるケ スは少な いか 高名な 撮る黒い死神 の威光か利用できるのではな かと考えから半は黙認と う形て再塗装か実 移されたのてはないかと考えられている



WEAPON
ジム・キャノンの武装



■BLASH HB-L-03/N-STD ハイパーバズーカ

ブラッシュ社製の多目的火力支援兵器。枯れた技術ゆえの動作の安定性と一撃の火力が魅力。主にトーチカや建造物といった固定目標、あるいは宇宙戦艦や人工衛星、陸上戦艦といった低速の移動目標に対する攻撃用に開発された。対MS戦に利用することもできたが、初速の遅いロケット弾は回避されることも多く、戦果に結びつけるためには相応の技量が必要であったと言われている。



■BOWA BR-M-79C-1 ビーム・スプレーガン

■HWF GMG MG79-90mm ジム・マシンガン

大気圏内外で広く用いられた標準的MS携行兵装。開発はホリフィールド・ファクトリー ウェポンズ社。口径は90mmと、初期型の100mmマシンガンと比べると小さいが、新型炸薬を用いることで初速は増し、MS-06系の装甲であれば十分に貫通させることができたという。また、90mm口径弾は、当時、連邦陸軍が戦闘車両用に採用していた標準弾でもあったため、兵站の面でもメリットが多かったと言われている。





CAUTION
POISON INHALATION HAZARD

CAUTION
PINCH HAZARD

KEEP CLEAN
ON SHIELD SURFACE

DANGER
DO NOT STAY IN FIRING LINE

KEEP CLEAR
AMMUNITION BAY
SLIDES TO LATERAL

ACCESS FOR
ARMOR PLATE
DETACHING CONTROL

ACCESS FOR
ARMOR PLATE
DETACHING CONTROL

DO NOT PLUG
SENSOR HOLE
DO NOT OVER PAINT
ON SENSOR FACE

E.F.S.F.

13

EMERGENCY USE ONLY
FORCED SEPARATING CONTROL
ACCESS IS ON TOP SIDE

DO NOT PLUG
SENSOR HOLE
DO NOT OVER PAINT
ON SENSOR FACE

DO NOT PLUG
SENSOR HOLE
DO NOT OVER PAINT
ON SENSOR FACE

13

MULTI PURPOSE ATTACHMENT
DO NOT EXCEED IN LOADING UPPER LIMIT
MUST BE AWARE OF ADJUSTING CG
KEEP CLEAR ON ATTACHMENT SURFACE

EMERGENCY MANUAL
OPEN CONTROLLER

MONITORING ACCESS
INCLUDES
COMMUNICATOR TO COCKPIT,
STATUS MONITORING DISPLAY,
DIRECT ACCESS TO
MAIN COMPUTER
AND INSPECTION TERMINAL

CAUTION
STAND CLEAR
ENTRY DOOR SWINGS UP
DO NOT STAND / STAY IN
SWEPT ZONE

EXTRA EQUIPMENT
HOLDER INSIDE

EXTRA EQUIPMENT
HOLDER INSIDE

MANIPULATOR HARMONIZER
IS BEHIND BACK ARMOR

ACCESS FOR BACK ARMOR
DETACHING CONTROL

CAUTION
INCLUDES HIGH VOLTAGE AND
ENERGIZED INSTRUMENTS

13

NO STEP

NO STEP

DANGER
KEEP
AWAY
HOT BLOW AND
SWIRLING SPARKS
DANGER

ACCESS FOR
ARMOR PLATE
DETACHING CONTROL

DANGER
KEEP AWAY
HIGH VOLTAGE
HIGH-ENERGY

DANGER
HIGH VOLTAGE / HIGH-ENERGY SUPPLY
HAZARDOUS VOLTAGE
CAN CAUSE SEVERE INJURY OR DEATH
TURN OFF POWER AND
LOCK-OUT BEFORE SERVICING

DANGER

NOTICE
CHECK THE REMAIN OF AMMUNITIONS
MUST BE MADE FULL LOADING
BEFORE MISSION
SORT OF AMMUNITION

DO NOT PLUG
SENSOR HOLE
DO NOT OVER PAINT
ON SENSOR FACE

ACCESS FOR
ARMOR PLATE
DETACHING CONTROL

DO NOT PLUG
SENSOR HOLE
DO NOT OVER PAINT
ON SENSOR FACE

E.F.S.F.

13

13

DANGER

MONITORING ACCESS
INCLUDES
COMMUNICATOR TO COCKPIT,
STATUS MONITORING DISPLAY,
DIRECT ACCESS TO
MAIN COMPUTER
AND INSPECTION TERMINAL

EXTRA EQUIPMENT
HOLDER INSIDE

EXTRA EQUIPMENT
HOLDER INSIDE

MULTI-PURPOSE ATTACHMENT
DO NOT EXCEED IN LOADING UPPER LIMIT
MUST BE AWARE OF AD JUSTING CG
KEEP CLEAR ON ATTACHMENT SURFACE

CAUTION
MULTI-PURPOSE ATTACHMENT
DROPS DOWN
DO NOT EXCEED IN LOADING UPPER LIMIT
MUST BE AWARE OF ADJUSTING CG
KEEP CLEAR, DO NOT STEP,
STAY IN AND STAND ON

EXTRA EQUIPMENT
HOLDER INSIDE

MANIPULATOR HARMONIZER
IS BEHIND BACK ARMOR

DANGER
KEEP AWAY
HIGH VOLTAGE
HIGH-ENERGY
FIELD SOURCES
INSIDE

ACCESS FOR BACK ARMOR
DETACHING CONTROL

CAUTION
INCLUDES HIGH VOLTAGE AND
ENERGIZED INSTRUMENTS

CAUTION
INCLUDES HIGH VOLTAGE AND
ENERGIZED INSTRUMENTS

DANGER
KEEP AWAY
HIGH VOLTAGE
HIGH-ENERGY
FIELD SOURCES
INSIDE

ANKLE JOINT ACTUATOR
DAMPER ADJUSTER IS
LOCATED BEHIND ARMOR PANEL

WARNING
HOT SURFACE
BURN HAZARD
DO NOT TOUCH

DANGER
STAY
BACK
OVER 10
METERS
HOT BLOW AND
SWIRLING SPARKS
DANGER

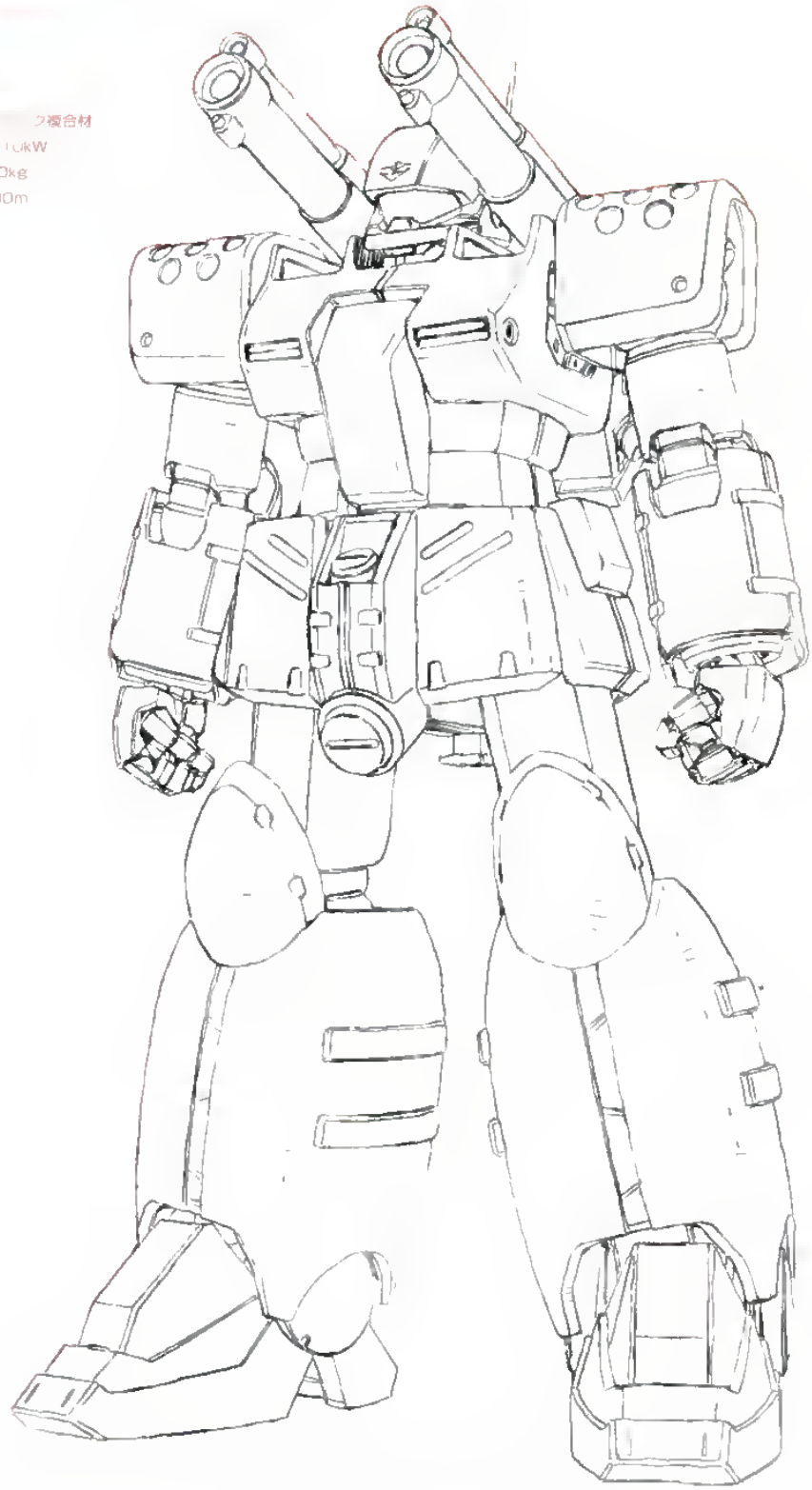
RGC-80 GM CANNON CAUTION SIGN AND MODEX

LYDO WOLF

RX-77D GUNCANNON

RX-77Dガンキャノン量産型

型式番号　RX
全高　18.1m
頭頂高　1　5m
本体重量　51.0t
全備重量　7■.2t
装甲材質　チタン合金セ　ク複合材
ジェネレーター出力　1.4　0kW
スラスター推力　93,500kg
センサー有効半径　7,300m



MASS PRODUCTION TYPE

FILE 05 LYNX WOLF



LYDO WOLF

RX-77D GUNCANNON

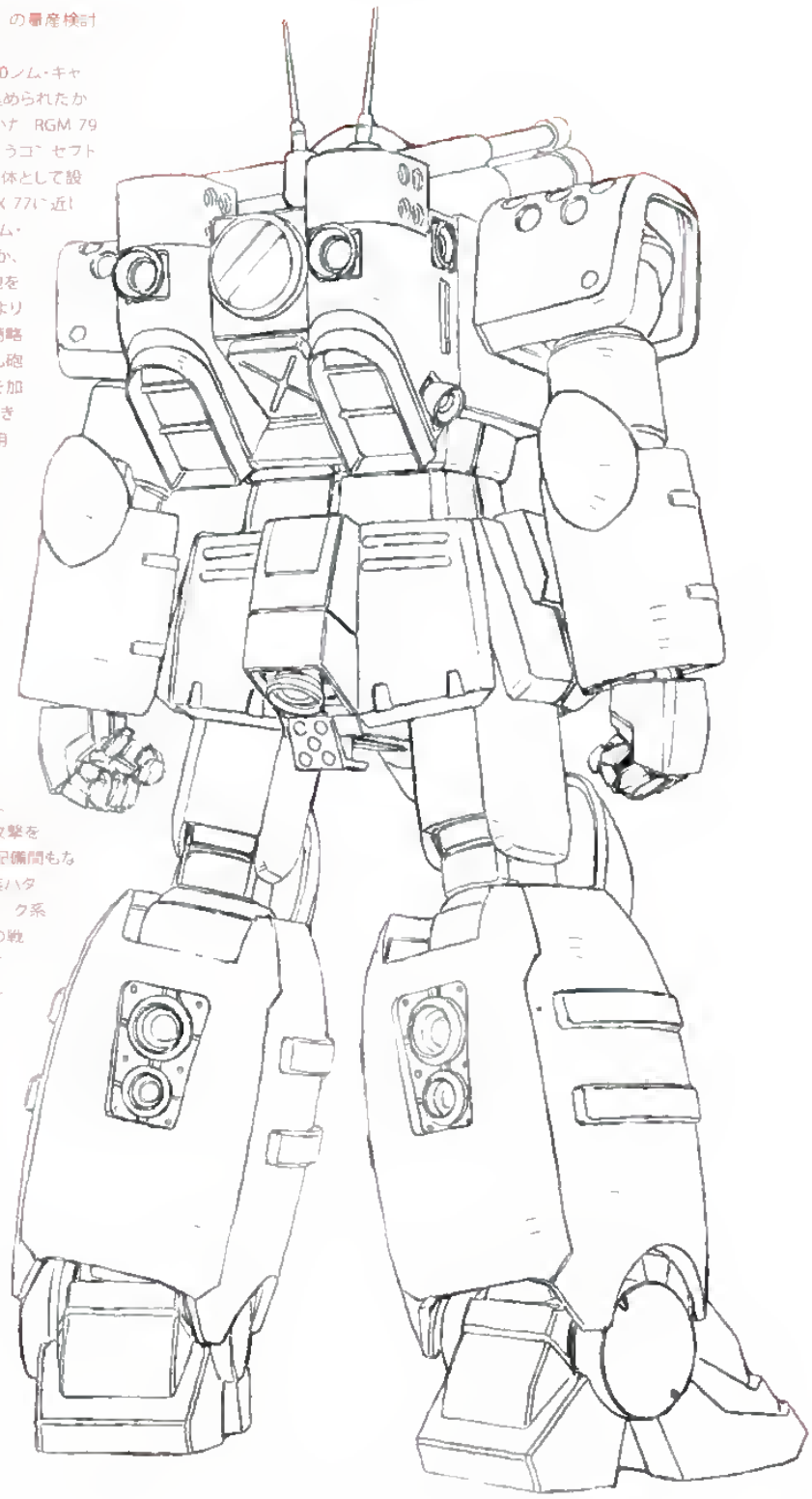
RX-77Dガンキャノン量産型

地球連邦軍か大戦末期に開発した RX 77カ ィ の量産検討モテ ル

RX 77系の生産型と ては ィ ロ 工廠製のRGC 80ジム・キャ か本命視され UC 0079年10月以降に順次増産か進められたか 一方でルナ 工廠では別方向から検討か行われて ナ RGM 79系とのハ ソ互換率を高めることて生産性を増そうとい うコ セプト自体は共通するものの ノャ ロ 案かRGM 79を母体として設計されているのに対 、ルナノ 案は原型機であるRX 77に近い 設計を採用して いる点か異なる 時期的には ヒーム・キャノ 搭載機であるRX 77 4の設計か完成して いたか、製造 ストや動作の安定を優先し、360mmロケ ト砲を備えたRX 77 3をへ スと て設計作業に着手 予てより問題視されていた給弾機構の複雑さを解消すへく、随時 た ンス ムをラントセルに集約、キャノン砲自体も砲身を伸縮可能なタイプに差し替えるなと大胆な改良を加えている これにより 上半身のホリ ームかさらに大き なっているか メノテナンス性はむしろ向上 、運用する前線部隊からも評判も良好てあ たという なお、本機は製造コスト低減を目的に 装甲材質を安価なものに差し替えたため耐弾性の面では一歩劣る格好とな たか ルナノ に生産ラインか置かれていた RGM 79G/GS ジム・コマントのハ を積極的に流用したこともあって、総合的な性能は原型機RX 77に匹敵する機体として完成したよった

量産検討モデルと う性質上、総生産数は決して多くはなか たというか 一部の機体か運用試験も兼ねて地球に降ろされており、第3機械化混成大隊にも少なくとも7機か送られている ト・ウォルフか用いたのは、その1機とい うことになるか 同隊関係者の証言によれば、これは予定されていたものではなか た という 彼の愛機であるRGC 80か戦闘中に被弾修理していたタイミ クて 駐屯地か公国軍部隊の攻撃を受けたため ヒ ス・マクマ ン大尉の指示により 配備間もな 本機て戦に出たらしい のた その際、機体の塗装ハタ は標準的なものてあったか、後日、本人の意向てブラ ク系カハタ に塗り替えられたという とうやら、前日の戦闘て敬愛するマクマ ン大尉か戦死したことを受けて 若い合戦に 死神 の装束を纏おうとしたようた こうした彼の執念を見せつけられたこ を受けて 整備兵たちも塗装作業に協力 わずか数時間て全身 ラ ク の特徴的なカラ リンクに変更されたらしい

かくしてウォルフは、漆黒のRX 77Dて出撃 中距離支援機てありなから ライトフイナ を用いて空から敵陣深くへと斬り込むという常識はずれの戦術により 1週間て21機撃墜という大戦果を挙け 踊る黒い死神 の名を知らしめたのた た



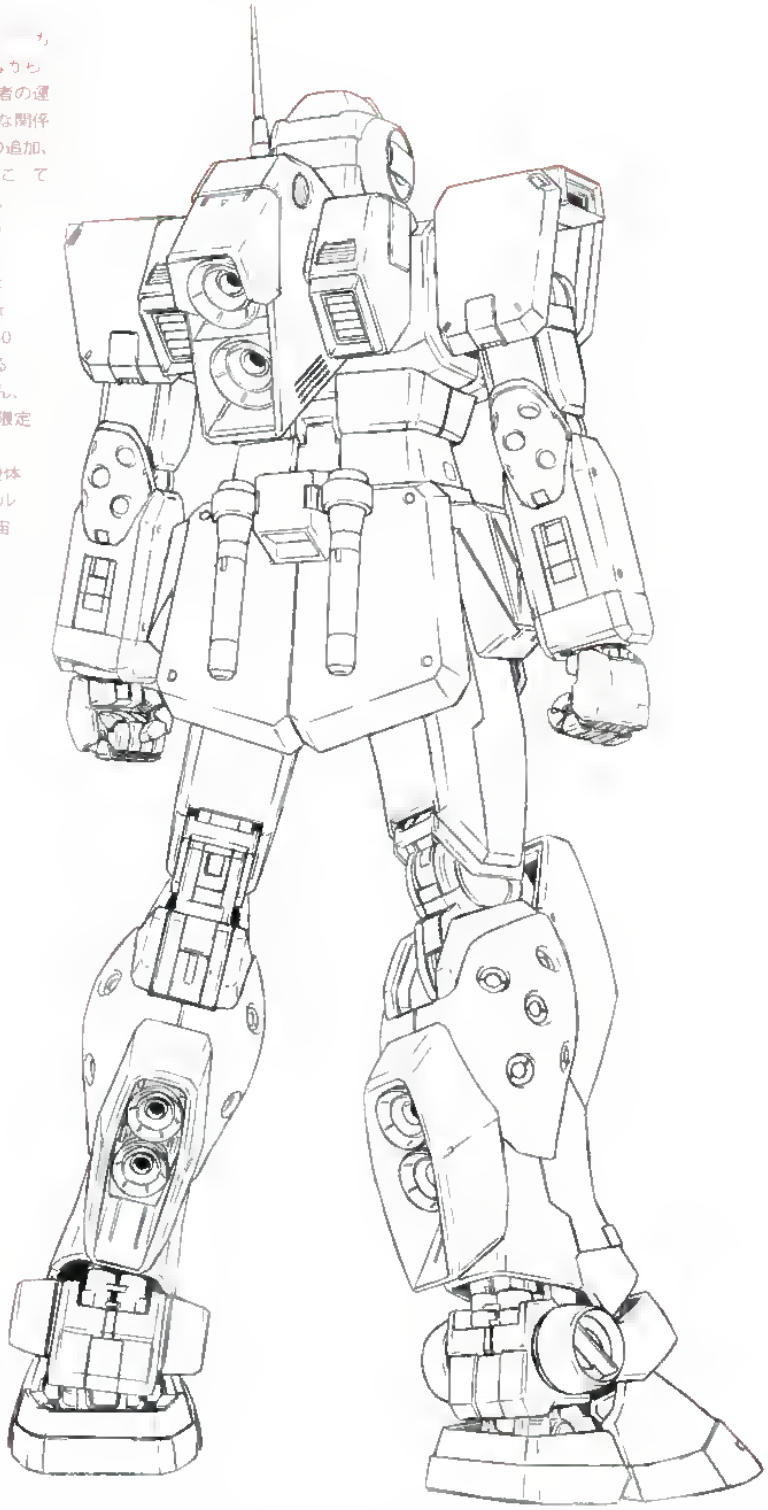
MASS PRODUCTION TYPE



RGM-79SP GM SNIPER II

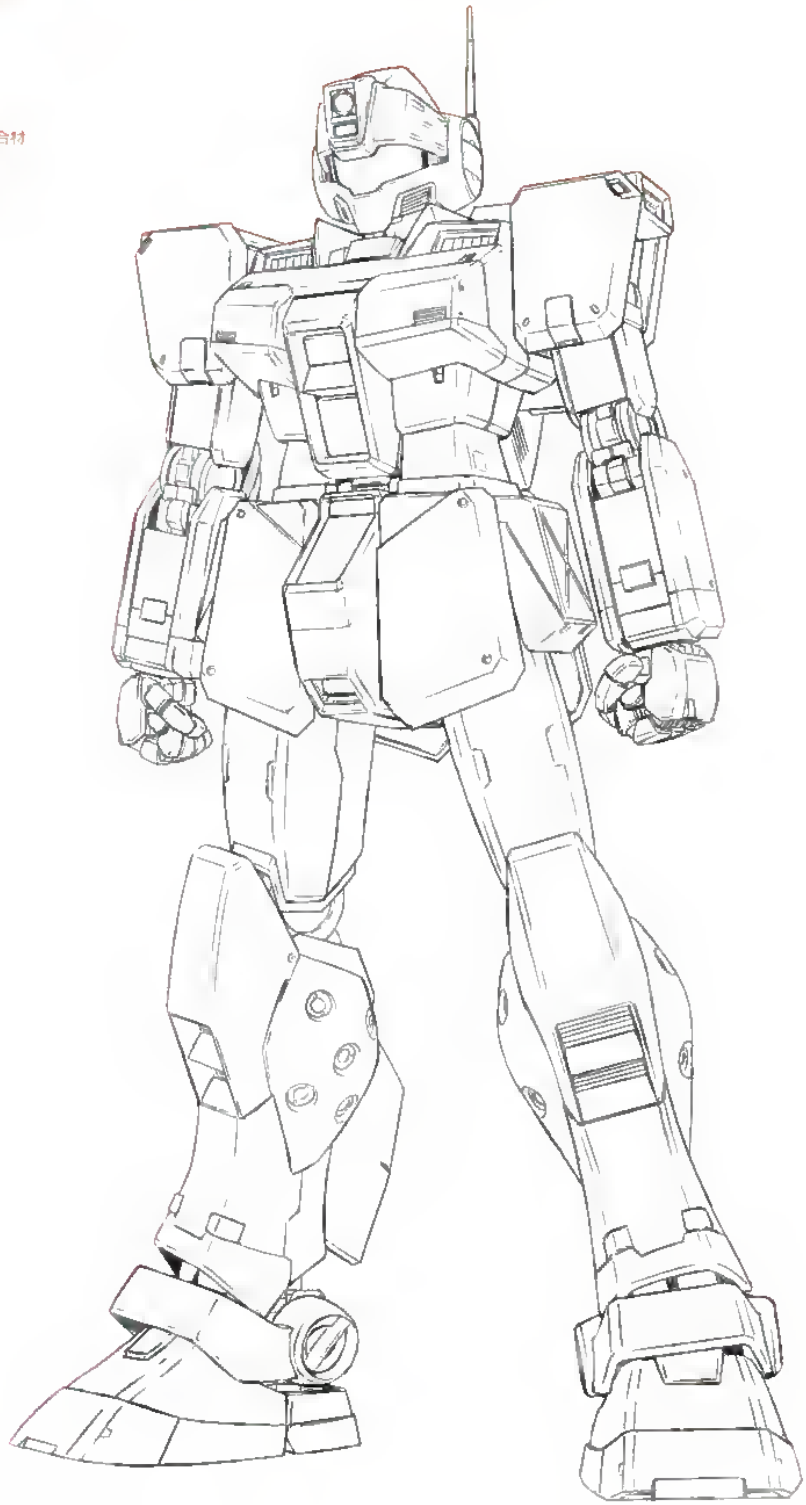
RGM-79SPシム・スナイパーII

RGM-79SPは　その名称からRGM-79[illegible]
フタつ後継機種として語られる[illegible]が多い　しかしながら
SC型とSP型の実戦投入時期は、ほぼ同[illegible]であり　前者の運
用結果を以てして後者の設計に着手した　という[illegible]な関係
性ではない　RGM-79系の標準機をベース　装甲の追加、
主機の出力向上　推力の増強といった改修を加えること
SC型は開発されたか、その仕様を同時期に開発[illegible]でし
たRGM-79G系の[illegible]レム[illegible]適応[illegible]ものかSP型なの
である[illegible]した経緯もあって　設計作業は比較的短
期間で完了したようだ　UC 0079年11月下旬には　はや
も試作機かロールアウト　内1機はジョン・コーウェ
[illegible]将　当時)か設[illegible]た特務部隊に配備され、11月30
日の[illegible]フロ　攻防戦において実戦に投入されている
それ以降　開発を主導した宇宙軍系の部隊はもちろん、
[illegible]トップ方面軍など陸軍系の部隊などにも、限定
的な[illegible]から供給されて[illegible]た
なおSP型[illegible]については、初期に生産された一部の機体
[illegible]ネ[illegible]タ　出力が規定に達しないというトラブル
が見られたようだか　星[illegible]号作戦に参加するため宇宙
[illegible]上カ[illegible]ナリト・ウォルフ中尉が受領した機体につい
[illegible]は　それ[illegible]を改善した後期モデルであったようだ
[illegible]たかって　彼が運用する中では、ビー[illegible]ム兵器がト
[illegible]ブル不能になるといった致命的な不具合は報告さ
れていない



RGM-79SP ジム・スナイパーII

型式番号　RGM-79SP
全高　18.5m
頭頂高　18.0m
本体重量　45.0t
全備重量　61.0t
装甲材質　チタン系セラミック複合材
ジェネレーター出力　390kW
スラスター推力　62,000kg
センサー有効半径　8,700m



WEAPON

ガンキャノン量産型
シム・スナイパーIIの武装





■Franz EF-KAR98K スナイパーライフル

一年戦争末期に開発された。75mm口径 対MS狙撃ラ イフル。極めて精度の高いバレルを有し 優れた弾道性能を誇っていたが ボルトアクション方式の動作機構を採用した こともあって連射が効かず、使い勝手に関しては良好とは言い難いものであったようだ。MS用携行火器について試行錯誤が続いていた時期に生み出された試作的兵器であったようで 製造数・運用例ともに少ない。





■BOWA XBR-M 79S 試作ビーム・ライフル

ボウワ社が大戦末期に試作したビ ム ライフル。特徴的な外見スネイルタイプと呼ばれた次世代型ビーム加速器を試験するために作られたもの。製造数が少ないが いくつか実戦投入されており ノト・ウォルフもまた運用していたという記録が残されている。後に このXBR-M 79Sをベースに EXAM方式に改良したBR-M-87という火器が開発されており アナハイム社製のMSN-00100向けに供給されている。



■HWF GMG MG79-90mm ジム・マシンガン



■NFHI RGM-M-Sh-AGD 対MS戦用シールド

DANGER

E.F.S.F.

13

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

KEEP CLEAN
ON GLAZE SHIELD SURFACE

WARNING
COMBUSION GAS EMITTING DUCT
POISON INHALATION HAZARD

EMERGENCY USE ONLY
FORCED SEPARATING CONTROL ACCESS IS ON TOP SIDE

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

DANGER
KEEP AWAY
HIGH VOLTAGE
HIGH ENERGY

DO NOT PLUG SENSOR HOLE
DO NOT OVER PAINT ON SENSOR FACE

DO NOT PLUG SENSOR HOLE
DO NOT OVER PAINT ON SENSOR FACE

CAUTION
ENTRY DOOR SLIDES UPWARD
DO NOT LEAN AGAINST DOOR

EXTRA EQUIPMENT HOLDER INSIDE

CAUTION
HATCH DOOR DROPS DOWN
DO NOT STEP, STAY IN AND STAND ON

DANGER

CAUTION
INCLUDES HIGH VOLTAGE AND ENERGIZED INSTRUMENTS

13

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

ACCESS FOR ARMOR PLATE DETACHING CONTROL

DANGER

DANGER
KEEP AWAY
HIGH VOLTAGE
HIGH ENERGY

13

MONITORING ACCESS
INCLUDES,
COMMUNICATOR TO COCKPIT
STATUS MONITORING DISPLAY
DIRECT ACCESS TO
MAIN COMPUTER
AND INSPECTION TERMINAL

CAUTION
HIGH ENERGIZED MATERIAL LOADED
HANDLE WITH CARE

EXTRA EQUIPMENT HOLDER INSIDE

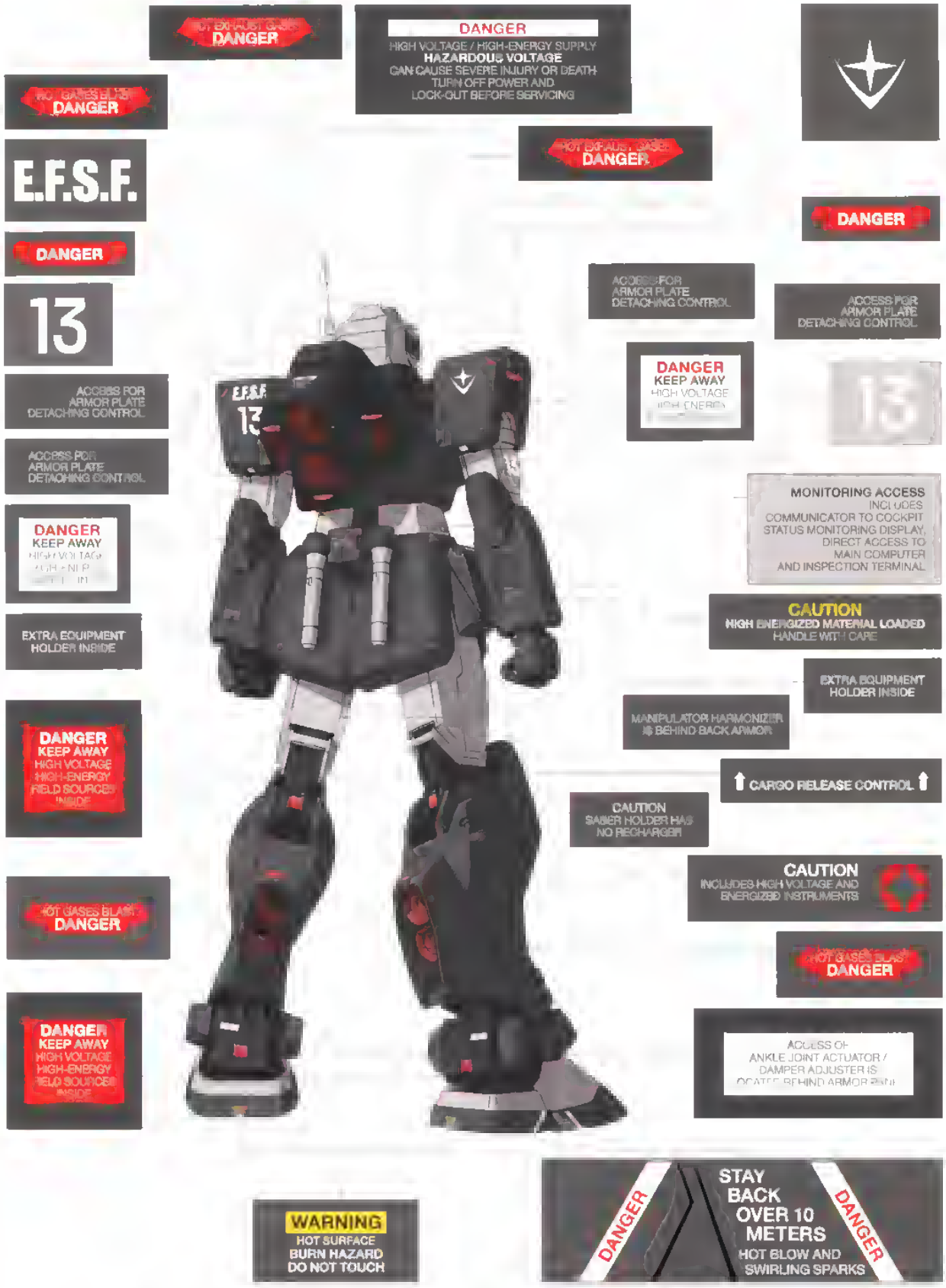
MANIPULATOR HARMONIZER IS BEHIND BACK ARMOR

CARGO RELEASE CONTROL

AIR JET INTAKE
DANGER
DANGER



DANGER
KEEP AWAY
HOT BLOW AND SWIRLING SPARKS
DANGER



RGM-79SP GM SNIPER II CAUTION SIGN AND MODEX



【死神の最期】

U.C.0079年12月19日、リド・ウォルフ中尉はふたたびジャブローにいた。アフリカ掃討作戦も佳境という状況で、作戦司令部より召喚されたのである。戦争の終結に直結する宇宙での反攻作戦に備え、ひとりでも多くの優秀なMSパイロットを欲していた宇宙軍からの求めて、アフリカのエースは前線から引き抜かれたのだ。そして、2日後には十数名のパイロットたちとともにシャトルで宇宙に上げられ、そのままルナツーを発したコロンブス級輸送艦に拾われ、旧サイド1方面へと進出。戦略物資――後にそれがソーラ・システムのミラーであったことを彼らは知ることになる――の輸送任務に同行している。そこで、初めての空間戦闘を経験させられているというのだから、呆然とさせられてしまう。召喚命令を受けてから、初めての空間戦闘までわずかに3日間。シミュレーターによる訓練をジャブローで18時間、移動中の母艦内で3時間、さらに実機での訓練を4回、約2時間のみ――たったそれだけで、彼の機種転換訓練は終わりを告げたのである。

唯一、彼にとって幸運だったのは、エースに相応しい最高級の乗機を入手できたことだろう。コロンブス級の巨大な格納庫の中には、真新しいRGM-79SPジム・スナイパーカスタムIIが新たな主を待っていたのである。

12月21日、コロニーの残骸で満ちた旧サイド1暗礁宙域に進出した彼らは、公国軍のパトロール艦隊に遭遇。秘密兵器ソーラ・システムの存在を知られるわけにいかなかった連邦軍輸送艦隊は、出撃準備が整っていたMSをありったけ投入、敵艦隊の殲滅を試みている。

公国軍側がザンジバル級機動巡洋艦1隻、ムサイ級軽巡洋艦3隻、MS14機という戦力であったのに対し、連邦軍側が出撃させたMSは27機。真新しいRGM-79SPを駆るウォルフもまた、その一員であった。数で圧倒するだけに一方的な戦いとなったこの日の戦闘で彼は、3機のMSを撃墜、友軍機と共同でムサイ級軽巡洋艦1隻を撃沈している。だが、これはほんの序の口に過ぎなかった。12月24日、宇宙要塞ソロモンに対する攻略作戦が発動されると、ティアンム大将麾下の第一連合艦隊に組み込まれたウォルフたちは、激戦に身を投じることになる。そして、この戦いで彼はMSを8機、ムサイ級軽巡洋艦1隻、パゾク級宇宙輸送艦1隻を撃沈。怒涛の勢いで認定戦果を上



[illegible]小競り合いに過ぎず、初めて大きな戦争である一年戦争[illegible]では、様々な経歴を持つパイロットたちが実績を積み、MSの戦術を確立していった。リト・ウォルフもそうした、ひとりであり、戦闘機パイロットであった彼はMSに機動とする空中戦の概念を持ち込み、「踊る黒い死神」の二つ名を不動のものとしたのである。

積みしていったのだ。

さらにウォルフの戦いは続いた。ジオンを脱した公国宇宙攻撃軍の残余の追撃任務に従事した後、星一号作戦の発動に伴い宇宙要塞ア・バオア・クー攻めに参加。激戦に次ぐ激戦を渡り歩き、死神は戦場で踊り続けた。だが、ここで彼の悪運も尽きてしまう。U.C.0079年12月31日、4度目の補給を終えて出撃したリト・ウォルフ中尉のRGM-79SPは、ついに二度と帰還することがなかったのである。彼の戦死が確定したのは、終戦より半年以上も経過してからのことであった。コロニー公社から委託を受けて掃海作業にあたっていた民間会社の作業艇が、漂流していた黒く塗装された連邦軍製MSの胴体ブロックの残骸を回収。軍関係者の調査により、リド・ウォルフ中尉のRGM-79SPであることが確認されたのだった。記録によると、腹部にビーム弾が命中した形跡があり、コクピットは半ば溶解していたとのこと。遺体は確認できなかったものの脱出システムが作動した形跡もなく、ほどなく戦死と認定。二階級特進の上、軍籍から外されている。一年戦争におけるリド・ウォルフ少佐の認定戦果は、ア・バオア・クー攻防戦における最後の補給時に報告されていたものまでを含めて、MS計68機、艦船計4隻であった。これは地球連邦軍を通じて、第一位に位置づけられる大記録である。

なお、余談であるが彼が最後まで気にかけていた母は、公国占領下のパリでもたくましく生き抜いていたという。粗暴な夫が事故死した時には涙ひとつ流さなかったという彼女も、息子の戦死という凶報を受けて泣き崩れたというが、ウォルフが遺した遺族年金によって晩年は穏やかな暮らしを送ったとのことである。そうした意味においては、かつて少年時代のウォルフが抱いた母を助けたいというささやかな願いは、叶えられたと言えるかもしれない。■

STAFF

【設定監修】
草刈健一

【テキスト】
大脇千尋

綱村 空
草刈健一

【メカニカルイラスト】
瀧川虚至
シラユキー

【パイロットイラスト】
シラユキー

【マーキング　コーションデザイン】
草刈健一
大里 元

【モデリングデータ協力】
BANDAI SPIRITS ホビー事業部

【CGモデリング】
ナカジマアキラ

【SFX Works】
GA Graphic編集部

【装丁・デザイン】
ハギハラシンイチ (number4 graphics)
河津潔範 (number4 graphics)
吉野英武 (number4 graphics)

【監修】
株式会社サンライズ

【アドバイザー】
巻島顎人

【編集】
佐藤 元 (GA Graphic)
村上 元 (GA Graphic)

【企画協力】
BANDAI SPIRITS ホビー事業部「エース・パイロットログ【U C 編】」
後藤 豊 (BANDAI SPIRITS)
時本喜吾 (BANDAI SPIRITS)
星 大介 (BANDAI SPIRITS)

【協力】
有限会社 ハンズ

【編集協力】
西岡浩二郎 (リバージュ株式会社)

【商品管理】
瀬島弘行 (SBCreative)

【業務管理】
正木幹男 (SBCreative)

【営業】
永井 聡 (SBCreative)
伊藤和幸 (SBCreative)

【印刷管理】
大野貴和 (共立印刷)

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT GUNDAM MSV ACE PILOT LOG

編マスターアーカイブ 機動戦士ガンダム MSV エースパイロットの軌跡
2018年9月30日　初版発行
編集　ホビー編集部
製作　GA Graphic
発行人　小川 厚
印刷　共立印刷株式会社
発行　SBクリエイティブ株式会社

〒106-0032 東京都港区六本木2-4-5
営業部　TEL 03-5549 1201

落丁本、乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします
定価は、カバーに記載されております

©創通・サンライズ
©SB Creative Corp

ISBN 978-4-7973 9720-8
Printed in Japan

本書「マスターアーカイブ 機動戦士ガンダム MSV エースパイロットの軌跡」は「公式設定」ではなく、ガンダム関連作品に登場するMSやパイロットなどについての歴史・技術研究書です。したがって関連作品などと異なる設定解釈が含まれる場合がありますがご了承ください。

SB Creative　GA Graphic　4

マスターアーカイブ 機動戦士ガンダム MSVエースパイロットの軌跡

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT GUNDAM MSV ACE PILOT LOG

©創通・サンライズ

SB Creative

ISBN978-4-7973-9720-8
C0076 ¥2700E

9784797397208

定価 本体2,700円 +税

1920076027000

©創通・サンライズ

SB Creative

